

和達清夫名誉会員を偲んで

初代気象庁長官で本学会の名誉会員和達清夫博士は、今年1月5日腹部大動脈瘤破裂で急逝されました。享年92歳でした。博士は昭和20年代に6年間にわたって理事長として本学会の運営を指導され、その後も理事あるいは評議員として学会の発展に貢献なさいました。その功績により、昭和44年には名誉会員に推挙されています。申すまでもなく、博士は地球科学を中心に多くの分野での後世に残る偉大な足跡を記されましたが、その概略は本誌2月号に掲載いたしましたので、ここでは触れないことに致します。

日本気象学会常任理事会において、和達名誉会員の業績を顕彰して追憶するこの追憶特集を企画することに決定されたのを受け、「天気」編集委員会では藤谷前委員長を中心に編集作業を進めてまいりましたが、寄稿者を含む多くの方々の協力によってこのような形で掲載することができました。

（「天気」編集委員会）

学会理事長代理と「天気」編集委員長名の連名で学会内外の多くの方々に寄稿をお願いいたしました。47名の方から早速にそれぞれの思い出を込めた追悼文を寄稿していただきました。少数ではありますが、博士の歩まれた足跡を全面的には肯定されていない方々からも先生を偲ぶ心温まる追想が寄せられたことは担当者として印象深いことであります。時間的な制約など諸般の事情により、寄稿願えなかった方があったのではないかと気がかりですが、ご寛恕をお願いする次第です。それぞれの執筆内容については原則として手を加えることなく、ほぼそのままの形で掲載いたしました。しかし、なにぶんにも70年近くも昔のことを含んでおりますので、あるいは記憶違いなどから事実と違う内容も含まれている心配もないとは言えませんが、執筆者の思い出として尊重したいと考えております。また、原稿の長さの制限を厳守された方も大幅に越えた方もありましたが、これもそのまま掲載させていただきました。執筆者の現在又は元の肩書きや所属、および原稿作成日付につきましては、総て省略して統一いたしました。

なお、所蔵されている先生の写真の提供をお願いしたところ、多くの方々のご協力を頂きました。紙面に限りのあることから、残念ながらその全部を掲載できませんでした。その取捨選択には苦慮いたしましたが、なるべく普遍的なものを優先して末尾に白黒で一括掲載することとし、個人的色彩の濃いものは割愛させていただきました。ここにお礼を述べると共にご理解を頂きたい次第です。

（担当 関口理郎
藤谷徳之助
里村雄彦）

ユーモアを大事にされた先生

朝 倉 正

「気象庁長官は偉い学者がなるのだ」という観念が私にこびりついている。多分、初代長官になられた方が和達先生だったからに相違ない。

30年も以前のことになるが、その頃は毎月のように気象庁第1会議室で気象学会月例会が開催されていた。若かった私が和達先生に接することの出来る唯一

の機会でもあった。先生は最前列に座られ、研究発表者にはいつも心暖まるときには皮肉をこめられた質問をされるのを聞くのがたのしみだった。先生の質問には絶妙なバランス感覚がこめられ、暖かく研究者を見守っておられた。当時、一つの考え方にこだわり、これに反することは受け入れられなかった私にとって、

先生の奥の深い考え方には大いに啓発された記憶がある。しかし、時には反発を覚えたが今から思い返すと、若気の至りとは言え、はずかしい限りである。

先生の質問にはいつもユーモアがこめられ、月例会を明るくされた。ユーモアを大事にされた心のゆとりが、先生の長寿につながったに相違ない。パーティがあると、先生の周りにはいつも笑いの渦がまいていた。中でも忘れられないのは、アメリカから帰朝された時の話である。DAY を DIE と発音する国の人に、IGO TO HOSPITAL TO DIE (DAY) と言ったという話に大笑いになった。こういう遊び心を大事にする指導者が少なくなっただけに、暖かな先生が一層懐しく偲ばれる。

気になる思い出もある。先生は気象庁長官を務めら

れた傍ら、一時期日本気象学会理事長をなさった。そんな折、同学会は定点観測廃止に反対する案を議決し、気象庁長官に申し入れることになった。そのため、先生は理事長をやめられ、会場を去られたが、その時のうしろ姿に何か申し訳なく悪いことをしたような気がしてならなかった。

後年、御元氣な秘けつをお伺いしたら言下に「義理を欠くことですよ」とおっしゃられた。だが、名誉会員の高橋浩一郎先生の葬儀委員長をなさった折、90歳の御高齡にもかかわらず御遺族と共に長時間立っておられた。恐縮し、先生の健康を案じた御遺族などが椅子に座るよう何度もお願ひしたが、最後までお座りにならなかった。柔和な先生の内に秘めた強い一面をみる想いがした。心からご冥福を祈るばかりである。

思 い 出

有 住 直 介

和達先生には永いことご指導戴いたのですが、さて書くとなると私の筆跡も手伝い先生のことは全然わかっていないことを痛感致します。ただ思いつくままに思い出の一端を書かせて戴きます。

先生に初めてお会いしたのは、中央気象台航空気象課に勤めるようになった時、昭和17年の9月末か10月始めだったと思います。藤原咲平台長にご挨拶した折、和達先生にもご挨拶するように云われたからです。先生は静かにいろいろお話下さった後、ご自分の書かれた闘病の本を下されたことを憶えて居ります。温厚な立派な方だと思いました。

先生が満州でご苦労されている頃、私事で恐縮ですが、私は昭和19年の夏に応召となり、初めは二等兵で苦労を致しましたが、昭和20年9月に現役満期となり、職場に戻りました。藤原台長にご挨拶した時の「ご苦労でした。君の席はあけてあるから直ぐにでも行って働きたまえ」という暖かいお言葉は今でも耳に残って居ります。以後しばらくは高層課の調査掛長として働き、分会長に選ばれたりもしましたが、昭和24年はからず中央気象台長賞を戴いたように憶えて居ります。昭和25年に和達台長からお呼びがあり、天気図解析の勉強に1年間アメリカ合衆国に出張しませんか、ということでした。日本から電報で出している太平洋

天気図でわかりにくいところがあるという意見が外国船から出ているので、予報に経験のない人に天気図の描き方を新たに勉強して来て貰いたいとのことでした。よくよく考えた末お受けすることになりました。その後出張でアメリカ合衆国にお出でになった和達台長とロスアンジェルスでお会いしたことも楽しい思い出でした。砂漠をご覧になりたいとの先生らしいご希望でビヤクネス先生と台長にお供をして砂漠の入口まで行きました。この辺の砂漠の特徴はところどころに立っているいわゆるカクタス・トゥリーとブッシュですが、熱心に観察して居られた台長のお姿は印象的でした。この時のお写真は後に見せて戴きました。後のことですが、砂漠は雨の少ないものと思っていましたのに、砂漠の真中で強雨に遭い、砂漠に無数の川ができて流れるのを見て、びっくりすると同時に先生にもお見せしたいと思ったことでした。

昭和27、8年頃だったでしょうか。藤原滋水さんに誘われて先生の官舎のお宅に伺い、家族俳句会に加えて戴いたことがありました。先生始めお子さんは皆さん和氣藹々と楽しまれ、先生のお母さんが俳句の師匠でしたので、やさしい中にも凜として批評をされ、誠にうらやましいご家庭だなあと感じた次第でした。私も下手な俳句を作り、ご指導を受けて勉強になったこと

を憶えて居ります。先生は沖縄の「琉風の碑」に見られるような立派な句を作られる方でした。

何かのことで先生にお会いした時、在任中大変だったことは何でしたか、とお聞きしたら、「それはチリ地震津波の時でしたね。あの時は辞表をふところに大臣の説明に行きましたよ。」と云われて、あとは口をつぐんでしまわれました。それ以上云うと誰かが迷惑すると思われたからでしょうか。先生はそういう方だったように思います。

晩年になってから、お願いして大野義輝さん幹事の先生のお宅での集まりに出席させて戴きました。主と

して理子さんが食事等のお世話を下さったのですが、その時々に興味ある話が出て、楽しい集まりでした。その頃は先生は写真の整理等もして居られたようでした。

何度か私的なこともお願いしたことがありますが、「よし、わしにまかせとけ」と云うようなことは申されませんでした。必ずしばらくしてから朗報を届けて下さいました。先生はそういう誠実な方でした。

先生の人となりは、清濁合せ飲む、スケールの大きい、大局を間違いなく掴む方だったと思います。昔風に云えば、君子の手本でございました。

先生と鳥島気象観測所と私

池田芳三

昭和21年1月に連合国総司令部最高司令官 AG 00093 GC を以て鳥島における気象観測を指令され、同年2月中央気象台鳥島臨時出張所が設置された。事務は総務部企画課（大和順一氏）で行なわれ、当時総務部長の先生が事務取扱いを兼任なされた。

同年2月指令実施のため備船 LST 030 で所要の人員28名が器材と共に東京港を出港、鳥島現地で上陸に際し上陸用舟艇が岩礁に乗り上げ運航不能となり、23名は一応上陸したが他に小舟を持たない LST は八丈島に引返し小舟を入手再び鳥島に到着、陸上の不利な状況で心身共に疲労した上陸員23名を收容し、開設を断念して3月9日引揚帰京した。

同年7月に観測船凌風丸で鳥島調査団22名が測候所建設に関し詳細な調査を行い8月に帰京した。

同年11月中央気象台に離島事務室が設置されその主事に先生がなられ副主事に大和順一氏がなり鳥島測候所創設業務が始められる。（長野測候所より出向の宮崎本弘技官この事務に当る）

私は昭和22年2月中央気象台離島事務室勤務を命ぜられ長野測より上京し先生の手で宮崎技官と共に創設の準備事務をし、同年4月鳥島臨時出張所創設事務に従事すべしの命を受け、5月15日守屋淳所長以下47名（観測員、工事人、作業員）が凌風丸に資材積載し東京港を出港21日鳥島に着くも天候不良で資材揚陸は難行の極みであった（後で判明したことであるが内地より約1か月早い梅雨期であったのである）。雲は低くたれ

雨の日多く陸上の設備作業も大変な労苦であったが、

同年6月1日観測業務、26日には通信業務を開始する事が出来た。この時先生から祝福と激励の電報が届いた。

昭和23年5月私は鳥島勤務中急に身体不調となり背部全体に激痛を起し身動き出来なく言語もままならず、無線通信連絡（トンツー、トンツー）、本台無線現業には急を知り先生が来ておられ、病状を聞き直接に指示された。その結果鳥島近海航行の内地向船 STQO 95 に救援を受け帰還。横浜の中央病院に入院急性湿性肋膜炎に胆のう炎併発と診断治療し事なきを得40日で元気になり復帰し先生のところに挨拶に行くと「良かったネお大事に」と温い言葉を頂いた。

昭和31年4月月夜山山頂ドームを設置し遠隔高層観測実施の運びとなり、7月には新庁舎及待機所完成、高層観測施設の落成式及鳥島気象観測所視察に先生他関係官と八丈島から神官が来島行事が行われた。

先生は所員と共に数日を過されて、劣悪な無人島でこんなもてなしを受けてとことのほか満足をされたことを耳にした。

そして31年のこの年中央気象台は気象庁に昇格し第6代台長の先生は初代の気象庁長官となられ、昭和38年退官された。

昭和40年11月鳥島は震度4の地震に続いて有感地震、火山性微動が頻発し火山活動が憂慮され鳥島の観測業務中止全員帰還した。この後備船により鳥島附近

洋上観測がなされて昭和42年6月離島課を解散した。

思えば昭和22年開設し42年廃止と測候所としては短い寿命であった。

同年9月に気象庁鳥島クラブ「鳥島」編集委員会発刊“鳥島”と伝う島の記録写真と特記文を合せかかわった人達の記念の書(127頁)を出版した。この書に身に余る序文を先生にしたためて頂いた。先生自ら開設、

そして引揚まで先生は何時も劣悪な条件の鳥島勤務員のことを思い心痛めておられたことと思う。廃止で一番ホッとされたのは先生ではなかったかと、当時を想い、気象記念日、旧友の集いで先生の温和で心温まる姿にお逢いすることが出来ないことの淋しさを身に感じて……………合掌

和達さんと天気相談所

伊坂達孝

昭和21年の2月初め、私は和達清夫予報部長から、すぐ来るよう連絡を受けた。敗戦から半年しか経過していない時期で、社会の混乱は未だ收拾の方向さえ見えていなかった。

当時、予報当番のサブが私の仕事で、予報課に属していたが、課長からでなく部長の呼び出しに、訝しさと軽い緊張があった。

和達部長は、これらかの時代は、気象台でも一般市民に直接サービスをする窓口を作ったらと考えますが、君の意見はどうか、といった趣旨の発言をされた。

なぜ、大勢の予報課員の中から私が呼ばれ、意見を求められたのか、確かな事情は判らない。恐らく予報当番の折りに、久米庸孝氏と、これからの民主的な社会と気象事業のサービスの在り方について、雑談したりしたことが一つのきっかけだったのかも知れない。

私は和達部長の発想には一も二もなく賛成であった。予報部の男子職員2名、女子職員1名を配置してくれることになり、私を含めての4人は、早速その準備に取りかかった。

予算はゼロ。場所は旧図書館の1階の一隅を使うことになった。この窓口のネーミングは、部長の発案で天気相談所に決まった。

椅子に座って双方が対話の出来る、ベニヤ張りの木製のカウンターも速成で造られた。書棚や衝立で仕切って、ともかくも15坪程の急造の相談所が開設されたのは、月末の25日であった。

その間、和達部長は時々顔を出され、いろいろと助言などされた。開所後もふらりと寄られては、思いつかれたアイデアを、どうかねえと示されたり、一晚

考えた「お天気いろはカルタ」を持参されたりした。

その頃、戦後の混乱のため鉄道便で送った荷物が届かなかったり、間違った場所に送られたりすることが多く、市民からの問い合わせが国鉄に殺到していた。

そこで、秋葉原駅に小荷物迷子相談所という窓口が出来て、その便利さが好評だった。役所の相談所第1号でもあるが、天気相談所は実にこの種のものでは2番目になる。

この天気相談所開設に係わり、話し合いの機会を多く持ったことで、それ以来、「気鋭の地震学者和達博士」は、私にとって、柔軟な考え方をされる、幅の広い、江戸人の気風も少し残された、多趣味の教養人として、「和達さん」と申し上げたほうが相応しい存在になっていった。

私のドイツ語の恩師、和田顕太郎先生が、学生時代からの和達さんの生涯の親しい友人だったので、先生を通じて知った和達像も、一層の親しみを感じさせたのだろうと思う。

和達さんが未だお若かった頃、お宅には明治、大正の著名な文人、文化人などが絶えず出入りしていたという。そんな文化的雰囲気のある家庭環境の中で、和達さんは日常の生活の中で、こういった人々と接する機会も多かったようである。

洋画の手ほどきを受けられたのも、あの異色の画家、牧野虎雄からだったというから、「和達サロン」とも呼ばれていた、その頃のご家庭の環境が想像される。また、高浜虚子の仲のよいライバルで、その作風などもいつも対比される、俳人河東碧梧桐を交え、家人や友人達と句会をとにもされたという。

和達さんが泉鏡花について話される時も、「泉さん」

だったり、「鏡花さん」だったり、身近の人の話であることは、私にとって、ある種の驚きを伴った、印象深い思い出の一つである。

これも、戦後直ぐのことであったが、当時、中央気象台の職員親睦団体だった「大和会」が高見順氏を招いて中村記念館でチェーホフについての講演会を催したことがあった。

和達さんは最前列に座られて熱心に話を聴いておられた。そして講演後には、その日の講演では出なかったチェーホフの社交性、例えば執筆中であっても、家に客が訪れれば中断して会話に加わった、という彼の生活態度を、作品との関連でどう捉えたらよいか、といった質問をされたように記憶している。

高見順がこれにどういう答えをしたかは忘れてしまったが、私はその時、これは高見順のことでもあり、

和達さんご自身のことを含めての想いではないのだろうかと、勝手に想像したことを思い出してる。

後年、私は労働運動にかかわるようになり公人としての和達さんと対決しなければならない局面を迎えたりした。しかし、私は台長でない和達さんのことがいつも念頭にあった。

昭和22年に44歳の若さで中央気象台長になられてから、気象庁長官時代を含め16年間。更にならぬのご高齢まで、さまざまな科学技術関係の公職がブラックホールのように、否応なしに和達さんを呑み込んでいった。

日本の社会はひょっとするとより大きな受益の機会を失したのかも知れないと、時折思ったりもする。

改めて和達さんのご冥福を祈ります。

和達清夫先生を偲ぶ

磯野謙治

先生の“深発地震”に関するご研究など地学、気象学を含む地球科学の諸分野の基礎から応用にも及ぶ多くの研究、また中央気象台、気象庁の業務の発展に尽されたご業績、また日本学術会議、中央公害対策審議会その他で広く日本の学術の発展、環境問題の解決のために指導的役割を果され、多くの成果を挙げられたことは周知のことここで改めて述べるまでもないことであろう。

先生のご業績の一端について私がうかがうことができたのは大学の理学部物理学科の後期（第3学年）の時であった。“気象学演習”のテーマを探している時に、ある先輩からのすすめで、“深発地震”に関するご論文を読み深い感銘を受けたことは今も記憶に新しい。その後、中央気象台に勤める様になった当時は先生にお目にかかる機会が無かったが、中央気象台、気象庁在職中はいろいろご指導をいただいた。

先生は頭脳明晰であられると同時に独特のユーモアのセンスとやさしさをお持ちの方でした。ある会議の散会后、会場の出口付近で先生が後から私の肩をたた

かれて「岡田（武松）先生だったらこう言われるよ、君はどう思うか」と笑みを浮かべられながら、その会議でのある議論に関して言われた。その言葉は岡田先生独特のパラドキシカルで正鵠をえた表現であった。

何年前かに新宿内藤町の先生のお宅に伺った際には寺田寅彦先生の記念の品を見せて下さって、寺田先生の思い出などいろいろのお話をして下さって、楽しい一時を過ごさせていただいた。

先生に最後にお目にかかったのは昨年早春のころで、その時も大変お元気で、お顔のつやも良く、「場所を提供するから、昔の気象台の仲間と一緒に来て賑かに話でしようじゃないか。私の処ではいくら賑かにしても近所迷惑にならないから」と言って下さった。そのご厚意に甘えてその様な集りを持つ前に永いお別れをすることになったことを大変心残りに思っております。

先生のご生前のご人徳と大きなご業績を偲びつつ、先生のご冥福をお祈り致します。

和達先生からの御手紙

今 里 能

なんでも投げやりの私としては珍らしく、和達先生から頂いた御手紙は全部とってある。私は昭和30年3月末日付で本台の離島課から鹿児島地方気象台へ転任を命ぜられた。これには一寸した経緯があった。新潟へ行ってくれないかと先生から云われたとき、不埒にも私は、豚児の健康にかこつけて、寒いから嫌だと申し上げた。先生は、そうかと云われただけだった。数日おいて、今度は、鹿児島はどうかと云われた。もう寒いとは云えないので、私はお受けした。先生は非常に喜ばれて君は又嫌だと云うのではないかと思っていたと云って顔をくずされた。

鹿児島に着任して3か月経った頃、先生から最初の御手紙を頂いた。昭和30年6月5日付である。

「御赴任以来御元気のことと存じます。遠い所に御一家御移りなされ、いろいろ御不便も多からんと存ぜられますが、奥様、御子様方恙なく御暮しかと御案じ申しております。一中略一私も元気で（筆者註、外国出張から）帰って参りました。外国もこれで少し一休み致し度く存じますが一中略一私の如き不相当者が会議屋になることもどうかと思われませんが、誰かは顔も売れ、応待も十分（心ぞうも十分）と云う人をこしらえておく必要があるとつくづく思いました。

貴兄御在京中はほんとうに公私とも御世話になりました。公私などと常套的な言葉は申しわけないと思うほど一中略一有難いと思っております。私の生涯でこの人には世話になった打ち明けて話し合った人という人は少ないのですが、その一人になって下さったことを心から感謝致します。」一後略。

私は先生の此のお手紙を拝見して、有難さに、頭に血が昇った。

鹿児島着任最初の夏は、南国の強い太陽が私達一家を楽しませてくれたが、それも束の間、9月29日には台風5522による51.4米/秒の暴風が吹荒れて、私達のドギモを抜いた。

御多忙であられるのにも拘らず、旬日後には先生は東京からわざわざ鹿児島や屋久島の視察に来て下さった。折悪しく、先生の屋久島御視察中に、桜島が大爆

発を起した。このときの経緯は、鹿児島地方気象台百年史に詳しく書いたから省略する。

さて、31年だったか32年だったか判然しないが、7月17日付で次のような御葉書を頂いた。

拝啓御写真有難う、毎度の御腕前で敬服、和製クーパー（筆者註、米の映画俳優）と自称してもすこしだらしないようですね。あのときは大変愉快でした。それにしてもカッカ（註、閣下）はもうおとり下げ願います。その代わり私も今後 Atama の話は敵につしみたいと覚悟しております一後略。ちなみに筆者は頭がうすい。

昭和33年の年度末近く、鹿児島吉野台に高層観測分室が落成し、和達先生は倉石管区台長を帯同して来鹿された。その後で頂いた御手紙、3月21日付である。

拝啓元気に昨朝帰庁致しました。一中略一久し振りに御目にかかり、長い東京時代、アメリカ相手の御苦労など思い出で、感無量のものがありました。鹿児島で長いことお骨折頂き有難う存じました。一中略一今度は多少お近くなりますが、また御苦労をお願いしなければなりません（後略）

私は3月末日付で名古屋に転任の命を受けた。

名古屋時代の2年目、昭和34年9月伊勢湾台風が東海地方を襲った。今里が鹿児島から台風を引っ張って来たと、台内外で揶揄されたものだった。

34年10月12日付の先生の御手紙が手許にある。

拝啓今回台風災害視察の大臣一行に加わり御地に参りました節は貴官はじめ貴台皆様の一方ならぬ御世話に相成り、御影様で無事任務を完了致すことが出来ました。誠に有難く厚く御礼申し上げます。

伊勢湾台風災害は聞きしに勝るもので、現地に伺い改めてその激しさを知り得ました。此の台風につき貴台のとられた適切なる処置は、一行に加わりました私にとりまして甚だ肩身の広い思いでありました。これ皆貴官はじめ皆様の職務遂行の責任感と日頃の御精励の結果のあらわれとして、この機会に重ねて御礼申し上げます。以下略。

私の名古屋勤務は3年余で終り、再び東京に戻った。

鹿児島、名古屋時代を通じ、先生から戴いた書簡は、年賀状等を除き10通にのぼった。後年、口頭では先生のお叱りをうけた事もあったが、ここに挙げた先生の

御手紙には、どれも暖い御心がにじみ出ていて、私としては身に余る光栄であった。泉下の先生、有難うございました。どうか安らかに御眠り下さい。

バラック庁舎時代の思い出

岩崎 三夫

私が戦後初めて和達先生にお会いしたのは昭和22年7月末であった。シベリア抑留生活から解放されて復員したときのことである。舞鶴で200円を支給された。貰ったときは大金だと思ったが、煙草を買おうとしたら10本入1箱30円というのには驚いた。眼鏡を買ったらほとんど無一文になってしまった。帰郷のための乗車証を呉れるというが、行く先をどこにするか迷ってしまった。昭和18年10月に樺太の豊原気象台から応召したときはまだ独身で父母兄弟は皆樺太の落合に住んでいたのでも無事に内地に引き揚げていくかどうか定かではなかったが、とりえず父の実家(福島県相馬郡磯部村)に行くことにした。しかし、仕事のことも考えなくてはいけないので、まず中央気象台に出頭し、生きて帰ったことを報告しなければならないと思った。

混んだ汽車に乗り、蒸気機関車の煙に悩まされながら夕方上野駅に着き、付近の引揚者用の無料宿泊所に1泊し、翌日中央気象台に出かけた。神田駅の周辺は一面焼け野原になっており、ホームから気象台の時計塔と無線の鉄塔が見えたように記憶している。人事課で復員の報告をした後、藤原台長に会いたいというので藤原さんは辞められてこの4月から和達さんが台長になられたと言われて今浦島の感を一層強くした。和達さんからは「よく帰ってこられましたね。十分に静養して勤務に復してください」と労われて感激した。その日のうちに企画課に勤務することが決まり、安心して田舎へ帰ることができた。私は和達さんが退職されるまで企画課を動くことがなかったので割合近くで15年以上和達さんに仕えることになったわけである。

当時日本は占領下であり、気象業務は第2143気象隊の管理下にあった。何をすることもSCAPIN(連合軍最高司令官指令)に従わなければならない、台長であった和達さんの気苦労も大変なものであったと思われる。

当時の庁舎は昭和15年落雷のため焼失した跡に応急

的に建てられた一連のバラック建築で、天井は戦争中焼夷弾対策のためアンペラに取り替えたままになっていた。もちろんほこりは入り放題である。こんな部屋に米軍の兵隊が入ってきて嫁いびりの姑よろしく掃除が悪いと文句を言ったこともあった時代であった。

しばらくは平穏な日々が続いたが、昭和23年2月いわゆるフリーノート(定員3500名に削減)に端を発した行政整理問題が起こった。連日連夜のように緊急企画会議が開かれ、会議の事務局を担当していた私達は目の回るような忙しさだった。現在のようにワープロや複写機があれば案の修正も簡単にでき、会議資料を迅速に作成できるのだが、当時はタイプの打ち直し、謄写印刷と非常に手間がかかった。和達さんは時々私達の部屋に顔を出し、軽妙な話術で笑わせながら私達を激励してくださったことが思い出される。いろいろと紆余曲折はあったが、当初の案よりはかなり緩やかな線で決着を見たのは幸いであった。これも和達さんの統率力と誠実さの現れであろう。

昭和25年7月のいわゆるレッドパージ事件も心に残ったことである。私も命ぜられて竹平町にあった職員組合事務所の撤収や該当者の大手寮退去執行に加わったが、この時の和達さんの顔は苦渋に満ちたものであった。

昭和26年9月8日サンフランシスコで対日平和条約が調印された。占領下の重圧感から解放されたのである。気象業務法が昭和27年6月に公布され、12月に施行された。昭和28年9月にはWMO加入が実現した。対日平和条約の調印後日本のWMO加入手続きの担当者として働いてきた私にとってはこの上ない喜びであった。

昭和30年4月の第2回世界気象会議には和達さんがWMO加入後の初めての政府代表として出席した。和達さんは筆まめで機内食の絵を入れた手紙をくれたりした。昭和34年の第3回世界気象会議では執行委員に

選出され、以後毎年執行委員会に出席された。出発前の勉強会もなかなか大変であったが、また楽しみでもあった。帰国すると買ってきたお土産を賞品に官舎でマージャンをやるのが常であった。私もシェファーの万年筆を物にして大事に使っていたが、床に落としてペン先を傷め使えなくしてしまったのはいま思っても残念である。

昭和32,3年頃と思うが、昼休みに竹平町寄りの空き地でソフトボールの各課対抗試合が盛んな時期があった。和達さんも総務課の一塁手として出場した。守っているとき空いている右手をペロリと舐めるのが癖で

あった。企画課の有志が発行した「ソフトボールニュース」にも K. W 生のペンネームで毎回のよう寄稿してくれたものである。

和達さんと最後にお会いしたのは昨年2月15日天然寺で畠山さんの告別式のときであった。「90歳を超えた人はもう私ぐらいしかいなくなって淋しい。こんな場所でこんなことを言ったら悪いが、今日は楽しみにして来ました。ここに来ると古い知り合いの皆さんに会えるからね」としみじみ言っていたのが今でも心の片隅に残っている。心からご冥福を祈ります。

和達先生（とくに中央気象台長のころ）の思い出

大田 正 次

和達先生の写真をみると、いつの場合でも、頭髪がボサボサになっている。散髪のと、手でボサボサにされるそう。そんなおしゃれの延長か、和達先生はきちんと背広を着てネクタイをしめるのが好きではなかったようだ。「いつも、ぶらさがりの服である」とおっしゃったことがある。ぶらさがりとは、今でいう既製服のことである。先生は体格がよいから、ぶらさがりでも立派に着こなしておられた。

最近、テレビのニュースで、頭髪がボサボサになっている、ある政治家を発見した。彼は、自分の頭髪を、手でワザワザ、ボサボサにしていた。サラエボの政治家で、体格・風貌が和達先生によく似ていた。さて……

気象庁長官になられる前の中央気象台長の頃のことである。昭和24年～26年に、私は総務部の技術課長として、和達先生の近くにいた。当時気象台にいたアメリカ気象隊から、組織の簡素化及び人員の整理（いわゆる首切り）の指令がきた。

これらの対策として、組合交渉が頻繁に開かれ、和達先生はじめ総務部長、総務部の各課長が列席し、必要に応じて発言した。

交渉の議題は、何れも、法律に基く政令などの関連で、主として総務部長がきびしい対応をしていた。

つぎに整理された者の経済的な救済が議題となった。全国的に有料の講習会を開くなどの方法がとられたのはこの頃であった。

ところでその頃に総務部長を中心として生まれたタカラパーティと云う面白い話を紹介しよう。

新しい総務部長が着任したとき、総務部の各課長は部長の部屋に集まってタカラパーティなるものを開いた。当時タカラ焼酎は悪酔いしないと云われていたのでパーティに集った面々は、大型の湯のみでぐいぐいと飲んだものだ。誰かが焼酎を入手すると、皆が集ってきてタカラパーティになった。

タカラパーティは、時には発展して、皆で神保町などに出かけて、さわいだこともあった。

ところが、2年後に総務部長に運輸省転出の話があったときのことで、パーティの面々は、和達先生の官舎に伺って、総務部長転出の慰留をすることの了解を得て、ついでタクシーで市内の総務部長の公舎をまわって、慰留につとめたが不成功であった。

このような総務部長を中心としたタカラパーティがあったことを、和達先生は知っておられたらどうか、今となつては、知るすべもない。

なおつけ加えると、このタカラパーティは総務部長が運輸省へ帰任するとともに終わったのである。

一番好きな「先生のお写真」

勝 又 護

思い出をかみしめながら、先生の古いお写真やお手紙を拝見しています。印象的なものをいくつか拾ってみますと、まず初代長官になられてから間もないころのもの(1956年11月)、本当に若々しい。バックにはなつかしい時計塔も写っていて1時近くを指していますから、竹平の官舎から大手町庁舎にお戻りになるころでしょう。ついでながら、そのとき先生が「君も」とシャッターを押して下さった小生の写真も出てきました。1972年、勲一等のお写真は、複雑な思いを秘めて厳しく、ややお役人的？ 1985年文化勲章のお祝のときは、それこそ晴れ晴れと、功成った学者の顔。…、一つ一つ感想を述べていたら切りがないので先を急ぎましょう。

ご覧にいたたいのは、1986年11月父島にお供したとき、撮らせて頂いたもの(飛行艇のなか)(写真19)。この温顔こそ、正に人間「和達清夫」(84歳)の素顔で

しょう。心にいつまでも焼きついた、私の一番好きな先生のお顔です。「たいへん結構」とのお墨付きも頂きましたから、先生もお気に入り下さったと自負しています。このときは、3日間にわたる旅先のことでもあり、お気軽にいろいろなこと-学問のことから四方山の話まで、聞かせて頂きました。貴重なエピソードもあり、記憶の怪しくなった昨今、メモして置かなかったのが悔やまれます。

筆まめであられた先生のこと、お手紙やご筆跡はたくさんの方がお持ちでしょうが、英字は珍しいかと思えますので、披露させていただきます。これは、“BORN IN A COUNTRY OF EARTHQUAKES” Annual Review of Earth and Planetary Sciences, 17, 1-12, 1989 を下書されたものの一部です(写真20)。日本語と同様、端正な人柄が偲ばれます。

先生と南極

川 口 貞 男

先生は、多方面にわたって大きな業績を残されましたが、わが国の南極観測事業についても、先生の果たした役割はきわめて大きい。IGYでのわが国の南極観測参加を心から喜ばれ、気象庁長官として、当初から南極地域観測統合推進本部(南極本部、本部長は文部大臣)の一人として、また学術会議の南極特別委員会(南特委)の委員として、南極観測事業の計画立案、推進に尽力された。

南特委委員長は、学術会議会長が兼ねることになっており、昭和35年会長に就任され南特委委員長になられたが、38年1月会長を退いてからも、次期の朝永振一郎会長の要請もあって、南特委委員長を引き続きなされ、昭和46年まで実に11年間にわたって委員長として南極での観測研究などについて指導された。

又南極本部については、気象庁長官をやめられてからは、南特委委員長として、更にそれ以後は学識経験者として、昭和30年から実に40年間にわたって委員をつとめられ、南極観測事業を見守り、発展に尽力された。

私は昭和28年に気象台に奉職し、第2次及び第3次南極観測に気象庁から参加した。

第6次隊で打ち切られた南極観測の再開機運が出て来た昭和38年、気象庁を離れ、観測実施中核体となるために設けられた科学博物館極地課に移り、南極観測に専従することになった。

先生も、この年に気象庁長官を退官されたが、南特委委員長として観測再開に苦慮されており、私は気象庁時代よりも先生にお目にかかる事が多くなってい

た。先生の学術会議会長時代、政府に要望した「南極観測事業や研究の中心となる恒久的機関の設置」は、昭和48年国立極地研究所の設立により実現した。研究所の第1期の評議員をなされ、その後は顧問として、研究所の発展に御助言を頂いていた。

先生は1981年「南極観測を回顧して」という文の中で「南特委では、実にいろいろの事があった。中でもまず思い出されるのは再開への苦心努力と再開が実現したときの喜びである。新しい観測船について文部省の岡野さんと海上保安庁長官を訪ねたり、種々苦勞したことや、休止の期間に各国が観測を続けているのを見守っていた辛さもみな思い出である。」と記しているが、再開についての御苦心は大変なものであったと思われる。南極本部は和達副本部長を長とする「将来問題小委員会」を設け、再開に当っての諸問題を検討したが、最大の難関は、輸送担当機関をどうするかであった。「宗谷」の実績がある海上保安庁の同意を得られなかった。学術会議は早期の再開を要望していたが、輸送に防衛庁を使う事に対しての反対も一部根強くあった。自由民主党は南極観測再開を重要事項の一つとして取り上げ政務調査会に朝永会長と和達南特委委員長を招き、意見を聴いたが、その時の事を後年先生から伺った。「海上保安庁は無理のようだ、防衛庁を使うなら再開出来るがどうか」と返事を求められたが、すぐには答えられなかった。暫らくして私から10分間の休憩を要求し、その間朝永さんに「目をつぶって下さい、とに角、再開しましょう、私が責任をとります、と説得した」という事です。この後学術会議は、観測事業は、科学者に主体性をもたせ、船の運用はどこまでも純学術的な目的に使う事を前提に受け入れた。

南特委は、再開後の観測計画の基本方針を南極本部に提出した。観測を「定常観測」と「研究観測」に大別し、研究観測は門戸を広く学界に開放し、高度の学術研究を数年間のプロジェクトとして行う。定常観測

は学術研究上あるいは実用上不可欠な基礎資料であり、恒常的あるいは業務的に実施する必要があるもの、あるいは国際観測網の一翼を担い、その作業基準が国際協定で定められているものとし、主務機関として海上保安庁水路部（海洋等）、気象庁（気象）、国土地理院（測地等）などが当るとした。定常観測として国内の業務機関が担当することにした事により、精度むらのない資料を継続的に取得する様にしたのは大変意義のあることである。後年、先生に顧問会議などで、研究成果など御説明することが屢々あり、喜んでいただいたが、ある時、「こういう研究成果も大変大事だが、ずっと続けている定常観測のデータが重要な意味をもつ事になって来ますよ、しっかり続けて欲しい」と言われた。オゾンホール発見のきっかけとなった昭和基地での観測は、正に継続的に続けられた定常観測の成果であった。

先生は、南極本部委員として、48年11月～49年3月、第15次隊と共に、昭和基地の視察に赴いた。その事を「生涯の喜びである」と記されている。私がお伴出来なかったことは大変残念だが、御一緒に隊員から御様子をいろいろ聞いた。テントに泊られ、インスタントラーメンとパンの朝食を楽しんだりもなされた。しかし3月空路帰国した先生を待っていたのは、最愛の令夫人の訃報であった。

極地研究者に対する研究援助、極地観測の普及活動などを目的とする「日本極地研究振興会」という組織があり、先生は茅誠司先生のあとを引きついで理事長をされていた。平成6年11月14日、発足30周年記念パーティが開かれ、理事長挨拶のあと、広岡知男朝日新聞社友などと南極観測のはじまりの頃の事などを楽しく話されたあと、お帰りになるというので、私は司会をしていたが、同僚に代ってもらい、ホテルの玄関までお伴して車を見送ったのがお目にかかる最後となった。謹んで御冥福をお祈りする。

自然に親しみ、謙虚に生きる

河村 謙

1月5日、前日までお元気であった和達清夫先生が急逝された。長く日本の学術全般の頂点におられた偉大な先生を失い、誠に哀惜の想いに堪えません。心か

ら、ご冥福をお祈り申し上げます。

私が大学に入って間もなく、仙台管区の森田稔台長が高松で客死された。気象台の職員であった父のもと

で、構内宿舎から通学していた私は、日頃から目をかけて下さった森田先生の葬儀に、大学の2、3の友達と参列した。その折、中央気象台長の和達先生が見えられ、参列者を代表して、あたかも生きている友人に話しかけるように、切々と、弔辞をのべられた。この時が、私が、和達先生の温かいお人柄に接した最初であった。それから間もなく、かつて私が3年を過ごした福井市に、気象庁震度階に震度7を加える契機となった福井地震が発生したことも、地球物理の学生であった私の印象を深くしているのではないかと思う。

私が地磁気観測所の所長を勤めた最後の年が、わが国の気象・地磁気などの国際協力事業の契機となった第1回極年から100年の節目に当たっており、日本学術会議では、記念事業を行う気運が高まり、裏方を担当する記念事業小委員会が設けられ、国際協力事業特別委員会に属していた私も、小委員会の一員としてその準備に加わった。会合には必ず伏見康治会長も陪席され、功労者の顕彰には「和達・畠山両先生は別格」ということになり、特に、和達先生には記念式典で式辞をお願いすることに決った。また、記念誌「地球観測百年」の第II部の国際地球観測の思い出の頭に「地球とともに」の回想文をお寄せ頂いた。第2回極年当時、病後間もなくで直接事業を担当できず切齒された思い出、その後気象庁長官として、また、学術全般の指導者として、南極観測・ロケット事業の開始、IGY西太平洋連絡会議など数々の重要な事業に参画された思い出を語られ、地球の実態とそこに起こる現象を精確に観測することが地球環境の保全に如何に大切かを熱く述べられている。地磁気観測所も、柿岡に移転して70年に当たっており、気象庁のご理解を得て、「地磁気観測百年誌」を出版する運びとなった。その百年誌の第2部を回顧録として、柿岡に関係の深い多くの方々に寄稿して頂くこととし、何はともあれ、和達先生にお願いしたところ、二つ返事でお引受け頂くことができた。その折、久しく柿岡に行っていないので書く前に一度見たいというお申し出があり、多分、30年ぶりに、先生をお迎える運びとなった。迎えの車の中で、「柿岡の地震計を設置したのは私だ。たしか大正14年12月某日だったと思う。」と伺った。そこで私は、早速古い

日誌を繰ってみて、日にちまで伺った通りであることを知り、80才近い先生の記憶の確かさにびっくりした。また製作寸法の精度に依存した前の標準磁気儀の導入時のご苦労話など、私の知らない時代の柿岡についてもいろいろと伺うことができた。計算機システムを導入したカスマー標準磁気儀をはじめ構内を案内したが、先生が気象台に入られた当時使われていたガウス・ラモン法によるシュミット磁気儀は懐かしそうにご覧になっていた。地震計は76型に換わっていたが、ウィーヘルト地震計も使用時のままで、ご覧頂けた。当時、電化区間延長の問題が猶予のない状況にあり、気象庁の内外で、技術的な対策の検討や実験が行われており、昭和20年代の常磐線電化対策協議会に気象部内を代表された先生は、観測環境の悪化・観測所の将来を大変心配して下さった。お願いした手記にも、この問題について、遠い将来の人類社会のあり方をよく考え、慎重に結論を出すように望まれている。

昭和61年の始め頃だったように思うが、関口理郎さんと相談し、気象庁の南極・地震火山関係の有志で、文化勲章を受賞された和達先生と勲1等叙勲の永田武先生を囲む会を、下鶴大輔、宇津徳治の両氏にも加わって頂いて開いたことがある。当然、地震を中心に和達先生の含蓄のあるお話を伺う有益な一夕となった。

先生は、常々「災害は正しく恐れよ」と教えられていた。ご自身で、関東大震災後の建物の被害を調査され、下町と山の手で被害の状況も性質も全く異なっていることを体験され、自然災害はただやみくもに恐れるのではなく、その特性や本質を正しく理解した上で、自然の力の大きさを恐れよと説かれたものと思う。米寿のお祝いに集まった私たちは、先生から「自然に親しみ、謙虚に生きる」と書かれた小さな書を頂戴した。自然との調和を忘れた人類の奢りが地球環境を破壊することを懸念されて、ご自身の自然観として示されたように思えてならない。森林の伐採、濫開発、化石燃料の際限のない消費など人間の営みが、環境を変えていく。年々、多くの種が絶滅しているとき、人類も決して、そのうち外ではないであろう。今こそ、この先生の教えを味わうべき時と思う。

和達先生の思い出

菊地幸雄

私にとって和達先生という、いつも初めてお会いしたときのことが頭に浮かびます。昭和27年に札幌管区気象台に入りました。数年経って東京へ出張したとき、南極観測の準備で札幌の調査課長から東京へ転勤された守田康太郎さんを訪ねました。気象庁の構内を案内してくれたときだったと思います。当時、気象庁の構内は、今の竹橋会館のある場所と本庁のある場所に道路を挟んで分散しておりました。まだ中央気象台と言われていた頃のことです。竹橋会館のある場所から道路を渡って本庁のある場所へと歩いていくと「あっ、和達先生だ」と守田さんが言って向こうから歩いてきた人に挨拶されました。そして私を紹介してくれました。それから暫く和達先生と守田さんは立ち話をしておられ、私は傍に立っていました。その時の和達先生は見上げるような大きな人だったという印象が今も強く心に残っています。先生は背が高く、お会いした場所がゆるやかな坂になっていて私が低い所にいたせいで、先生のもっている雰囲気こそ感じさせたのかもしれませんが。

2度目にお会いしたのは、それから30年ほど経った予報部長の時でした。依頼を受け旧友会の昼食会で「予報業務の現状」という話をしました。和達先生は「庁議で報告を聞いているようでした」というような感想を述べられ、2、3質問されたように記憶しております。この後は、和達先生とお会いする機会が時々ありました。特に、竹平会でお会いすることが多かったように思います。いつも座談の中心は和達先生で、いろいろな話題にふれられました。先生のお話から、常に自然を真剣に見つめておられる態度を伺い知ることができ感銘を受けたものでした。元気象庁長官の内田

英治さんが、和達先生のお話しを記録に残しておきたいと言っておられましたが、目的を果たさずに急逝されました。ある時、先生に長生きの秘訣を訊ねましたら「けっして無理をしないことですよ」と答えられたのを覚えています。気象庁退職後も先生はいろいろな要職に就かれ、お忙しかったことでしょうが、無理をしないよう余裕をもって過ごされたのだと思います。しかし、考えてみますと、忙しい中で余裕を持って過ごすのは誰にでもできることではないように思います。

ある時、二宮長官に用事があって気象庁に出かけました。来客中とのことで秘書室で待っていると、たまたま和達先生も来られ暫く二人で待つことになりました。その時先生はいろいろ世間話をされました。集まりがあってお会いする時とは違い、なにかとても親しみを感じました。今思うと、それが先生と親しくお話のできた最初でもあり、また最後でもありました。

先生から頂いた物が2つあります。1つは米寿のお祝いの会に出席したお礼にと、若い頃の写真と「自然に親しみ謙虚に生きる」と書かれた写真大の色紙、それから毛筆で書かれた丁寧なお礼のお手紙です。ご高齢にもかかわらず、会に出席した1人1人に書かれたのだと思います。先生のお人柄が偲ばれます。もう1つの頂き物は「地震」という表題の中公文庫の本です。昭和8年に書かれた地震の啓蒙書ですが、平成5年に復刻されたものです。竹平会るとき先生は「今度こんなものを出してくれました」と言いながらその本を下さいました。どちらも大切にしておこうと思っています。

和達先生の間接話法の功罪

北岡 龍海

私は先生とは丁度10歳違いの後輩であって気象庁在職時代から今年のご逝去迄長い間業務遂行上も又個人的にも親しくご指導を頂いた一人であり、先生は我々後輩の良き手本として何時までも御元気であらん事を願っていたし、又それも未だ数年は大丈夫であろうと期待していたところ今回の急逝は誠に意外であり、又誠に残念な事であった。気象業務遂行上先生からの直接のご指導は頂く事は出来なかったが、先生とのつながりで今でも記憶に残っている事で、又先生のご意見をもう少しよくお聞きしておけば良かったなと思われる事を中心にここに記して、これが今後の気象事業の良き運営と発展に少しでも役立つ事になれば、これも先生の御遺徳の一つになるだらうと乞い願うものである。

それは私が昭和26年9月から38年3月迄在任した高層課長時代に先生から御下問のあった次の問題と、高層観測のやり方に就いてのアメリカ気象局の方法に就いての視察結果のお話の思い出である。

御下問のあったのは気象庁の行うべき高層観測の上限高度の問題であり、又そのつながりから日本で行うべきロケットによる高層観測のあり方に就いてのものであった。これに就いては、当時持っていた私の意見として、成層圏上部の気温極大層であるとされていた高さ約60km位迄は気象庁の責任として考えるべきであろうとしたが、これの必要性を検討するため又これの気象事業や気象学進展のために果たす効果を出るだけ科学的に日本の気象学者が独自の研究で煮詰めて見る事が出来るようにする事が先ず必要であろうとした。

そしてそのような研究が日本の気象学者の間で果たされるのには、ジェット気流の南北に適当な地点3か所位で適当な時間間隔で行われる事が望ましいという結論を、当時企画課長であった古谷源吾氏をまとめ役とし、当時測器課長だった吉武素二氏と高層課長だった私とで検討した案として提出した。それが期待した通りの実現には至らなかったが今日の陵里のロケット観測所の実現となった。しかしこれが最初期待してい

た役目にどの位貢献し得たかは残念ながらまだ知る事は出来てない。

次の問題は高層観測の運営上に先生からいわれたアメリカに於ける高層観測のやり方に就いての視察旅行のお話であった。

ここで標題の先生特有の間接話法の功罪に関連してこの話に関して次に詳述して見よう。それは昨年未近くの何かの会合で先生が私に洩らされた次の二言が妙に印象に残るからである。

「今まで自分の死に就いては考える事も無かったが、最近自分の死のことを考えるようになった」。私が自分の身近な老人の死の状態を見て感じていた「人間にとっては死は一大事業でありますね」と先生に何回か言った事もあったが、それに対しては何の反応も示されなかった先生のお話であったので、びっくりして元氣そうなお顔色から「まだまだお元氣のようですので我々の励みにも何時までも元氣でいてください」と申し上げるだけであった。そしてこれはその後でか又前であったか、或いは最近の別の機会であったか確かな記憶はないが「北岡さんは物理出だったかね」との問いが私にあって「いいえ天文です」とお答えしただけで何で今頃そんな質問が出たのか、私が天文出である事はとっくの昔ご承知の筈だったのに、と不審に思った。今考えて見ると、その当時は、1981年3月からアメリカと同じ性能のセンサーに切り換えられた日本の白塗りのサーミスターセンサーの赤外放射誤差問題とその後1992年10月からバイサラゾンデとほぼ同様のセンサーに切り換えられた新ゾンデ気温センサーにも認められた同様の誤差問題に取り組んでいて漸くこの問題の最終結論を出し、気象庁長官のすすめもあってこれを気象学会機関紙に投稿してその編集委員会の判断を待っていた時期でもあった。そしてこの問題の検討のため、センサー表面の赤外放射吸収性能や、表面への水蒸気氷着問題、それに関係するかも知れないセンサー内部構造の熱伝導係数問題等センサーの物性に関係する諸問題を及ばず乍らも、頭の中で掘り下げるのに苦労した時であったので、先生は私が6年前1989年

2月の気象旧友会の昼食会席上で日本ゾンデの放射誤差問題を話した時以来、或いはこのゾンデセンサーの放射誤差問題には関心を持っておられて、この調査結果に心を痛めるところがあったのかなあと今になって思い返している。

若しそうだとすると、この問題に就いて直接先生に何の説明もすることもせず過ごしてきた私の不敏をお詫びするとともに、高層観測の自動化に就いて持っていた私の問題意識と、当時の責任担当者としての私がこの時採ってきた処置などを次に述べて、これが今後の気象事業や気象学の発展に何らかの参考になれば幸いであり、又それが先生にあったかも知れない心痛を癒す事にいくらかでも役立つことになればと思う。

先生のお話が、1929年10月の琉球出張の後だったか、又は1935年11月か1936年8月のアメリカ出張の後だったか、その話がどこでどのような機会に私にされたかなどに就いては確かな記憶はないが、当時の日本の高層観測の実施作業の態様を振り返って先生のお話の真意を追想して見よう。

私が高層課長になった始め頃から、少なくとも1929年頃迄は、日本の高層観測での使用電波の周波数は400 MHz帯であって、気球の追跡は等感度方式と称する方向探知機を手動で操作して風の測定を行うという状況であった。従って風の観測にはどうしても最低1人の観測員が観測終了迄この気球追跡作業に専心する必要があったし、又周波数の関係から風の測定精度も充分とは言えない状況であった。これが駐留米空軍気象担当将校からの要請と援助を受けて当時米空軍使用方式の1680 MHz帯での自動追跡装置による観測に切り換えられたのは30年以後の事であった。一方気圧、気温、湿度の探測は、それぞれ空盒気圧計、バイメタル温度計、毛髪湿度計の気象変化に伴う機械的な動きを、符号の変化に変換してこれを地上の観測者に伝送する方式であったので、この観測にも別の1人の観測者が張りついて符号の受信作業を行う必要があった。そしてこれで得られた3要素の情報を1枚のP-T図と称する用紙に手でプロットしてその時の気温、湿度の高さによる変化の状況を知り、それから基準気圧面の高さを計算し、その層の気温、湿度の情報を取り出し別に計算された風の情報も含めて規定の電報コードに変換して中央に送信した。その後全体の観測結果を指針に従って整理し、月単位で月報としてこれを高層課に送付するという作業であった。

従ってこれに従事する観測員として管理者を含めて

1観測所12〜3名を配置していた。

これに対して米軍の観測作業はアメリカ気象局のそれと略同じと聞いていたが、風の観測は上述の通りの自動追跡装置による観測である外、気温、湿度の観測は白塗りサーミスター温度計とカーボン湿度計による温度、湿度の測定値をそれぞれの電気抵抗値に変換し、これを周波数変換方式で1680 MHzの電波にのせて、多数の気圧変化の接点毎に送られる規準抵抗値と照合させながら、地上に伝送し、これらの情報の気圧(高さ)による変化を1枚のロール記録紙に自記させる仕組みになっていて、観測者はこの記録から観測指針に基づいて整理し、上述と同じ国際通報コードで中央に送信するという方式であったように思っている。

従ってこれらの観測作業工程は日本の上記作業工程より遙に自動化され能率化されていたので、組織最高責任者の気象庁長官としての先生には大変魅力的であったと思われる、この方式が日本でも採れないかと思われたのは当然の事であらう。ただこれをその方の責任担当であった私に伝えるのに、その作業の能率のよさを紹介されただけでこういう方式を日本でも採れないかとか、検討して見て欲しいとかという積極的な意見は聞かれなかった。又そのような意思表示はその時私の直上管理者であった川畑観測部長からはその後に於いても何も聞くこともなかった。

当時このアメリカの気象観測方法は羽田に駐留のアメリカ空軍気象隊の高層観測実施の状況から既に承知していたし、また昭和28年には同気象隊の技術責任担当者であったGustafson中佐からの提案による日米ラジオゾンデの羽田に於ける比較観測が実施され、その結果の検討からアメリカの白塗りサーミスターには雲や、水蒸気、オゾン、炭酸ガスからの赤外放射誤差があり、問題であることも承知していた¹⁾。従って若しこの時先生からもっとはっきりした意思表示があればこれを話して、アメリカ方式をそのまま採用する意志のない事を申し上げることになっていたかも知れない。そうならばこれに対して、また何か先生からの質問なり、より具体的積極的なご意見が出ていたかも知れない。そしてこの意見交換の過程からこの問題は更に深く追求され、その後長い検討の末漸く得た本格的問題解明迄には到達出来なかったとしても、かなり早くこの問題のよりよい解決方法が先生のご了解も得る形で得られていたかも知れない。悔まれる事である。

1) Kitaoka, T., 1954, 高層気象台彙報, 5, 260-282.

高層観測の自動化に就いて当時から持っていた私の問題意識は次の通りであった。人間はとかく間違いを起し易いので、人間の五感に頼る観測方法は出来るだけ止め、器械による自記化自動化におきかえる必要がある。そして人間はその結果のチェックをしながら問題があれば器械やそれに付随するプログラムそのものを修正して行くことが出来るように客観的な記録が残るようにすべきである。又これによって観測者の作業負担の軽減が図られれば有難い。しかしこの際大事な事はこの結果の最も有効なチェックの実施を忘れてはいけないという事であった。

この考えからこれ迄の上述のゾンデの人間の聴覚に頼る符号受信作業はその後間もなく符号自動記録装置によることに改められた。しかしこれから後の整理作業は従前通りの人手によるものを残した。従って観測員の省力化には何の寄与もなされなかった。

それは高層観測の完全無人化は、気球の充填作業、気球にラジオゾンデを装着して放球する作業、各種測定装置の初動調整作業等を故障なく且つ安全に遂行する事は中々難しく殆ど不可能に近いと考えられる外、観測結果のチェック作業の必要性を考えると、観測に必要な最小限の従業員の将来の処遇も考えて折角現場でその時の実際の天気状況を身近に認識出来るこの機会を利用しての従業員の天気現象に対する知識習得による自己研修の絶好の機会を有効に活用すると共に絶対的に必要な観測結果のチェック作業を行わせる方が単なる省力化の利益を考えるより遙に有益であろうと考えたからである。又この作業はまだまだ多い未知の大気中に発生する異常現象の発見のチャンスにもなり気象学発展にも大きく寄与する可能性も秘めている事も考えられるとした。

そして観測人員の省力化には風の観測の自動化でこれに答えたいと考えていた。それは風の観測に於ける気球の空間位置の決定に気圧高度を使用する現在の観測方法には絶対的誤差の残存の問題もあり好ましくないが、スイス気象台長の Legeon 博士は既に気球迄の直距離の測定をこれにかえて行うエコゾンデ方式の

開発に成功してもいたし、当時の川畑観測部長もこの方式に賛意を表していた。私もこれと同意見でこの方式の開発に成功すれば、気球追跡の初動作を人手でやるだけで、後は観測員なしに、地上から最上層迄の風の状況が地上風の自記記録を見ると同じように手に取るように見られるようにする事が出来ると考えた。そしてこのような装置はその後館野高層気象台に装備され、その試験で成層圏内の高さ 18~20 km にあった乱流層内で気圧高度と実高度との差が最大 3.6 km にも達するという異常気象が時に存在するという新知見も得られた²⁾。そしてこの方式の全国展開が実現すれば、現在未だ原因不明とされている小型航空機の雲中における山岳への激突事故や、通常運航旅客機や軍用機などに時に起こるニアミス事故などの原因究明にも役立つ事になるだろうとして、この展開を後任者の努力に期待した。しかしこの館野に於ける試験的運用もこの外 4 か所でのより簡略された同じシステムの試験的運用も 1981 年 3 月から実施されたゾンデのアメリカ方式への切替えの時期と前後して残念乍ら中止された。因みに略同時期に別個に開発が行われていたアメリカ空軍ではこれと略同じ方式の観測システムが現業化されていると聞いている。

以上が私の高層観測業務上で先生と交流のあった事項に関連した問題の思い出である。近く「天気」の情報欄に掲載される予定のゾンデの赤外放射誤差問題に就いての私の報告にここで述べた思い出も加え、これらも参考にし、更に上でその必要性を強調した観測結果のチェックに就いては地方から中央を通しての最も効率的な方法とシステムを充分検討した上で、出来るだけ早く日本の高層観測システムが改善され、最近気象庁の画期的な決断で実現されようとしている民間気象関係者による局地気象予報の実施にその有力な支援資料として有効に機能出来るよう、気象庁関係者の努力を期待したい。そして又先生にあったかも知れないご心配の 1 日も早い解消が図られることを念願し、先生の安らかなご冥福をお祈りしてこの報告を終わることとする。

2) Kitaoka, T., 1962; Proc. Intern. Symp. on Stratospheric and Mesospheric Circulation, Berlin, Germany.

和達先生の横顔

木村 巖

「君は静岡出身だね」…「ハイ」と応えると、「そうだろう」一吾が意を得たり、という表情で念を押された。重苦しい空気の漂っていた口頭試問の場に、ドッと爆笑が沸いた。

昭和11年、日支関係は不穏な空気を孕んでいた。その年の5月、当時の測候技術官養成所は臨時に講習科生10数名を募集した。測候技術官が職工技術官と混同された時代のこと(岡田武松著：測候瑣談)、気象業務の予備知識皆無だった私は、田舎での煩い浪人生活から逃避すべく応募し、口頭試問の場へ漕ぎ着けた。私は初めての東京の空気に呑み込まれていた上に、偉い先生方の居ぶ前での緊張感から、その応答も上の空であった。先生方は中央气象台長の岡田武松先生を中心に、藤原、築地、関口、奥山、和達の諸先生であったことが後で判った。そして、冒頭に掲げた御発言の主が、実は和達先生であった。

それにしても、私の応答の中で、どんな言葉尻を捉えて、静岡出身と断定されたのか、全く分らなかった。尤も、方言や訛は、当人は意識していないものらしい。ともあれ、これが和達先生との出会いであった。

その後、先生に直かに接することになったのは昭和30年頃である。私は創設以来約10年間の剣山測候所勤務から、中央の総務課へ配転になった。当時、竹平町構内には官舎群があり、先生もそこにおられた。歴代の総務課長はその官舎群に居住し、執務時間外の業務案件について、長官との連絡に当たっていた。ところが、新任のK課長は自宅から通勤することになり、補佐官の私とその代役を命じられたので、屢々長官官舎に入りすることになった。しかし、先生の幅広い御見識の前には、たとえその片鱗に触れ得たとしても、“群盲象を評す”の類で、それは所詮“葦の髄から天井を覗く”程度の、言わば管見記にすぎないことを、予めお断りしておきたい。

(その1) 式辞の原文作成要領

ある測候所の竣工式における長官式辞の内容について、御内意を伺いに上った。先生は白紙を広げて、第一、冒頭の挨拶、第二、当地を選定した理由、第三、

当所の気象事業上の役割、第四、当地方に対する気象サービス等々、各項目ごとに行間を広く空けて書き並べ、さて、夫々の項目ごとに、具体的内容を埋めていこう、と指示された。

私は従来、この手の作文は、盛り込む内容を反芻しながら綴り、順列組合せ、試行錯誤を繰り返しながら、体裁を整えていった。

恥かしながら、私はその合理的効率的な手法に蒙る啓いて頂いたのである。

(その2) 攪乱戦術の麻雀

竹平官舎群のなかで、時折、先生を囲む麻雀会があり、私にも屢々召集がかかった。雀歴、職歴共に大先輩の中で、悪戦苦闘を強いられることも多かった。局面が膠着して、暫し捨て牌に戸惑っていると、先生から静かな語り口で、「キムラさん、〇〇の件はどうなりましたかね」と、業務上の話題を投げかけてくる。これはヤバイなと思い乍らも、つい場に対する警戒心が揺らぎ、要注意として温存していた牌を捨ててしまう。と、間髪を容れず“ロン”という先生の歓声が挙る。また神経戦にやられたか、という悔しい場の残像が、今も雀卓を囲む度に浮かんでくる。先生はこんな茶目っ気な横顔を時々覗かせて。

(その3) ソフトボール大会のレギュラー

先生が長官の当時、大手町の狭い空き地で恒例の各課対抗のソフトボール大会が催された。先生は総務課のレギュラーとして出場された。何分総務課チームはロートルが多いだけに、先生は張り切っておられた。事前に攻略法も伝授された。先生は仲々の野球通で、その理論に体力が追従すれば、鬼に金棒、玄人蹴である。先生の指定席はファースト、打順は7、8番。バッターボックスでは、長打を狙う構えで立たれる。相手の若いピッチャーは滅多に長官に接する機会もないだけに、既に位負けの体で、つい中途半端な投球となる。先生は得たり、とばかりお得意のバンド戦法。ファーストへ全力疾走される。いや、疾走という表現は、その2文字に失礼かも知れない。ともかく、息せき切って走られる。野手は戸惑い気味に捕球し、慌ててファール

ストへ速球をほうる。こんな場合、得てして暴投になり易い。先生は易々とセカンドを奪う。塁上に立った先生は、御自分の策戦の奏効に嬉々として、次打者に楯を飛ばされる。——御一緒にプレーをしながら、こんな状景を何度も目の当たりにし、チームは盛り上った。先生の天真爛漫な一面を垣間見る思いであった。

更に、そのワイワイガヤガヤの渦の中で、私共無頼の徒と一緒にゲームを楽しんでおられたのである。

以上、公務を離れた場から先生の横顔に迫ろうとした私も、その偉大さの前には所詮“螳螂の斧”。矢張りこれも、位負けの所為だったのでしょう。

和達先生と極地

楠 宏

「地震で家具が倒れないように固定しましたよ」と話されたのを覚えている。先生が学術会議の南極特別委員会の委員長をされておられ、その下で私も委員を務めていた頃だったと思う。さすがに、地震の専門家であり、国の防災事業などに関係されておられる方は違うと思ったものだった。それと同時に、家庭内のことなど、ざっくばらんに話される気さくな方との印象を強くした。

会議中の席ではよく配布資料などに鉛筆を走らせておられた。字か絵かわからないが、よく手が動き、うつむき加減に他人の発言を聞くともなく聞いておられる様子であった。しかし、論点などはしっかり把握されており、会議がだらだらと長続きすることはなかった。また、南極観測の基本計画といった重要問題では、御自身で文案を作られたこともあり、要所要所をしておられた。委員会の幹事として先生に仕えて困ったことは全くなかった。

わが国の南極観測の創成期から関係しておられた先生が昭和基地を訪れたのは1974年1月、第15次観測隊に

同行されてであった。地球物理学者として、南極に行ったのは「生涯の喜び」と記されているが、夫人の訃報に接する悲劇も経験された。帰国後お会いした折、「昭和基地のゴミ処理計画はどうなっているか」と聞かれた。当時はまだ不十分な点も多く、その後南極条約協議会議でも取り上げられ、現在昭和基地の廃棄物は種類別に回収し日本へ持ち帰っている。こういった所にも先見の明がおありだった。

先生に最後にお会いしたのは昨年11月、財団法人日本極地研究振興会の創立30周年記念パーティーの席上である。同会の理事長として92歳の御高齢とは思われない元気な声で挨拶されたのが忘れられない。先生はわが国の極地研究を表からも裏からも推進されてこられた。最近わが国も北極研究への展開をみせている。このような時に先生から大所高所の視点で、わが国の極地研究の将来、さらに地球物理学の進歩について卓見を伺えないのは残念である。そしてまた地震災害についても…

謹んで先生の御冥福をお祈り致します。

出合いと別れ

窪 田 正 八

私が初めて和達先生を意識したのは、ある機会に、先生が満州（現中国東北部）の中央観象台に勤務されたことがあるとお聞きした時だった。私の伯父がその当時長春に住んでいたことをお話したところ、偶然にも先生はその家に暫らくの間滞在され、伯父が些かの

お世話をしたことが判明したのだった。それは私が中央気象台に就職して間もない頃のことであった。

もう一つ忘れられないことと言えば、先生が中央気象台長として警官隊を導入し、組合を排除されたのを、私は正門の上にあった予報課の窓から眺めていて、当

時組合の強い影響下にあった私の内側で、違和感が大いに刺激されたことであった。先生に対して反感すら覚えたように思う。

そうこうするうちにある日、私は台長室に先生を訪ねて、自分の将来について先生の意向を伺ったことがある。その時先生は唐突に（私にはそう感じられた）「前橋気象台に行く（転勤する）気は？」と問われ、私としては全く予期しない方向へ話が展開しようなのに慌て、咄嗟に「ありません。駄目です。」と返事をした覚えがある。その後は私の一身上のことでご相談したことはなかったが、もしこの時先生の勧めに従っていたら、私はその後歩んだ「数値予報」の分野とは全く別の道を辿っていたことであろう。

昭和29年前後の頃、東大の正野研究室と気象庁の我々若手研究者の間に、それまでの勤に頼る天気予報を脱皮して、より客観的な新しい予報技術の開発を目指そうとの気運が澎湃として湧き上がった。時を同じくして、米国プリンストン大学留学中だった岸保勘三郎氏から、数値予報の画期的な結果がチャーニー教授によって齎らされた旨が伝えられ、それはやがて世界的に評価されるに至った。数値予報の計算には高度の計算能力を必要とするため、日本でも米国から大型電子計算機を購入しなければならず、その実現に向け我々は、自らの頭脳を限界まで駆使し、手書きの計算で順圧モデルを解きなどして、皆で手分けして上層部に予算獲得を働きかけた。当時の予報部長鯉沼氏はレーダーに熱を入れていて、数値予報には比較的関心が薄かったが、「科学的天気予報」に深い興味と関心を示されたのが和達長官であった。私たちは先生の理解

を得て大いに励まされ、国会に先生を訪ねて陳情したことを感慨深く想起こそす。大蔵省での予算説明の折、担当のA課長に、「この計算機を入れるとどれくらい予報精度が上がるのか」と聞かれて、「どれくらいとは申し上げられない。」と部長が答えるのをうしろで聞いて、私は冷汗を流したものであった。A課長は私と高校同期生であり、後日「(大蔵省としては) 予算の要求にどの程度責任を負うつもりかを聞きたかったのだから、あの説明では説明にならず、通常の予算要求だったら駄目だったぞ。」といわれた。最近のクラス会で彼と会った時には、「あの予算は通過して良かったね。」と、コンピュータ時代突入を予感していたであろう大蔵省にとっても実のある予算だったと私は確信する。

和達先生との交わりでかなり最近まで続けられていたのは、先生のご自宅での放談会であった。先生のお気の向くままに気象庁OBを招いて下さり、倉嶋さんに続いて大野さんが世話係を引き受けてくれた。当初は無会費だったが、参加者が気にするのに先生が気を遣われて、千円という形だけの会費を徴収して下さっていた。この集まりの話題は多岐に亘り、私も時に毒舌をふるったことを懐しく思い出す。たまたま話が人の葬儀に及び、どういう葬式をして欲しいかが語り合われていた時、「葬式などは遺族に属することであり、仏式にせよキリスト教式にせよ死者にはどうしようもないものだ」との先生の発言に、出席者一同頷いたのが記憶に新しい。そこには、無神論を標榜しておられた先生の面目が躍如としていたように思う。今、偉大な個性が失われた淋しさを噛みしめている。

端正な知識人

倉嶋 厚

和達先生の随筆集『青い太陽』（東京美術）、「地震の顔」（自由現代社）、「病とたたかう一複十字の道を歩みて―」（国書刊行会）などの中から、先生の人生観がうかがえる箇所いくつか紹介する。1928年、国文学者、芳賀矢一博士のお嬢さんの国子さんと結婚された和達先生は、新婚1月足らずにして肺結核の咯血をして中央気象台を退職した（1931年復職）。「当時肺病は不治の病とされた。家に肺病患者が出れば肺病の家系であ

ると白眼視され、縁談にも差支えた」時代である。深発地震の研究から恩賜賞までの、年表ではまぶしいほどに輝いて見える期間に、先生は人生の奈落の底を見ておられる。「私などは、家庭の環境にめぐまれ、学校に職場に、何の苦勞もなくそこまで来たのであるから、もしこういう機会がなかったらただのわがままな、ひとりよがりな人間になったに相違ない。もしも病が治ったら、今度は新しく生まれかわった気持ちで人生

をやり直そうと思った…人の不幸は尊く厳粛なものである…」と後に書いておられる。また、結核が医学の進歩と社会制度の発展により克服された事実から、防災、環境保全などの困難な問題について、「百年河清を待つという言葉がある。これは不可能現象だからあきらめるといふ意味か、あるいは非常に困難だが努力すれば目的達成に近づくといふ意味に解するかは人によって異なるであろう。古人は前者の意でいわれたようであるが、私は後者の意味にとりたいと思う」と書く。先生の米寿（1990年9月）の記念の色紙に「環境人を造り、人環境を造る」と記されている。

「私は人を導こうとする意志はない。ただ共に泣き、共に笑い、幾分でも不幸なる人の役に立ちたいと思うばかりである…皇紀二千六百年（1940年）の重大時局に、そのような消極的態度は批判を受けるかもしれない…だが、我儘かもしれないが、指導者となることから自分は落第させてほしい」と書いた先生は、1943年（昭和18）年末、当時の満州国観象台長に転出した。ここでは航空軍の将官待遇の軍属だった。ある時、奥地に出張し、都合で軍の一行と別れて1人で新京に帰ることになり、駅の待合室で延着の汽車を待っていた。日が暮れると待合室に屈強な中国の労働者が集まってきて、腰をかけていられなくなった。「あちらに押されたりこちらに押されたり、泥と汗のにおいの中で、かん高い訳の分からない怒声を聞きながら、不安な長い時間を暗闇の中で過ごした…明るい所ならば、自分の着ている軍属の服で気が強かったかもしれませんが。しかし暗い所では、そんなことはまったくはかないものなのです。いまでも私は、苦しい時に、自分は昔のように軍属の服に頼っているのではないかと反省することがあります」

「もし幸福と不幸とが、数学のプラスマイナスのように差し引き勘定して、幸福が残ったから結局自分は幸福であるという考えであつたら…いつも随分惨めな

生活をしなければならないであろう。…この世の中は、各人にそう都合よくできているものではない。…幸福を不幸と差し引かないで、嬉しいことがあればそれを素直に幸福と感じて感謝の気持ちを持つべきであろう。…過ぎし方を振り返って、どんなに不幸だと思った場合もその中で幸福もあったことを感じている」

「学校を出て社会に出てからは、勇気を必要とする場合にしばしば出会った。勇気を出したように見えても、それは何か支えがあったことが多い。純粹に、正しいと信じたことそれだけを支えとして、勇気を持って行動することのむつかしさをしみじみと感じている」

最後に私が直接聞いた先生の言葉。

「大声で怒鳴りたくなるような怒りや不条理をこらえる時の不愉快さと、怒鳴ってから後悔する時の不愉快さをくらべたら、前者の方がはるかに容易に耐えられる」

気象庁を退かれてから、私の家でNHKドラマ『赤穂浪士』を見ていた時のこと。吉良上野介にいびられる浅野内匠頭が爆発寸前の場面で、先生は顔を紅潮させ、いくぶんかの怒気さえ表して、つぶやかれた。

「ただ、それだけのことじゃないか。それを辛抱しさえすれば、何事も起こらずにすむじゃないか。なぜ、辛抱しないのだ」

先生は親分的に面倒をみる人ではなかったが、「彼はよく辛抱しているね」と困難な状況下の他人の立場をよく推察し、時に許容し、時に人知れず応援の手を差し伸べておられた。

比較的近くから見上げる機会を得た私の目に映ったのは、類まれな才能に恵まれ、病を通じて人生への謙虚さを体得し、恩師・先輩を心から敬い、同僚からは親しまれ、後進には暖かく「あくまで希望あれ」といい、常に深く内省しながら真摯な努力を続けて前進して来られた、温厚で端正な知識人の姿であった。

中身がチョコレートの金メダル

小林 寿太郎

私の社会人としての第一歩は、中央気象台の航空気象課で、ここで大井正一さんのご指導を受けました。その折、深発地震に関する一連の研究で名を成してい

た先生が連名で霧などの気象関係の研究を続けられていて、その報文を示されて折にふれ一読するようにと勧められました。これが身近に先生を知った最初で、

出来の悪い私には多才な人に思えました。

戦後、私が気象研究所に勤務していた事も手伝い、先生が気象庁長官になられてもお会いする機会はありませんでしたが、研究所の代表として気象労組の副委員長に祭り上げられた折、組合交渉の場で、就職以来初めて御目に掛かれることになりました。当時の倉嶋厚委員長の説得力のある論旨の要求に対し、高座の玄人裸足の表情で、条理ご尤もとしながらも、同意を誘うと共に論旨を先取りしながら論鋒をかわされました。柔軟且つ巧みに回答され、回転の早い明晰な方との強い印象を受けました。学者であり、多方面にしたたかな手腕を発揮する、私には到底及びもつかぬ相手として心に焼き付きました。

その後、研究所に台風研究部が内部機構の改変を伴い新規増設される折、私のことが話題となったと聞き及びました。研究室が、気象ロケット・衛星の黎明期であったこともあり、この分野の先鞭をつけるべく方向づけられる事となり、このため、ご意向を示される機会はおたれませんでした。当時、京大の故前田先生を世話役とした宇宙物理関係と東大のロケット機器関係による研究グループとにより、この方面の研究の推進が図られていました。特に、故玉木先生は気象ロケットに関心をもたれ、気象関係者の仲間入りを歓迎され、私も仲間の1人にして頂きました。一方、文部省関係を除く研究推進を総括する科学技術庁も液体燃料によるロケットの開発に着手していました。このため、傘下として気象ロケット推進の意向が長官に寄せられ、庁内に故古谷企画課長を事務担当とし、錚々たる関係課長を委員として気象庁としての方針を作る課題、中でもロケット打ち上げ場所を新島でどうかを検討する会がおたれました。研究所からは、私が故武田企画担当補佐官とご一緒に列席する事となりました。

初めの挨拶といい、課題の整理・問題点の指摘や纏める方向づけなど、押し付けるでもなく実に手際よく簡明で、冗談を交えながら、表情豊かに会を取り仕切

り、推進され、天下一品の捌き方には頭が下がりました。その場の空気を察知されるのも機敏で、“科学技術庁傘下で気象ロケットの開発を進め、打ち上げ場所を新島とする”とするに必要な検討資料の作成は、実務担当が予想される故武田補佐官、岩崎企画課補佐官と私の三人に、最後の判断に必要な纏めは、企画課長に下駄を預けられました。その折、“実現する事になれば、某さんに、金メダルをあげなければならないね”と、真顔で言われた後、“中にチョコレートの入った奴をね”，と言われ、列席の一同は呆気にとられながら大笑いになりました。

この件は、三人の纏めが、東大の研究グループの協力が不可欠ということで、故古谷課長に答申し、御目玉をくって落着する事となりました。この辺の判断の機微は、窺い知れませんが、行政上の要請には可能な限り応ずるが、決して無理をせず、事に進める姿勢があったのではないのでしょうか。冗談が誤解されることがないのは、先生の人徳というのでしょうか、先生の育ちの良さと独特な孤高・軽妙な雰囲気がかもされるためと思えます。

私が観測部に在籍していた時、予想される駿河湾沖の大地震についての難しい課題が提起されました。最後には立法することで決着しましたが、この間、先生は、私には一言も意見も冗談も言われませんでした。全体の流れを静観し、邪魔にならないようにと配慮がなされていたのではないかと思います。今にして、金メダル紛いの冗談が聞けなかった事が残念に思えてなりません。

先生のご尽力により気象庁の地震・火山業務も三本柱の一つに発展してきております。人災はあってはならない、とよく言われましたが、この度の兵庫県南部地震による災害を御覧になられたらどう受け止められたでしょうか。先生のご冥福を祈りながら、金メダルの冗談を思い出し、地震予知について、いずれ近いうちに本物を頂ける人がでてきますと申し上げました。

ほんの落とし話

下 鶴 大 輔

昭和27年に和達先生の長女敦子と結婚し、40年あまりの長きにわたって私的に接する機会が多かった私に

とって思い出はたくさん有ります。知・情・意の兼ね備わった風貌と洒脱な話術で魅力があった一方で、裕

福な家庭に育ったためか世間知らずでわがままな一面も有り、また論争を好みませんでした。晩年にはしばしば拙宅に遊びに見えておりましたが、その時の会話は必ず《地震と火山噴火の関係》が持ち出されました。大地震があると近くの火山が噴火するケースがあるが、これについて二人で研究しようということでした。しかし、これも実らず他界されたことは誠に残念でなりません。いくつかのエピソードを述べてみたいと思います。

第一高等学校の時には、撃剣部のキャプテンを努め、大学の時にはアイススケート部に入っていました。その後はスポーツとは無縁となりましたがプロ野球の観戦に熱中し、大の巨人ファンとなりました。後楽園球場や神宮球場には足繁く通っていました。巨人軍の選手のサイン入りバットは自慢で大切な品物の一つになっていました。

碁・将棋・麻雀が趣味で、山本義一先生が上京された時には、自宅で碁の相手をさせられたと聞いています。自分が負けるともう一局とお願いして、山本先生が仙台にお帰りになる汽車に間に合わなくなったこともあったそうです。また、杉並区の本郷本町に自宅があった若い頃、碁の本を持って便所に入り、出るときに、その本をつい便器の中に落としてしまいました。当時はまだ汲み取り式だったために本はそのまま、便所から出て来て家族に「これがほん(本)の落とし話」と言ったそうです。

服装にはほんとに無頓着な方でした。つるしの背広を着て、いつもズボンはだらし無く裾を引きずっていても平気でした。帽子があまりにもひどいということで、外国製の中折れ帽子を買ったまでは宜しかったのですが、その新品の帽子を被ってプロ野球を見に行き、それを腰の下に敷いて観戦していたということでした。

若い時から洋画を見るのが好きで、気象台の官舎時代には神田日活や東洋キネマあたりに足繁く通ったそうです。お好みの女優はキャサリン・ヘップバーンとジュン・アリスンと聞いています。生前に淀川長治さんと昔の映画の話をしてみたいと言っていました。

時計の正確さについてはうるさい方でした。特に公共の場所の時計が正しい時刻を指していないものが多いと憤慨されていました。時計の正確さにうるさかっ

たのは、気象台に入って地震記録の読み取りや震源決定に際して刻時の精度に悩まされたからかも知れません。皆さんは自分の腕時計は正確でも、研究室の掛時計には無頓着なのは良くないと、私の研究室に来られたときに言われました。そのために、研究室に来るといふ時には、慌てて掛時計の針を動かしたものです。

たいへんなテレ屋で、知人のお宅に手土産を持参してお邪魔したときに、お土産を差し出すタイミングを失って、それを置いたまま辞去しました。すると、その奥様が「お忘れものですよ」と追いかけてきて手渡され、「やーどうも」と言って受け取り、本来差し上げるべきお土産をそのまま持ち帰ってきたこともありました。

忘れ物をする天才でした。拙宅に来て、帰りには必ずといって良いほど忘れ物がありました。そうかと思うと私の父の老眼鏡を持って帰ったり、ほんとうに世話が焼ける方でした。そのため、持ち物には名前を書いた紙をはりつけていました。

種々の国際会議や学会で外国人と接する機会が多かったのですが、英語があまり達者な方ではなかったために、「横メシ」といって外国人との会食は苦手なようでした。そこでトランプ手品を習得して、そのような時の余興に手品を演じて好評を博していました。

「さざえさん」の作者の長谷川町子さんがまだ駆け出しの頃、これを読んでたいそう興味を持ち、この漫画はいずれ大ヒットすると思ったそうです。そこで長谷川さんにファンレターを差し上げて激励し、我家には子供がたくさん居て漫画の材料には事欠かないからとして、「さざえさん」が大評判になる以前に官舎に招待したということです。

地球上のすべての大陸に足跡を残したいというのが故人の夢のひとつでありました。私がアフリカの火山観測に行ったのが羨ましいと口癖のように言っていました。南極への夢は捨て難く、ついに1973年の第15次南極観測隊に参加いたしました。翌年3月の帰国途次に、国子夫人が病に倒れ死去いたしました。私は急に死去の報を知らせるのに忍びなく文部省にお願いして入院の電報を観測船に打って載せました。帰国後の話では、それを知らされた時には妻がこの世を去ったと思ったということでした。

和達先生を偲ぶ

須田 滝雄

先生のご逝去を「巨星墜つ」と、この特集を企画された方は表現された。誠に関係者すべてが同感する嘆きである。長年お近くでご指導を受けた私にとっては、それに何かを加えなくては悲しみの全部は現わせないような気がする。それが何であるかは、よく分からない。強いて言えば、成長を続けて止むことを知らない巨木、朔風には身を挺して、烈日には日陰となって我々を守ってくれる大樹が、枯れたのでもなく折れたのでもなく突如として、我々の目では、見るができなくなってしまったような気がしてならない。

先生のご功績は、世界第一級の地震学の研究をはじめ、多岐に亘り数々の偉業を挙げておられ、私などでは、その跡を追って記述する力さえないので、然るべき方にお委せするほかない。ここでは、私以外には知る人も少ないと思われる事柄に関して、先生の一断面を述べてみたい。

戦後処理と復興ということは、どこの官庁でも企業体でも大事業であった。中央気象台においても、困窮と混乱の社会の流れの圏外にあることはできなかった。苦難の期間は、10年余にも及んだ。先生は、当初1年半ほどは、藤原台長の補佐役として、その後の長い苦難の時期は長として、難局に当たられた。

先生のように、お人柄による人望、深い洞察力、強引でなく説得的な指導力などを備えた人物でなくては、この時の嵐は乗り切れなかったであろうと、私は思う。国乱れて忠臣が、家貧しくして孝子が現われる、という諺をフト思い出した。私が先生の直属部下としてお仕えたのは、1年余に過ぎないが、戦後の情勢もあって長年に亘り会議などで、お近くに接する榮を得た。

戦後の困窮は国民全部に及んだが、物を生産する職にある人より、サラリーマンが甚しかった。中でも公務員の家計状態は悲惨なものであった。烈しいインフレに伴うベースアップも、法律によるため民間のように速やかに行なわれなかったからである。

組合の設立が認められて、中央気象台にも昭和21年春には全国組織ができた。上記の情勢の下にあって組

合の要求の眼目は待遇改善であったから、官も同調し得るものであった。

相手は、当面の長ではなく政府というフィルターを通して来る占領政策であると多くの組合員は考えていた。私は中央執行委員長として、台長が藤原先生の時と和達先生に変わってから暫らくの期間、幾度か団体交渉に出席したが、当初は雰囲気は和やかであった。

昭和22年2・1スト以後、占領軍の政策は次第に組合に対してきびしくなった。インフレの沈静という名目もからませ、占領軍は、官公庁の大幅縮減方針を打出して、中央気象台に対しても官署や人員削減の苛酷な要求を直接にメモランダムという形で突き付けて来た。フィーリー・ノートと呼ばれるものがその中核である。初めの内は、気象業務防衛とも言える点で官、組合共通するものがあつたり、官としても強く反対したにもかかわらず、かなり多数の官署や人員の削減が強行された。さらに国際的情勢の変化もあって、占領軍はレッド・ページを敢行した。こうした情勢のもとで、官公庁における組合活動は次第に先鋭なものになって行き、中央気象台の組合も急進と穏健と方向が乱れ、組合幹部の統制力も弱って行き、官との交渉の場は次第に荒々しいものになった。他の機関で官側を長い間かん詰めにしたという報道もしばしば流れた。こうした激化した時期は、私が組合をやめた後にやってきたのであったが、設立当時の責任者として、組合の暴走は防ぎたいものだと言っていた。元職員で辞めさせられた者が、組合幹部の中にいるのは、法的に組合と認められないから、交渉要求に応ずる必要はないと言って避けて廻るような官側幹部も現われた。先生は、占領軍からの種々な命令や要求に対処するほか、台長として的一般業務をさばかなくてはならない。

人生観を変えたと言われているような重い肺結核を経験された先生のごどこに、このような強いものがあるのかと、不思議に思われた。私は組合をはなれたのちも、先生が組合からの交渉要求を避けたり、逃げたりされた話は聞いたことはない。気象業務を守らなくてはならないという責任感と部下を、後輩を愛する心

だけが先生を支えていたように感じられた。そんな状況の頃、台長室に組合員が詰めかけ、何時間にもなるとの報に、私は台長室へ駆けつけた。多勢の組合員の怒号の中に囲まれた官側の人数は少なかった。台長のほかに2、3居たように思うが、大山人事課長以外に記憶はない。

数時間平行線をたどって来たことで、組合員は苛立ちを強め、いよいよ大声で叫ぶように詰め寄ったが、台長は黙して語らなかつた。この雰囲気は、言葉の暴力だけでは済まなくなると憂慮された。そんな時には飛び出して行かなくてはならないと思い、私は誰かに頼まれた訳でもないが、第三者というかオブザーバーという形で不測の事態をさけるため立ちつくしていた。業を煮やしたのか、外部から応援に来ていた者かも知れない若い組合員などから、台長に向かって「お前」とか「てめえ」という言葉が飛び出して来た。それを聞くに及んで、私は我慢できなくなって「紳士的にやれ」と大声で叫んだ。思わぬ方向から来た声に虚をつかれたためか、声の主が初代委員長であることを知った意外性にキョトンとし感に打たれたのか、一瞬の静寂が皆を包んだ。このきっかけで頭が冷やされたのであろうか、やがて引き上げて行った。

生まれつきの資質にめぐまれ、いつも和やかで、ひ弱そうに拝見される先生に、こんな辛棒強い面があるのに感嘆した。私などには忍耐の限界と思われる状況に耐えられた先生の芯の強さに驚嘆させられた。

この時にある幹部は警官の導入を進言されたが、先生は聞き入れられなかつたという。その時の他にも何度もそういう場面があつたが、先生は承知されなかつたと聞く。官の建物の一部を占據していた組合員を立退かせるためということで、警察署主導で警官が立入ったことはあつたが、どんな場合でも、先生の方から要請したことはなかつた。他官庁や大学などでは珍らしくなかつた行動であつたが、先生にはそれをされなかつた。愛する部下が目の前で緋付きにされることは、何時間もかん詰めに入れ、いわゆる吊し上げられるより先生にとっては辛かつたのであろう。

この時のご表情は、さすがに無然としておられたが、何か発言すれば、彼らが一層興奮することと察し無言戦術に徹せられたのであろう。

ふだんの先生はやさしく温厚で、怒りを表わされるような情景を見聞したこともない。

年齢もポストもはるかに低い私が、随分と苦いことを申し上げても、訓すようにご自分のご意見を述べら

れるだけで、大声で叱咤されるようなことは一度もなかつた。他人が叱られるのも見たこともない。行政整理などの対策会議では別だが、普通には、ニコニコ顔で、「ヤア……」というような調子で、先生が入つ来られると、その場が和やかという名の花が、パツと咲いたようになる天性が先生には備わっていたように思われる。前記した荒れた組合との交渉の場などのように特別深刻な状況下にあつた時以外は、職場における先生の雰囲気は、いつも明るかつたが、藤原先生の公職追放免除に力尽きた時の先生の沈痛なお顔は忘れられない。それと前記したフィリー・ノートなどに抗して人員削減の幅減少の対策会議で、審議を尽したが、逐に止むなしの決論を出さざるを得なくなつた時の哀愁に溢れた先生の表情も忘れることはできない。

前記したような先生の組合への対応が原因と考えられるが、先生を赤のシンパだと決めている政治家がいるという噂が流れた。後に気象業務法の法案作りや外局昇格の準備などの委員を委嘱されて、それに熱中している時にも何度か心配が私の頭をよぎつた。

それは、気象庁に昇格するのは喜ばしいが、長官の任命となれば、政治家の意向が強くなるから、その機に先生がはずされてしまうようなことにならないか、という心配があつた。結果からそれは杞憂であつたが、当時同僚から聞いたところによると、法案審議中の議会で、「外局になるのはいいが、適当な長官候補がいるのか」というような質問があり、政府側から「それは、もちろん現和達台長である」との答弁があり可決された。この人事は閣議で決定されるわけだが、こうした経緯もあり、この場も異論なく決定されたのであろう。質問者が何党の誰であつたか、また答弁者が誰であつたか、又聞きであつた私は確かなことは覚えていない。組合に対する姿勢もイデオロギーによるのではなく、気象事業と職員に対する愛情に基づくものであることを理解する政治家も多かつたに違いない。

こうして、先生は戦争で衰えた気象組織を守りかつ養い、その上に気象業務法の成立に努力され、さらには気象庁に昇格させて、法的、機構的に気象業務を確立された。他の方が述べられるであろうが、学問、技術の向上にも情熱を注がれ、今や世界に誇るわが国気象業務を築き上げられたのだ。それは、もとより先生お一人のお力ではないが、皆の力を結集することのできるご人徳と、異論に対しても説得し納得させる指導力、あるいは将来に対する優れた洞察力などが、気象業務をこのように早く立直らせ、かつ発展させるのに

物を言ったものと私は確信している。

上京さえすれば、いつでもこの巨木を仰ぎ見ることができると思っていたのに、今はそれも叶わなくなってしまった。この想いを何にたとえるべきか。若い頃、

父を失った時味わった寂寥感に似ている。先生の永年に亘るご指導に深謝しつつ今はただご冥福を祈るのみである。

和達清夫先生を偲ぶ

須田 建

私が初めて和達先生に御会いしたのは昭和22年6月、中央気象台渉外室に嘱託として採用された時である。この時の台長が和達先生であった。渉外室は進駐軍との交渉のため臨時に設けられた台長直属の機関で、部屋の位置も台長室に近いので先生と顔を会わす機会が多かった。渉外室では進駐軍、詳しくは第2143気象隊と中央気象台の間の往復文書の翻訳が主な仕事であった。

気象隊あての文書の中には台長自筆のものも含まれていて、達意の文章がきれいに綴られていた。しかし、無理な要求を婉曲に断わる回答文の場合には、挿入文がやたらに多く、文章が長くなって私の未熟な英語の力では手に負えないこともあった。「貴案は諒解したが実施は困難である」と言わざるを得ない先生の苦衷が察せられた。

台長は非常に多忙であった。「台長執務の現況」という記録が当時の気象台日報に残っている。それによると前年12月中の執務時間は、協議、面会、会議、外出、自宅勤務を合計して8時間40分で今では考えられない位の過密勤務体制である。これをよく乗りきられた和達先生の気力には敬服の念を禁じ得ない。

昭和23年には気象台としておそらく戦後最大の重大案件が持ち上がった。連合軍司令部からの強い要求による行政整理で、最初の提案(いわゆるフィーリーノート)では、業務の統廃合により定員を3,500に削減するというものである。

当然のこととして気象台は大きな衝撃を受け、それに伴い渉外室も忙しくなった。気象隊からのメモランダムが届けば直ちに和訳し企画課を通して部長会議に上提する。台長の決裁が済めば待機していた渉外室が回答文を英訳し気象隊に提出する。もし回答期限が翌日であるような場合には徹夜作業になることもあった。

台長はこの難局に対し、台内の対策会議を主宰することはもちろん、自ら2143気象隊や関係各省に出向いて説明するなど、削減数を最小限に食い止めるためあらゆる努力を重ねられた。翌昭和24年5月、定員法の閣議決定により中央気象台の新定員は5,205名と決められた。フィーリーノートの3,500名に比べれば削減数の大幅な軽減である。先生の献身的な努力が立派に実を結んだものと言える。

行政整理が片付いてからは気象台もようやく平静を取り戻し落ちついて仕事ができるようになった。先生も時間の余裕ができたらしく、時々渉外室に来て立ちながら雑談に興ぜられるようになった。また、日曜に郊外で開かれた懇親会に来ていただいたこともある。

私事にわたるが、昭和26年、私はフルブライトの試験に合格した。先生は以前から「アメリカ行き」を勧めて居られたので大変喜ばれ、ニューヨーク大学への1年間の出張を許可された。また28年に帰国したら、前からの希望通り予報部に配置換になり7年振りで本来の仕事に復帰することができた。先生からいただいた暖かい配慮に深く感謝する次第である。

先生は昭和31年、中央気象台の気象庁への昇格に伴い初代長官に就任され、昭和38年、多くの業績を遺して定年退職された。実に16年間にわたり最高責任者として日本の気象事業をリードされたことになる。

先生は頭の良い人であった。一流の学者であったことは今更言うまでもない。しかし学者には珍らしく行政能力と指導力にも恵まれていた。気象庁長官時代はもちろんのこと、退職後も別の官庁、大学、多くの審議会などで長として活躍されたのも先生の有能さの現われだろう。

先生は洗練された都会人であったが、同時にまた人情の厚い人であった。ただ、それを表に出そうとはされなかった。江戸っ子気質とでも言うべき洒脱さがあ

り、物事に拘わることや察しの悪いことを「野暮」と言われて嫌われた。趣味は広く、将棋、カード、野球、映画、落語などを好まれた。10年ほど前から「八さん、熊さん、御隠居さん」の問答よろしく、もとの気象庁の仲間を御宅に招いて杯を傾けながら歓談するのを楽しみにして居られた。私も参加したが、先生の話は

豊富で、気象事業から始まり社会問題や世界情勢及び尽きることがなかった。

1月6日の朝、新聞を開いたところ「和達清夫氏死去」の活字が目にはいり一瞬、茫然とした。永年、前方を歩いていた先導者の後姿が突然消え去った感じで淋しさの限りである。今はただ御冥福を祈るしかない。

和達清夫先生を偲んで

諏訪 彰

和達先生は、去る1月5日、92歳の天寿を全うされ、永遠の眠りにつかれました。元旦に年賀状をいただいただけでなく、12月20日夕、東京地学協会恒例の年末懇談会で歓談させていただいたばかりの私にとっては、まさに晴天の霹靂で、痛恨の極みでございます。心から御冥福をお祈り申し上げます。

先生は、偉大な科学者・文化人として、実に多彩な輝かしい業績をあげられ、趣味豊かで心暖かな御人柄と相俟って、広く国の内外から敬慕されておられました。私も、先生の中央気象台長―気象庁長官時代(1947～63年)を通じて、そのお膝元の地震課に勤め、親しくご教導いただいた者として、感謝の念をこめて、思い出のあれこれを記します。

敗戦の1945年末に中央気象台へ就職した私の初出張は、46年4月、和達総務部長と、観測部の鷺坂地震課長、研究部の井上地殻物理研究室長による、長野県松代の地下大本営予定地の実地調査への随行でした。肝心の和達先生は、GHQの急用で出張を断念されましたが、とにかく、先生の格別のご尽力で、翌年5月に中央気象台分室が設けられ、現在の気象庁地震観測所へと発展しました。

和達先生は、藤原咲平先生が中央気象台長御辞職後、公職追放令と重病に苦しまれ、奥様も御病弱という三重のご悲運に、深く心を痛めておられました。1950年6月の最後の各方面への募金活動や7月16日(伊豆大島大噴火開始)の藤原先生を囲む会は、私もお手伝いさせていただきましたが、両先生の細やかな師弟の情に強く心を打たれました。

折しも、和達先生は、GHQの指示で、8～11月に初渡米されましたが、その間に、追放中の藤原先生に万一のことがおありになっても、中央気象台としてはお

世話しかねるので、同郷の実業家や科学者などに呼びかけて善処してほしいとのことでした。結局、藤原先生は9月22日に亡くなられ、そのように取り計らうほかはありませんでした。

1951年春に伊豆大島、秋は浅間山へ和達先生をご案内した折などにご相談し、同年11月に諏訪市で催した藤原先生を讃える講演(和達先生)と映画(私が監修した「火山三原山」)の会は大盛会でした。その延長線上で、1957～61年に推進された藤原先生の記念事業は、同先生の郷土愛の強さや、寄付金の集まり方などが考慮され、霧ヶ峰への記念碑の建立と、日本気象学会の藤原賞の創設になりました。和達先生は、長官ご在職中のこの事業の実現で、肩の荷を下ろされたようでした。

先生は、日本学術会議の会長や日本学士院の院長なども務められました。前者の第4部地球物理学研究連絡委員会では、先生は地震、私は火山の委員を長年勤めましたので、先生のお車に同乗させていただいて会場へ往復するのが常でした。東京地学協会・日本火山学会・日本測地学会その他の役員会などについても同様でした。先生が話題豊富で、思い遣りがあり、相手に固苦しさを感じさせず、かつ、頭の切り替えが速いのに、感嘆申し上げずにはいられませんでした。

私の専攻の火山部門は、中央気象台内でもごく微小でしたが、先生は、「日本は火山国なので、その発展は君の努力次第だ」と励まされました。若輩の私が、東京地学協会誌「地学雑誌」の(1950～51年)伊豆大島噴火特集号(60巻3号)を編集できたのも、現在は会員1300名近い日本火山学会へと発展した最初の在京有志の談話会を52年5月に中央気象台で開催できたのも、先生の暖かなご庇護のお陰で、感謝の念を禁じ得

ません。難渋していた気象庁への火山課創設も今春漸く実現し、先生も喜んで下さることでしょう。

先生は、諸外国との地震・火山関係の交流・協力にも、意欲的に尽力されました。私を1958～59年に政府の長期在外研究員として米国へ派遣したり、海外からの有名・無名の地学者たちの相手役を命じたりされたのも、先生の格別なご配慮だったと思います。

国際測地学地球物理学連合の発展、国際地震センターや太平洋津波警報組織の育成に大いに貢献されたことは周知のとおりですが、私が特に密接にご協力申し上げたのは、1961年に東京で開催された、ユネスコの東アジア地域地震学(火山学を含む)・地震工学調査

団を囲んでの国際セミナーと、それに基づく国際地震学・地震工学研修(国内的には建設省所管)であり、私は現在もその運営協議会委員を務めています。また、日本で最初に開催された1962年の国際火山学会議では、和達先生に組織委員長をお願いし、私もその幹事を務めました。これらのことが成功したのも、和達先生のお陰だと言えましょう。

先生との懐かしい思い出は尽きませんが、1960(昭和35)年4月、伊豆大島で一緒に両陛下をご案内申し上げた時のほほえましい情景が特に目蓋に焼き付けられています。

和達先生と私

関原 疆

私は終戦時に復員して、大学卒業時に籍を置いていた高円寺の気象研究所に通っていた。先生については当時直接に仕事の関わりはなかったが大手町へ行った際昼休みの野球で一塁を守って居られるのを見た記憶がある。

組合の役員の肩書きで僚友阿部友三郎氏と共に国会議事堂に赴き政府側の答弁をしておられる和達先生にお眼にかかる事があった。先生は笑いながら「変な所へ来るなよ」と声をかけられていた。

昭和23年5月礼文島で日食観測があり、参加して空の紫外線分布の測定をしたのが足がかりになり、5、6篇の論文を書いた後に、昭和31年に東北大学から学位を貰う事になった。これを機会に放射の研究室を持つ事になった。

昭和39年にレニングラードで国際放射会議、米国ニューメキシコ州アルバカーキで国際オゾン会議があった。長官である和達先生は学術会議からの旅費と東京地学協会からのなにがしかの資金援助をとりつけられ、お陰で私は世界一周して両方の会議に出席する機会に恵まれた。これは私がお願いしてそうなのではなく先生の御意向によりそう命じられたのであり、責任を負わされたわけである。これを契機に前記協会との関係は未だに続いているが、その後の私の仕事が十分に先生の御期待に沿い得たかどうかについては何とも自信がもてない。但しレニングラードでは同

宿の山本義一教授が胃潰瘍の悪化で倒れ御入院という事件があったがその際連絡とか入院までの付添い等何がかのお役には立った。

昭和45、6年頃私は高層物理研究部長をしていた。先生は当時埼玉大学の学長をされていたのであるがその頃は全世界的に学生運動が荒れ狂った時であった。ある日突然に和達先生が訪ねて来られた。学生運動のとはっちりで学長の身が危険である。どこか分からない所に避難される様にとの総務部長の進言に従いここに来たのだとおっしゃられた。その折どの様な会話が先生との間にかわされたかは記憶していない。ただその様な折において戴いた事に対して私はいまでも涙の出る思いで嬉しく思っている。

昭和20年代から30年代にかけて气象台内の一高出身者の集まりが時折もようされた。場所は始めの頃は内藤町の先生の御自宅、後には本郷の江知勝あたりであった。私の一高生活は寮歌を唄い、運動部の練習をし、夜は学費かせぎのアルバイトの家庭教師といったものであったが100以上ある一高の寮歌の中で皆に普通に歌われるものは大体知っていた。ところが和達先生は我々後輩全員が全く聞いた事もない寮歌を歌われた。寮歌を覚えるのは普通先輩から歌いつがれて覚えているものであるが多分和達先生は楽譜により寮歌を読みこなされていたのであろう。その歌は所謂パンカラとは程遠い優美な音楽的なものであった。一般論と

して一高生の音楽的センスの伝統は必ずしもないわけではない。上野の森に通い「玉杯」の名曲を生んだ楠正一氏をあげなくとも前記100以上の寮歌の大半が一高生自身の作曲になる事を述べれば充分であろう。

一高会はしばらく続いたが派閥をつくってはとの懸念からとりやめになった。先生はそれを大変残念がって居られた。

和達先生と沖縄、「琉風之碑」の建立

高 良 初 喜

和達清夫先生が戦後沖縄へおみえになったのは中央気象台長のとき1回、気象庁長官のとき1回、また沖縄で海洋博が催されたときその前後に3回、それぞれご来島の目的は違いますが計5回におよんでいます。

このうち業務指導で初めておみえになった昭和29年6月11日から1週間のご滞在が、とくに記憶によく残っています。当時、南西諸島の気象業務が日本政府(中央気象台)の管理下を離れ、米軍へ移管されるといった歴史的な出来ごとがありました。それから既に4年半が経過していましたが沖縄にはあの頃の困難や不安の余韻がまだ残っていましたから先生の来島を心待ちにしていたのでよく憶えています。先生には創設もない琉球気象台で職員を前にして「この度の移管は、皆さんにとってはどこか里子にやられたような不安にかられたかも知れませんが、自分にとっても身を削られる思いでありました。もう琉球気象台と中央気象台とは同じ役所ではありませんが、これからも親密に協力して仕事をしてゆきたいと思います。今までと変らない一心同体のものと思っています……」中央気象台長としての先生から直接このような温かい思いやりのあるお言葉が聞けるとは思ってもおりませんでしたので、ひじょうに感激し、今もって忘れることが出来ない思い出として残っています。那覇市に戦後初めて琉球気象台が誕生し、沖縄における気象業務の再建に頑張っていました我々に、どれだけやる気と希望を与えて下さったことかわかりません。

先生の最初のご来島は、このほかに先生にとって、また大きな意義があったと思います。それは旧沖縄地方気象台戦没者職員の慰霊碑を琉球気象台と協力して建立したいとする先生長年の願いが達せられたことであります。日程の1日をさいて具志幸孝台長の案内で、その終焉の地である沖縄本島南部の伊原を訪ね碑の建立場所の選定にも当っておられます。この伊原は田中

静夫台長代理の率いる旧沖縄地方気象台職員が米軍との熾烈な戦に巻き込まれ、南へ南へと後退させられ最後に辿りついたところでもあります。

遂に力つきここで無念の最後をとげられました。先生にはここにしばらく足をとめられ、万感胸に迫るものがあつたでありましょう。「夏草の原に散るべき花もなく」と詠まれています。そして碑銘が「琉風之碑」に決まり、日琉気象官署職員からの募金でもって建立が進められました。碑は翌年完成、先生の句は碑の台座の岩盤に戦没者名簿と一緒に刻まれています(写真17, 18)。

昭和30年12月15日には「琉風之碑」の除幕式が行われ、和達先生の代理として大阪管区気象台長大谷東平先生が参列されました。

また先生には、本土在住のご遺族の方々にも気配りを頂き、相談ごとがあれば気軽にに応じて下さったと聞いています。台長代理としてこの伊原の野に散った田中無線課長のご遺族に対しては、ことのほか心が痛み、遺子満さんの就職に際しては親身になってお世話下さったと聞き全く頭の下がる思いがしました。

先生には昭和51年の夏、海洋博覧会協会のお仕事で来島されています。前触れもなく、ひょっこり気象台にみえられ、「昨日協会の職員に琉風之碑を案内して貰った。初めて碑を参拝される方には極めて不親切だ。県道に面した入口に碑への案内板を出しなさい。また碑をみるだけでは、どなたをお祀りしてあるのかよくわからない。碑の由来記を建ててはどうか」など現地にいる我々が当然気付くべきことですが全く恐縮しました。また先生にしては珍しい積極的なご助言に内川規一台長ともども平身低頭、その整備をお約束申し上げた次第です。早速全国の気象官署から再び募金を頂き、その整備に当りました。そして昭和52年6月には新装なった碑のもとで御霊の33年忌の法要を無事済ま

すことが出来ました。

全く先生のお蔭です。このように「琉風之碑」は創立からその後の整備に至るまで先生のご指導ご助言に負うところが多く、その点この碑は先生によって建てられたと申し上げても過言ではありません。碑は先生が沖縄に残された唯一の遺跡として、これからも行くすえ長く守りつがれることでありましょう。奇しくも今年は戦後50年の節目に当たり、その節目に相応しい慰

霊祭にすべく先生の碑の前には全国から多くの方々が集うことになっています。ここに苛烈な運命に殉ぜられた70柱の御霊が安らかに眠られんことをお祈りし、そして改めて平和の大切さを今一度かみしめ二度と悲惨な歴史をくり返さぬよう誓うものであります。先生の今日までの「琉風之碑」に対する心遣いまことに有難うございました。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

和達さんと病氣そして私

竹内 清 秀

「和達先生」というと、どうも堅苦しく私のもっている先生のイメージとは何かかけ離れているような気がする。失礼とは知りながら平素口から出る「和達さん」と呼ばせてもらうことにしたい。あらためて「和達さん」といえば、あの上品で上背がありがっしりとしたお体からは一般の人には思いもよらないであろうが、私には「病氣」が直ちに連想される。ご存じの方もあろうが、和達さんは若いころ療養生活をされながらも重要な地震の論文をお書きになった。私も病気の点だけは似ており、气象台に入り数年たったところで入院生活を送るようになった。病氣も同じ肺結核である。当時、不治の病といわれた肺病である。このような事情もあって、和達さんには特に親しみを感じ、またいろいろとご迷惑をおかけもした。それで「和達さんと病氣」という連想が私の中にしっかりと定着してしまったのであろう。

さて、最初に和達さんにお目にかかったのは、いつのころであったろうか。同期に入った藤原滋水さんと竹平町の官舎にお伺いしたときのような気がする。藤原さんとは何となく馬が合い、ときどき会っては近況を話し合い、愚痴をこぼすこともあった。そんなある日、一度、台長の和達さんにお会いして、職場の実状やいろんな希望を聞いてもらおうということになった。台内のことなら何でも知っており少しものおじしない藤原さんのあとに、小さくなってついていった。そのとき、どんな話をし、それに対して和達さんがどんなことを言われたのか、今となっては定かではない。ただ頂いたお茶の非常においしかったことが思い出されるが、学校出たての青二才のわれわれの言動にはい

まだに冷や汗を感じる次第である。その後何度かお邪魔をしたことがあるが、奥様はじめご家族の皆さんがたが明るく賑やかであることがうらやましく感じられた。何人かの子供さんたちと時計塔の屋上まで上り、案外近くに見える隅田川の花火を大はしゃぎしながら眺めたのも確かこの頃である。

その後何年かして私も病氣になった。急に寒気がし日当たりのよい壁にもたれて日向ぼっこをしていてもふるえが止まらない。ふうの風邪ではなさそうで、医務室で診てもらったところ、立派な結核であった。肺に丸い影が見える。早速入院ということになった。ついこのあいだ集団検診でなんともなかったのにと、いくら悔んでも仕方がない。世田谷にある療養所であった。当時の世田谷区には畠や竹藪が多く残っていた。6人あるいは8人の大部屋はわびしかった。窓を通して見える遠くの竹藪が風に大きく揺れていた。いろいろな検査のあと清瀬の病院で手術を受け、ふたたびこの病院に戻って来た。バンガローふうといえば聞こえがいいが、実に粗末な「外気小屋」に入れられ、そこで回復を待つことになった。この小屋は文字どおり掘ったて小屋で、雨をしのぐだけで風は自由に通るというしろものであった。当時は屋外の新鮮な空気が、なにより大事な薬と考えられていた。こんなとき、こんなところに、和達さんのご家族が見舞いに来てくださった。大いに恐縮したが、また実にうれしかった。そのとき和達さんのお書きになった随筆を頂いた。療養雑誌に連載されていた「回復者の旅」という題目の別刷りで、日本の代表としていろんな国際会議に出席されたときの旅行記である。まだ外国旅行等はきわめ

てまな時代であり、結核患者、ことに回復期にあるものには、どれほどうらやましくまた勇気づけられたことであろうか。このころ紀伊屋書店からサットンの「微気象学 (Micrometeorology)」をとりよせ、暇にまかせて隅から隅まで読んだものである。

回復は早かった。職場復帰してまたもとの測器課の仕事をするようになった。この時分、よく和達さんの家にお邪魔した。おなじ測器課にいた今成さんが俳句をひねっていて、たびたび和達さんのお宅にお伺いしていたので、彼についていったのがきっかけであったろうか。毎月、宿題がでて何句か作ってもっていくと、ご母堂が添削してくださり見違えるよう句になる。気象台食堂のおやじさんも見えて、句会は和気あいあい、

実に楽しかった。和達さんも当然のことながらすっかり家族の一員となられて、この雰囲気を楽しんでおられた。ときには、子供さんも入ってこれ、一緒におはじきやトランプ遊びをしたりすることもあった。それでつついとお宅を辞するのが遅くなった。この歳になってみれば、あのときもっと俳句に身を入れて勉強しておけばよかったのにと悔やまれる。

そのあと大分経って昭和36年の春、私は国際原子力機関 (IAEA) の奨学金をもらって米国気象局に留学することになった。ご報告にいったところ、和達さんからは「それはよかったね、体だけは気をつけて…」と喜んでくださった。私の「回復者の旅」となったのである。

和達先生の思い出

立平良三

昭和28年の早春、中央気象台の面接に上京し、和達先生に初めてお目にかかった。新制旧制の切替えのどさくさで1年早く大学を卒業していたので、「ずいぶん若いね、よっぽど勉強したんだらう」が先生の第一声だった。そのとき周りの部長さん方に「～君と同じだね」と話しかけてられたが、あとで考えると森安さんのことだったようだ。出身中学 (旧制) を聞かれ、福井県の大野中学と答えると、「そんな中学は聞いたことないなあ」と笑われた。後年、このことをお話したら、「そんな失礼なことを言いましたか」と苦笑された。

卒業の頃、京都大学の滑川先生から大阪管区に勤務して教室へも時々顔を出すよう勧められていた。自分でもそのつもりでいたのに、和達先生から「大阪管区へ行きませんか」と聞かれて、どういう弾みか「中央気象台に入るならやはり本台で働きたい」と答えてしまった。先生に惹かれてその近くでという気持ちが作用したのか、東京勤務になんとも不安を感じていたのに、気象台の雰囲気に接してこれなら大丈夫と思ったのか、定かでない。とにかくこの選択によって、只見川流域のスノーサーベイとか、富士山測候所勤務や南極観測などの得難い体験ができたことは確かである。もちろん大阪管区へ行っておればまた違った思い出を持つことになったことだろうが。

最初の宿舎は竹平構内の竹平寮で、先生の官舎はす

ぐ近くだったが、もちろん若輩の身で、先生と直接お話しする機会はなかった。その代わり先生のご次男の正樹さんと親しくなり、一緒にスケートに行ったりして遊んだ。スケートといえば、東京での最初の冬は猛烈な寒波の襲来で皇居の堀とか不忍の池などが氷結し、スケートができた。特に千鳥が淵は日当たりが悪いので氷が厚く、2、3回滑りに行った。この氷結は、東京に大雪が降り、堀の水の表面がアイスシャーベット状になった直後に、強烈な寒波襲来というシリーズによるものだった。それ以後、40余年の間にこんな氷結は経験しないが、いわゆるヒートアイランドのためなのだろうか。

先生のお話をよくお伺いするようになったのは、先生が気象庁を去られてからのことである。15年ほど前になるが予報課長の頃、東京都の依頼で伊豆諸島の御蔵島や青ヶ島への視察に同行させていただいたこともある。「皆で泳ごう」と提案され、お元気なのに驚いた。楽しみにしていたが、暇がなくて実現しなかった。

気象記念日や竹平会などの機会には、先生ならではの経験談や人物評を楽しく聞かせていただいた。荒川秀俊先生や高橋浩一郎先生についての思い出話は今もよく記憶している。このような時の先生からはまさに清雅な長者の風格が感じられた。このように老いられればと賛嘆の想いを抱きながら対座していたが、とて

も叶わぬ夢である。

近年、手相に興味を持って、自分の掌を眺めて一喜一憂したり、職場の方々にいい加減なご託宣をもっともらしく告げたりして楽しんでた。たまたま先生が長官室にお出でになった折、先生のような人物はどのような手相をお持ちか、不躰ながら拝見させていただいた。先生の豊かな手の平には大吉相とされている紋が見事に刻まれていた。他の人の手にも見たことがあ

り、私の手にも、そのつもりで見れば似たような紋が在るようにも見えるが、先生のような典型的なものは初めて拝見した。やはり古来の手相術には信ずべき所があるのかも知れない。

なんとなく、まだまだ先生とお会いする機会はあるものと思込んでいたところに、突然のご逝去で、あれもお聞きしておけばよかった。これもお聞きしておけばよかったと後悔すること頻りである。

故 和達先生を偲ぶ

寺 内 榮 一

私が気象衛星センター所長の職に在った昭和58年の夏でしたか、地学連絡会の会長として会員の方々を案内して埼玉県鳩山町の気象衛星通信所の見学のあと、清瀬のセンターに廻られたことがありました。良い機会と思い特に御講演をお願いした処、例の如く気さくにO.K.され、「気象業務の今昔」という題のお話を戴きました。“戦後の混乱の中で気象庁が逸早く最新技術を導入し、業務を近代化した過程のこと、そして衛星の運用利用も電子計算機の導入、レーダーの展開等の努力の延長線上にある”という内容で、その理路整然とした判り易い話し振りとユーモアを交えた巧みな話術と相俟って職員一同に深い感銘を与えました。当時、長官退官後既に20年を経過し、先生の在官時の御業績について詳しくは知らぬ職員が多くなっておりまし

た。私は、気象業務の近代化の裏には、先生の勝れた先見性、卓技な指導性、そして正しい判断と決断力が在ったと思っております。

数値予報用の大型電子計算機の導入に際して、IBM704型とUNIVAC SCIENTIFIC 1102(?)型のどちらを選択するかという問題が起きた時、先生は長官としてIBM704型の採用を決断されましたが、ハードウェアの性能、メンテナンスの多少の優劣論よりは、「FORTRAN」という高級プログラム言語の存在を決め手とされたと聞いております。このケースにおいても、先生の先見性と正しい判断力が発揮されました。当時(昭和31年頃)は、「ソフトウェア」という言葉が今のように一般化しておらず、「記号(シンボリック)言語」を活用して少ないステップで短いプログラム

を造る職人的プログラマーの名人芸が重用されていた時代でありました。この後の日本の電子計算機の開発に、この選択の果たした役割は大きかったのではないのでしょうか。

前述の御講演のあと、内藤町の御自宅まで車でお送りしました。“衛星のこれからの利用の方向、これまででも気象衛星資料の利用技術が、衛星課長当時の予想を超えてきていることなど”について談論風発しておりました。車が青梅街道に入って間もなくだったと思いますが、突然、先生が運転手に、「ラジオをつけて下さい」と言われました。途端に、プロ野球の「巨人—ヤクルト」戦の実況が入ってきました。それからは話題は、プロ野球の話、先生御自身が洲崎球場時代以来のプロ野球愛好者であること、特に巨人軍ファンであり、その関係で後楽園球場のネット裏優待席券(シーズン通しの)を球団から寄贈されていることなどが中心になりましたが、私はそこに先生の飾らないお人柄、多趣味の御一端に触れた思いでした。御自宅に到着するまで、巨人軍は、大きく負けておりました。お通夜の日、下鶴先生にお会いした折、お亡くなりになる前の先生の御様子をお聞きしたところ、先生が1月4日の夜の9時から11時まで、日本テレビの“長嶋茂雄の超偉人伝説”を御覧になり、「今日の長嶋は良かった」と満足されてから御自室へ戻られて間もなく仆られたということでしたが、熱烈な巨人軍ファンであられた先生には、失礼を省り見ず申し上げれば、ある意味で相応しかったと思うのですが如何でしょうか。

顧りみると、気象庁に入ってまだ日の浅い予報官時代に、図々しくも私共の結婚の仲人役をお引受け頂い

た時が、先生にお近付きになるきっかけであったように思います。昭和31年の1月末でしたが、当時の大手町の木造モルタルの旧庁舎2階の中央気台台長室にお伺いして、恐る恐るお願いした処、いとも気安く上気嫌に「いいよ」という御返事でした。御返事のあと「ただし、ジュネーブの国際会議に出張して帰国が式日の前日になっているので、遅刻するかも知れないが、その時は……」と申されました。お忙しい御日程の中でお引受け下された御好意に感激したことでした。幸いに先生は予定通り前日には羽田に到着され無事挙式を済ませることができました。改めて地位の上下に無関係に人に接せられた先生の御人格を感じます。

このようなこともあって、先生の御自宅を私的にお訪ねする機会は、専門分野を全く異にしており、上司下僚の近い関係に無かったにも拘わらず、多少、多かつたかも知れません。ブラジルの宇宙研究所の仕事から帰国して間もなく御報告を兼ねてお伺いした時がありました。ブラジル気象界の実情や彼地における生活の実際などについてお話ししましたが、非常な興味を示され聞いて頂きました。その際、「彼地で、アメリカ気象局長官であった Cressman 先生にお会いした時のこ

と、[Dr. Wadati はどうしているか？健在か？彼のマジックは素晴らしい……]と言っていましたよ」と申上げると大変喜んでおられました。南極に在るブラジルの基地のことに触れた時には、御自身15次南極観測隊に同行して昭和基地を訪ねた当時の御旅行を憶出され、「ブラジルには結局行けなかったね」と言われたのが印象的でした。

私なりの先生とのご交際を通して感銘を受けた他の点として、「公正さ」と「謙虚さ」を挙げることができます。先生は誰方とでも私情を交えず接せられたのでは無いでしょうか。御自身による“深発地震の発見”の御研究が、最近の“プレートテクトニクス”論の中でプレート境界面の存在論との関連で再評価されていることについても、先生から誇らかな御発言を聞くことは遂にありませんでした。

これらの数々の秀れた御資質に、明朗闊達、軽妙洒脱の御性格が、先生の交友範囲の広さ、学界および学際的分野における幅広く息の長い御活躍の根源にあったとは私は思っております。終りに、先生との生前の御交誼を感謝しつつ御冥福を祈るばかりです。

私が和達先生に最後にお会いした時

中野猿人

私が和達先生に最後にお会いしたのは去る11月28日に毎年行われてきた所謂「寅彦会」の席上でありました。

「寅彦会」というのはご存知の方も多かろうと思いますが、寺田寅彦先生が亡くなられた（昭和10年の大晦日）後に、有志の方々の発起によって出来た「偲ぶ会」のようなもので、もう彼此50数年程になりますが、寺田先生のご誕生日に前記のように毎年行われてきたものです。そして私は毎回、その会の末席を汚して居りましたが4年程前に脳梗塞で倒れて一時は生死の間をさまよいつづけたのですが、命だけは助かり、以後数年間は車椅子に乗ったまま近くの施設に通って「リハビリ」に努めてまいりました。

昨年秋に「寅彦会」の幹事をされている太田文平氏から、「寅彦会」の御通知があり、特に今回は、或いは最後の機会になるかも知れないから万障繰り合わせ

て是非出席をお願いしますとの案内を受けました。お陰様でこのところ体調も安定していたので出席する事にしました。会場は神田の学士会館でした。集まった会員は6名で、寺田先生の次女に当られる関弥生様、和達清夫先生、樋口敬二氏、それにこの会の幹事をなさっている太田文平氏と三宅修三氏、それに私です。

和達先生にお会いしたのは実はもう4年以上の前のことで、先生が御無事だとはかねてから聞いていましたけれども、そのお元気なご様子はこの時はじめて知りました。私が「先生、お变りはありませんか。」と尋ねますと「有難う。まあ、元気です。」と答えられました。又和達先生は「わたしは煙草が好きで小学生の頃から親にかくれて吸っていたけれど体に良くないし、つい昨年位からやめることにした。」といわれました。90歳をこえられてのこの御言葉に和達先生らしいユーモアとおおらかさがにじみでて何とものしい御話に

つつい私も顔がほころんでしまいました。そういわれてみれば、ちょっと以前よりふくよかになられ益々御顔の色つやも良く御元氣そうだと的印象を強く受けました。昼食をとりながら、皆和氣あいあいと話がはずみ今後どの様にして「寅彦会」をやっていたらよいかとの話などになりました。その日はとにかく病後はじめての外出だったので私だけ一足先に退席したのですがとても心に残る集いでした。

こうして平成7年が始まり、元旦の年賀状が早朝配達されましたが、その中に和達先生からの年賀状が含まれていました。そして1月5日午後0時30分ごろのテレビ放送は和達先生の死去の報を伝えたのです。即ち「本日5日の午前10時17分動脈りゅう破裂の為東京

板橋区の病院で死去された。(92歳)」との内容でした。私は一瞬この報道を疑わざるを得ませんでした。去る11月28日の「寅彦会」の折にあんなに御元氣であられた先生が、それに又つい4日程前の元旦の朝にはいち早く賀状を頂戴していたではありませんか。ところが報道は事実でした。

4年間という長い空白がありやっと再会できたと思つた矢先の先生の死は私にとり大変ショックなものでした。あの時もっとも口がうまくきけたらいろいろ御話ができたとくやまれてなりません。でも私にとりましては本当に幸せなひとときでした。

そして今さらながら「巨星墜つ」の観を深くいたす次第です。

時代を代表する人

新 田 尚

「採用されたら、潮岬にも行きますか」

「行きますが、ずっとそこにおれといわれたら困ります……」

このような会話を交したのが、私が和達さんに初めてお目にかかったとき、すなわち中央気象台の採用試験場でのことである。その後の25年くらいは、和達さんは私にとって雲の上の人であった。もちろん、私の方が一方的に和達さんをさまざまな機会に遠くから拝見することはあったが、近くでお話をうかがったり会話をしたり、ということは余り記憶していない。

気象庁で気象業務に直接たずさわらなくなってからは、しばしばお目にかかったり、お話をうかがったりする機会が増え、私なりに和達さんのイメージを具体的につくることができるようになった。すでにほとんどすべての公職から退かれた後の、悠々自適の生活に入られてからのことである。そういう幸いな接触を10年余りにわたってさせて頂いたことは、生涯忘れ得ないと思う。

和達さんの数々の業績は、それが学問的なものであれ、行政的なものであれ、恐らく時代を超えて残るものであろう。そして、それらの業績は、私が生きてきた時代を代表するものであったことは疑いのない所だと信じている。私が比較的親しく接して頂いた時期の和達さんは、まさにおおらかに人を包むような雰囲気

を常にお持ちで、ユーモラスな話題をいつもふりまいておられた。私など名前しか存じ上げない岡田武松、藤原咲平の両先達のことを、殊の外しばしばうかがったような気がする。あるいはその話が、私にとって一番印象に残ったためかもしれない。

「私自身、たくさんの子供を持っていてこんなことをいう資格はないのだが、やはり人口問題がこれからの時代の最大の課題だと思う」「私がお役に立つようなら、どんどん使ってくださいよ」等々、よい意味でいつまでも「現役の問題意識」をお持ちだったと思う。

いつまでたっても和達さんは、私にとっては親の世代、学校時代の先生方の世代ということで常に高い所におられる方という気がしていたが、そのお人柄のおおらかさの故に私は勝手に気楽にお話しさせて頂いていたと思う。

海外でいろいろな人と話していると、日本の同業の人々がどのようにみられているかよくわかる。その中でも、和達さんが残された印象をよくきくことがある。ユーモアの人、手品で人を引き付ける人、豊富な話題の人等々、相手の外国人はもうかなりの昔のことなのだが（当然その人もかなりの年配だが）なつかしむように語りかけて「ワダチはどうしている」と尋ねてくれる。答える私も何かしら心の中で誇らしく思いながら御健在を伝えたのも、今にして思えば忘れ難

い思い出である。また、中国気象局を公式訪問したとき、雛競蒙国家気象局長が「和達先生は日本の気象界の代表として最初においでになった人で、中日国交回復前に中国を訪問された」周恩来総理がその時の日本代表団に「何か中国への要望は」と尋ねられたとき、和達先生は真先に「中国の気象データの提供を」と要望された」といった話を披露してその先駆的業績をた

たえられた。

私は、和達さんについては極く限られた個人的思い出しか持たないが、指導的立場にある人が時代を代表し、そして時代を超えた業績を残すということはどうということなのか、について具体的に、比較的身近かで拝見させて頂いた事実を、生涯の心の財産にしていきたいと願っている。

和達博士の思い出

根本 順吉

おそらく他の人は誰も書かぬであろうと思われる和達博士の一面についてのべてみたい。

戦後間もなくの頃、教育の内容が変わり、高校では地学が教科として取り上げられるようになった。当時、地球科学の分野には妙な縄張りがあり、大学卒業後の就職の問題で、地質や鉱物の先生が地学の分野で幅を利かせていた。今でもその気配は残っているが、天文・気象、海洋などの分野は、まるでゼオロジーの、ちょっとした添え物位にしか考えられていなかった。

それではいけない、地学教育でもっと気象や天文を取り入れねばならぬと考え、積極的に努力されたのが気象では和達博士、天文では島村福太郎氏等であった。

それで和達博士は高校地学の教科書の編纂にも積極的に参加されたのである。当時、私自身の本務は予報官であったが、かたわら、雑誌「天文と気象」の編集委員として、気象学啓蒙の分野でも、いくらか仕事をしてきた。その関係で私は和達博士と一緒に神田・神保町裏の教科書会社に退庁後出かけ、教科書編集の実務にたずさわった。

その時の和達博士の働きぶりが私には忘れられぬのである。編集から校正まで、細部にわたって、我われ下僚に仕事をまかせるのではなく、役所の役柄とは全く離れた同等の立場で、枝葉末節まで仕事をされたのである。

そこに敗戦後、改めて皆と一緒に新しい仕事を始めようとする博士の意気込みのようなことが感ぜられ、私自身は大へん嬉しかった。

教科書会社に行く前に、打合わせに台長秘書室に参

上すると、秘書官の善如寺信行君がいて、博士の習慣となっていた鉛筆書きの草稿を整理していたようなこともあった。そこに和達博士は髪をクシャクシャもみながらあらわれ、「君これでいいかね」と問いかけられた。学問的に私は和達博士に協力したことはなかったが、私は役所のシステムから全く離れた和達博士のこの態度を信頼した。

和達博士が、その後どのように転身されたかは、私にはわからない。それはその時々、協力された方に書いてもらうより仕方がないが、和達博士自身も和文、欧文共、沢山の自伝的著作をしておられるので、それからも明らかであろう。

私が気象庁に勤務していた終り頃、おそらく70年代の初め、私は兼任講師として埼玉大学に風土論の講義に行っていた。

私をよんでくれたのは国文学の長谷章久先生(故人)であったが、その時の埼玉大の学長が気象庁退職後の和達博士であった。

長谷先生と和達博士は新宿のお宅が近く、旧知の間柄であったので、もしかすると和達博士のお口添えで、私は長谷先生によべられたのかもしれない。開講の日、和達博士の学長室に挨拶にいったら、学長も幅の広い講義で気象の分野をひろげることに大賛成で、帰りは学長の車で北浦和の駅まで送っていただいた。

私自身、現在老後の仕事の一つとして風土論の展開をつづけているが、昨年はその仕事で私は表彰された。考えてみると、こんな所にまでも和達博士の心づかいが及んでいるように思われてならない。

防災の始祖

菱田 耕造

先生のご功績は広く大きいので、私に関わりの深い防災面での追想にとどめたい。

昭和9年9月関西地方を襲った室戸台風を契機に昭和11年災害研究所が新設され、理学的研究を行う第1部は中央气象台大阪支台に、工学的研究の第2部は阪大に設けられた。先生は中央气象台から大阪に転勤されて、災害研究所で台風と風津波（高潮）の研究に着手された。そして昭和13年の梅雨末期に集中豪雨による関西風水害が起った際には、先生自ら神戸付近の土石流の現地踏査などを行われた。また昭和8年頃から問題となっていた大阪市の地盤沈下などの研究にも取り組み、さらに当時としては地球物理学の分野では珍しい室内実験をも試みられて多大の研究成果をあげられた。昭和16年に東京に帰任されたが、これらの成果は戦後の先生の活動の基礎になったと考えられる。またこのことは先生の偉大な業績に隠れて忘れられがちであるが、私の進路の転換へ大きい影響を与えた。私自身のことになるが、神戸市の三宮付近に生まれ、親戚の直木倫太郎工博の勧めで旧制神戸高工土木科に進み、大阪鉄道局（現 JR）に勤務した。翌年に室戸台風が襲来し、東海道線瀬田川鉄橋上で列車の転覆事故があり、また線路災害復旧工事の現場監督などに忙殺された。私は理学的研究の興味を抱いていたし、その必要性を感じてきたので、1年間の徴兵義務を終え、昭和11年東北大学の物理に入学した。そして3年生の夏には前述の関西風水害のため神戸の自宅が2階まで泥に埋まる被害を蒙った。

和達先生は東大在学中関東大地震を体験し、寺田寅彦先生を指導教授として卒業された後、中央气象台に入り、地震の研究をされた。一方前記の直木は先生より25年早く東大土木を卒業後大阪築港に従事し、関東大震災時には復興局長官となった。また日頃から土木は自然の陶冶を目的とするが、そのためには自然を知悉することが重要であると強調していた。防災対策は応急的と恒久的、または理学的と工学的に大別して考えられるが、いずれにしても自然の解明が先決であるとの教えが私の地球物理志望の動機となった。

昭和20年東北大学に地球物理学科が新設され、水路部技師から気象学講座（山本義一教授）の助教授となり、海洋学を講義し次年度開講予定の海洋学講座に備えた。初めての学生に下鶴大輔君がいた。現在火山学者で活躍し、また東大名誉教授であり、先生の女婿として知られている。ところが、7月の空襲と8月の終戦のため海洋学講座の新設は中止され、また住居難・食料難による私の窮状を考えて、昭和22年春日高孝次先生（当時中央气象台海洋課長兼東大教授）が中央气象台長になられた和達先生に、同年創設された舞鶴海洋气象台へ私を推薦された。初めて和達先生にお目にかかったのはその頃である。

自然の猛威は避けられないが、被害は最小限に軽減できるという信念から、先生は16年間台長または長官として在任中、防災体制の確立をはかり、防災を基本とする気象業務への変革を実現されるとともに、施設の近代化や学者の育成にも尽くされ、国際的に遜色のない気象庁を築かれた。海洋气象台は4か所に増えて戦前神戸のみの時に日高孝次先生を訪れてご指導を仰いだ頃の試験研究的な性格から防災行政的性格となり、私も舞鶴に赴任した当初はいささか戸惑ったが、その後27年間ほとんど海洋部門に所属し、許される範囲内で海洋の防災に取り組んだ。退官後東海大学海洋土木工学科に移り、15年間沿岸海洋防災・保全に重点をおいた。また本四架橋や関西新空港などの大型構造物建設の事前調査を依頼され参加したが、設計には特に自然現象の解明と災害の軽減が重要であると痛感した。先生は海洋については海洋科学にとどまらず海洋工学にも多大の興味と関心をもたれた。私には雲の上の方で直接のご指導を受ける機会には恵まれなかったが、会議などでお目にかかった時は何時も笑顔で私を励まして下さった。

先生のご逝去を新聞で知り、その12日後に思いもよらない阪神大震災が神戸市を直撃、海洋气象台も甚大な被害をうけた。私が神戸海洋气象台に在任中、先生が長官視察の帰途立ち寄られて昼食をすまされた後の僅かな時間に、将棋をされた御姿を思い浮かべた。時

間を大切に、また部下との和を大切に先生の印象が強かったからである。

先生のご冥福を心から祈ります。

和達清夫先生を偲ぶ

廣野卓蔵

和達清夫先生は本年1月5日に92歳で突然逝去されました。普段先生を目標に励んで来た私は急に目標を失い一時は茫然としました。

昭和10年に私が大学を出て中央気象台に採用され、和達先生の第2地震掛に配置されてから丁度60年経ちました。その間、先生の方は止まる処を知らず、あれよあれよと言う間に高い地位に就かれました。従って私が先生と御一緒できたのはせいぜい5年間位のものでした。しかし、和達先生はその後地震研究への情熱を絶やすことなく、時折お会いするとその話になり、私は先生の御意向に沿って地震の研究を進めるようになりました。他方、私も先生と同様、結核の回復者ですから、先生が会長をしておられた回復者の複十字会で定期的に先生にお目にかかって来ました。要するに、先生と私は鉄路に沿って走る小路のように何処まで行っても鉄路とは付かず離れずの関係でありました。先生は亡くなられたが、これからも先生の思想を推進して行く覚悟であります。

先生のお生まれは1902年で、亡くなられたのが1995年ですから、先生は正に20世紀を一気に駆け抜けて行かれました。その間、先生の行動には全く無駄がなく、万事に決断は迅速でした。大正14年23歳で中央気象台に入られ、始めに地震学を専攻されて深発地震を発見され、恩賜賞を受賞されたのが昭和7年30歳でした。昭和11年から管理職に移行され、中央気象台長になられたのが昭和22年45歳、退官されて防災センター所長になられたのが昭和38年61歳、埼玉大学長が昭和41年64歳、学士院長が昭和49年72歳、文化勲章受章は昭和60年83歳でした。60歳以後は27に及ぶいろいろの審議会、委員会、顧問、理事会等の要職をこなされました。

先生初の幸運は、先生が中央気象台に入られたとき、関東大地震を契機に気象官署に設置されたばかりのウィーヘルト地震計による新鮮な資料を自由に料理することができた事でした。かくて和達先生が世界に名を馳せた地震の研究は先生が24歳から34歳まで10年間

のお仕事でした。このときの栄光は生涯先生から消えることはありませんでした。ここに掲げた写真(写真9)は1962年に先生が世界的に有名な地震学者達と写されたものです。

先生の次の転機は地盤沈下の研究でした。昭和11年に先生は大阪支台長に転出され、災害科学研究所第1部長を兼務されました。当時大阪でも、東京と同じく地盤沈下現象が激しく、低地に出水などがあって、その対策が急がれていました。そしてその原因としてさまざまな説が唱えられていましたが、決定的なものはありませんでした。先生は災研の仕事の一環としてこれを始め、4年の歳月をかけて、地下水過剰汲上げ説を確立しました。

この時のお仕事に私も大いにお手伝いをしましたが、先生と御一緒に研究らしい研究をしましたのはこれが最初で最後でした。私はこれで先生の信頼を得て、その後何度か先生の論文の下書きをしたことがあります。勿論先生が納得したものだけがパスしました。

和達先生の地盤沈下問題のとらえ方は、単なる一研究問題の解決に止まらず、更に同じ問題に悩む多くの地方を救うことでした。実際に新潟地方などは天然ガス汲上げ規制によって問題を解決しました。この際先生にとって大事なことは人を説得する前にまず御自分が確信を持つことで、そのためにわざわざ私の提出した沈下説を追試して確かめたものと思われまふ。

この先生の“確信”は結核患者救済運動にも現われています。先生は中央気象台に入られて間もなく肺結核に罹られました。その時は不治の病として恐れられた病を2年余で克服され、その時の御経験から結核は必ず直るという信念を持たれ、同病者を励まし、「あくまで希望あれ」等の名著を以て導きました。そして複十字会の会長を最後まで勤められました。己れ一人の成功に止まらず、万人と幸を共有しようとする先生の精神は誠に尊いものがあります。先生のお話を聞いていた複十字会員の一人は「先生のおっしゃることは

キリスト教の愛の精神と同じだ」と感激していました。

先生は関東大地震に遭遇し防災を志して中央気象台に入られたが、地盤沈下で自然災害よりも広い意味を持つ人為的災害、すなわち公害の一端に触れられ、大気汚染、水質汚濁等へと公害全般に視野を広げられ、その後長らく中央公害対策審議会会長を勤められました。先生の公害問題解決への究極の精神は自然を愛す

ことであり、更に進んで、我々が自然から愛されているという信念であります。先生最後のお言葉は「自然は愛なり」でした。先生のこの高邁な精神が先生を社会的にもこれほどまで高く押し上げた原動力となったと考えられます。先生の御冥福を心からお祈り致します。

驥尾に付して五十年

福井 英一郎

われわれ地球科学部門に属する学徒の一人として日頃敬愛限りなかった和達大先達の突如としての急逝は全くの寝耳に水であった。ご逝去後7句を越えた今、在りし日の思い出の中からその一部を取り出して故人を偲ぶよすがともしたい。筆者より3年前にこの世に生を受けられ、大学も又年齢と平行して3年前の大先輩であるが卒業と同時に当時の中央気象台に入台、地震掛に就任された。筆者が大学2年生の頃に日本気象学会に入会手続きのため当時の規約として入会には部内の紹介者が必要であったので測候技術官養成所の講師を兼任されていた辻村太郎先生から地震掛主任の国富信一技師に連絡していただき、その頃まだ竹平町に関東大震災の直後に出来たバラック建ての庁舎の玄関を入った左側の地震掛に向いて所用を果たしたが、この時和達先輩は同室で机を並べておられ、直接お話しはしなかったものの近くで「明日の日曜に地震が起こらないと良いがなあ」と囁かれたのを耳にしたような気がする。兎に角初めてそのお名前を知って以来今日まで70年、専攻科目を異にしていたので直接の接触は少なかったものの陰に陽に間接的ながら学風その他に少なからぬ影響を受けたことは否定出来ない。故人はその2年後だったか病を得られ暫く病床の人となられて一旦休職されたもののその後闘病に努められた結果、見事に重病を克服快癒され、自来別人の如く終始精力的な活動を続けて今日に至り深発地震の研究で学士院恩賜賞を受けられ、第6代中央気象台長、初代気象庁長官を経て退官後も埼玉大学長、日本学士院長など多くの要職を歴任された。学問的にも専門の地震学に止まらず、非常に幅が広く多才であり気象学の問題についても多くの論文を出され、大阪管区気象台長時

代には付設の災害科学研究所に多大の関心を向けて指導された。今日では定説化している地下水の汲み上げによる地盤沈下の問題など専門の深発地震などとは別個に創意に富んだ卓見と言ってよいであろう。その後も中央公害対策審議会会長や日本環境協会会長として多数の世論を纏められるなど環境問題にも大きな貢献をされた。

大学卒業後東京文理科大学にいた筆者はずっと後れて昭和17年に藤原台長の時代に入台し荒川秀俊課長の下に調査課に配属され、主として大東亜諸地域の気候誌の作成に従事していた。在職2年目に北京の国立華北観象台に転出したが、和達先輩も確かその翌年大阪管区気象台長から満州国中央観象台長として赴任されたが前記の華北観象台と直接の関係があった訳ではない。昭和19年に満鉄の委嘱を受けて満州国に出張中当時新京（今の瀋陽）にあった中央観象台に表敬訪問をして和達台長から種々事業運営上の有益なご教示に預かった。

少し私事にわたる余談になるが国立華北観象台は古くから市内にあった中国北京観象台とは別個に戦時中新しく政権として成立した華北政務委員会によって設立されたものであり、ほぼ同数の日本人と華人の職員により成り、華人の台長と日本人の副台長がその統率に当たっていた。当時の台長の文元樸氏は若くして日本に遊学し、東京大学物理学科を出られ北京大学理学院長を兼任されていた。このような重職に多士済々の先輩や同僚をさしおいて弱冠未熟の私に何故白羽の矢が立ったのであろうか。これには大きな理由があり、戦時中は厳重な気象管制が布かれ、特に戦地の天気に関する情報は高度の秘密事項で現地には方々に陸軍の

気象部隊が駐屯していた。従って観象台でも天気予報は実施せず、単なる気象観測以外に気候調査や暦の編纂などの方が主要任務であったために天気予報を生命とする気象技術者には希望の人が少なく、気候や産業気象などの方が重要視されたためではなかったろうか。いずれにしても戦時中微力を尽したが不幸にして終戦を迎えて解職されて抑留の身となり、翌春無事に帰国し、取り敢えず郷里の福岡管区気象台に配属されたが、間も無く藤原先生に代わって和達台長となられたところに因らずも戦後の学制改革によって前にいた東京文理科大学から改組された東京教育大学に復帰の話

があり、和達台長に身の上相談に乗っていただいた末、そのご承認を得て転任したような次第であった。いずれにしても和達台長・長官は私にとっては勝れた先導者でもあり指導者でもあった。史記の伯夷伝に出てくる驥は1日1000里を走る駿馬であったがその尻尾に縫り付いた青蠅が世の中を知ってますます成長すると言う故事は正に私の場合に当たっているのではなかろうか。今や再び在りし日の温容に接するを得なくなった時、長い間のご厚恩を謝し故人の冥福を祈りつつ擲筆することにしたい。

和達清夫先生

藤村郁雄

和達先生、先生はもう居られません。私はここで独り先生をお偲びして居ります。

私達が養成所へ入学したのは大正の終りで、当時は中央気象台の本棟が東西に細長く、その中央に南に面し玄関が、本棟の西には官舎、東には少し離れて四角柱のように白いコンクリートの時計塔。玄関の前には築山、その西方に少し広庭をおいて私達の学校、築山の東には現業棟、建物は皆一階の平屋で木造でした。

築山と教室の間の猫の額のような空き地ではいつもお午休みには職員の人達が三角ベースの草野球。私共は教室の窓際からこれを眺めます。

「彼の背丈の高い捕手は誰？」と同級の高田君に質ねますと、「彼は地震掛の和達さん、数年前に大学を卒(で)られた」と教えられました。和達さんは時々大きな声でマスクの中から全軍に声をかけていました。(高田君は入学前に地震掛勤務でした。)

2年生になったら地震の講義は和達先生でした。或る時先生が授業で「この式に地表の条件を入れるとどうなるか？」と云われ、私を指名、席に立った私は一体地表の条件とは何か、木もあり、草も、土も、皆目判らない。遂々シビレをきらした先生は「このZに零を入れればいいでしょう！」と云われ、私は只頭を掻いて席へ。

又或るとき、先生は黒板に微分の式を書かれて「これを積分すればこのようになることを証明せよ」と云

い、先生は一寸用事で席を外されて、室を出られた。終業のベルと共に先生が一同の席を一巡、私の計算を覗かれて「これでよし！君だけ出来たのは！」と言って室を出ていかれた。私は未だ終らない帳面を眺めていた。何日か経って、高田君が、「藤村君昨日地震掛の会合があって、和達さんが君のことを云っていたヨ」と、「何て？」と質ねると「何のことも判らないが授業のとき、「アレにはガックリきた！」とサ」。私にはサッパリ判らない、高田君もそれが何であったか覚えて居ないと云う。私は独り、あれは「地表条件の立ちんぼのことではないか」と。その後先生には幾度もお目にかかるのですが、そしてガックリのことをお話に出したのですが先生も何のことも、もうお忘れのご様子で、遂に判らず仕舞いかと私は諦めて、それが昨年瀧秀隆さんが、半世紀の回顧談の本を刊行された時の祝賀会の席上で、先生と向かい合っているいろいろお話しを、その時フト周りの人々を見廻されてから「この人には、」と私を指しながら、「ガックリしたんですよ！」と、切り出された。私は、サテハ地表条件の立ち往生かと固唾を呑んで、すると先生は「ミッチリ2時間講義して、何か質問はと云ったら、ハイと言ってこの人は立ち上がった、『先生今日のお話は結局何だったのですか？』」と。周りでこれを聞いていた人々はワッと声をあげて笑いましたが、私はこれで65年間胸に抱いていたシロリが一遍に払拭されこんなに嬉しいことはありませんでした。

先生昨日（3月15日）は例年の日本学術振興会の秩父宮殿下記念学術賞の授賞式が日本工業倶楽部3階広間で、妃殿下お成りの下に開催されました。私は気象学会事務局の伊藤嘉一君と一緒に参列しました。今度の賞は（第31回目）山岳地域における自然エネルギー利用の実用化研究というもので、その調査は神奈川工科大学・自然エネルギー実用化研究グループの調査によるもので、日本許りではなく南極まで各山岳の山小屋の日射、気温、風力、降水などで観測装置やその地勢などの写真・観測資料を示して主題の報告を纏められたものでした。その代表は鳥居鉄矢氏で鳥居氏は曾っての南極越冬隊長でございます。授賞の選考委員会長は振興会長の沢田敏男氏が兼務でございます。

式場に本年は先生が居られなくて、私は淋しさを禁じ得ませんでした。

私は25年前定年退職の年に先生にご推薦頂いてこの授賞に与ったのですがその時の妃殿下のお言葉は今も耳に残って居ります、この幸せは只有難く険にも残って居ります。

昨年2月は島山久尚先生がお逝くなり、そのご葬祭場で、私は先生にお目にかかり「先生、近頃めつきり周りの方のご訃報が多うございますネ」と私が申し上げたら先生は「全く、お説の通りです」と言われました。そしてそれから1年も経たずに。

先生は私の柱です。

先生は居られない。

第一の人生時代の恩師・和達清夫先生

淵 秀 隆

わが恩師和達清夫先生には昭和のはじめの気象技術官養成所において気象光学の講義を受けた。この時の虹の七色「赤燈黄緑青藍董」は今でも覚えている。また green flash（緑の閃光）は日の出、日の入りのとき一瞬間だけ緑色の閃光が見えることがあるということ、その後主に日の入りであるが、各地の旅行先で気を付けて観察していたが、たしか1、2度は見えたと記憶している。

昭和3年（1928年）4月から中央気象台測候掛に勤務していたが、たまに構内で普段着の和服姿の和達先生にお会いした。その頃先生は咯血され肺結核にかかれ療養中であつた。3年ほどですっかり治られ、快癒後はすばらしい活躍をされた。

平成3年に筆者は次のような自己史を書いたが、第6章として和達清夫先生の偉大な業績を紹介した。

「自然とのふれあい半世紀余一自己開発の人生・金婚記念」東海大学出版会、1991年

群しい内容は同書にゆずり、つぎにII以下は目次だけを紹介したい。

I. 逆境人をつくる（青い太陽、P.202）

昭和46年（1971年）に先生は随筆の主なものをもとめて「和達清夫・青い太陽」（株式会社・東京美術）を刊行された（以下、その一部を転載する）。

私は若い頃、3年ほど肺結核のために、療養生活を送った。世間をはなれ仕事も捨ててただベッドに横たわるだけの生活であつた。窓から見る月の満ちたり欠けたりするのを眺めてこれからの生涯を思えば寂しさに耐え難かつた。

病気は良くなったり、悪くなったりで、今度こそはと思っていると、また熱を出し血を吐くのである。こんな時いつもつぶやいたのは「逆境人をつくる」という言葉であつた。

不幸な目にあつたのだから、その代償として何かよいことでもなければという、そんな功利的な考えではない、むしろその反対に、今までは、どんなに自分は考えの浅かつた人間であつたかという反省である。特に私などは家庭の環境に恵まれ、学校に職場に、何の苦勞もなくそこまできたのであるから、もしこういう機会がなかつたらただのわがままな、ひとりよがりな人間になつたに相違ない。もしも病が治つたなら、今度は新しく生まれ変わった気持ちで人生をやり直すと思つたのである。

幸い病は治り、社会に復帰して今日に至つたが、省みてその時の決心はどれだけ身に付いたかお恥ずかしい次第である。しかし少なくとも人の不幸は尊く厳粛なものであることは、病のお陰で知り得たようである。

誰でも不幸より幸福を望むに相違ない。お金がない

よりある方がよいに決まっている。もし身体が弱いとか、才能が十分でないとかを感ずるときは、それらに恵まれた人たちに限りない羨ましさを感じずるものである。それは自然の気持ちであって、別にどうという事ではないが、その時に自分は自分でしっかりした気持ちを失わないことが大切である。

負け惜しみでないが、幸せに酔う人には反省の機が少ない。まして、いい気なものだと人に思われているとすれば、むしろ大きな不幸といえよう。不幸な目にあった人こそ（私は信仰がないのであるが）神に近づく機会を与えられたと思ってよいのではなかろうか。

II 和達先生中央気象台長就任

1. 昭和22年の気象台

(1) 気象経営協議会 (2) 定点観測の開始

2. 行政整理

3. 気象業務法の成立まで

(1) 戦後初めての国際会議参加
(2) 気象協会の成立 (3) 日本学術会議
(4) 気象業務法

4. 昭和28,9年前後の気象台

(1) テレビによる天気予報の開始
(2) 民間予報業務の開始
(3) 数値予報の発足 (4) 世界気象機関
(5) 原水爆実験と気象 (6) 洞爺丸事件
(7) 気象の事典・日本の気候・海洋の事典・気象

学ハンドブックの発刊

III 中央気象台（台長）から気象庁（長官）へ

1. 歴史的分析
2. 気象庁成立までの経過
3. 気象庁の成立
4. 中国の気象管制解除
5. 気象審議会
6. 地球観測年 (IGY)
 - (1) 極年観測から地球観測年まで
 - (2) 日本における計画
 - (3) 気象庁関係の協力 (4) IQSY の観測
7. 凌風丸による深海観測はじまる
8. チリ地震津波
9. 日米科学協力
10. 国際関係
 - (1) 世界気象会議への出席
 - (2) 執行委員会 下記の通り出席した。
 - (i) 第11回 1959(昭34)
 - (ii) 第12回 1960(昭35)
 - (iii) 第13回 1961(昭36)
 - (iv) 第14回 1962(昭37)
11. WMO の熱帯低気圧に関する地区間セミナー
12. 研究
 - (1) 地震学
 - (2) 地質学その他 (昭和初期・中期)

和達先生と藤原先生

増 澤 讓太郎

和達清夫先生は1947年3月31日藤原咲平先生から中央気象台長を引き継がれた。この日気象台構内で行われた新旧台長挨拶の場を撮った写真が、和達先生の喜寿祝賀会の席上参会者に配られた。先生の随筆集「地球の顔」（自由現代社、1983年）にも掲載されているので、多くの人が眼にしているだろう。

この写真は、「当時の気象台の様子をよくあらわしている」と存じますので」との先生の口上書きを添えていただいたのだが、私には、お二方のお人柄が実によく出ている写真と思われた。藤原先生は昂然と胸を張り背筋を伸ばして前方を凝視しておられるのに対して、和達先生は直立不動で深く頭を垂れて、謙虚にその重

責を全身に感じておられる姿である。

戦中・戦後の時代を職員の先頭に立って苦難と闘ってこられた62歳の藤原先生から、戦後の事業再建に全霊を捧げて立ち向かおうとされる44歳の和達先生への台長交替は、気象事業の歴史的転換を告げるものであった。

和達先生は1922年純粋物理学を専攻しようとして東大理学部に入學されたと聞く。ところが、その翌年に関東大地震が起り、先生は寺田寅彦教授の下で震災の調査研究をしたり、藤原咲平兼任教授に気象学の指導を受けたりした。これが契機で藤原先生の勧めにより卒業後中央気象台に就職することになり、和達先生

の輝かしい気象人生がスタートしたのである。

藤原先生は人も知る直情径行・熱血の人で、義理人情に厚く、よく国士と評された。そのため、野人的・教祖的に振舞われることもないではなかった。しかし、心底に熱い友情や部下への深い思いやりがあったから、多くの人々から敬愛され慕われた。

これに対して、和達先生は、恐らく育った家庭環境からと思われるが、理性的で都会的センスに富み、個性を重んじるヒューマニストであった。日頃親切の押し売りや、余分のお節介は極力避けるよう心しておられた。そのため、先生は冷たい人という印象を与えることもあったようであるが、生来他人を慮る心の深い方だったと私は思っている。

このように両先生はそのお人柄が対照的ともいえる

のだが、藤原先生は和達先生の才能を高く評価し深く信頼もしておられたようだし、和達先生は不羈奔放な面もある藤原先生を敬仰して仕えておられたように窺われた。

毎年7月下旬信州の霧ヶ峯で藤原先生を偲ぶ会が開かれるが、数年前和達先生は真夏というのに礼服を着用し、老軀をおして参列されたことがある。そのとき、先生は藤原先生の胸像に菊花とともに深い祈りを捧げられた。そして、ご自分の筆になる藤原先生の歌、「草に臥て青空見れば天と地と我との外に何物もなし」の石碑に手を置いて、長いことじっと懐旧の思いに耽っておられるようだった。私はそこに深い師弟愛を見て胸の熱くなるのを覚えた。思えば、これが和達先生が藤原先生を偲ぶ会に出席の最後であった。

和達先生を偲んで

町田 直

和達先生を失ったことは、わが気象界にとって大きな痛手であることは言うまでも無いが、私達先生を知る者にとっても、誠に悲しく残念なことである。

先生を偲ぶに当って、先生の学者としての御業績や学会に於ける御活躍に言及することは浅学な私に及ぶ可くも無いことであるが、私は先生に接した経験から、その優れた人間性について述べて見たい。

私は若年の頃、中央気象台の総務課長となり、当時台長であった先生にお仕えたことがある。まだ木造のボロ庁舎であった気象台で和達台長に御挨拶したのであるが、先生は台長としての威厳や大学者の様子は全く無く、飄飄とした中に常に微笑を絶やさぬ親しい御風格で、やさしい先輩という感じを抱かせられた。その後先生の下で仕事をしていて、先生から叱責されたことは一度も無く、何かまずい事があっても、軽い皮肉を交えた御注意を受ける程度であった。気象台の皆さんも新人の私を暖かく迎えて呉れて、私は大変楽しく勤務することが出来た。今思い出しても特徴的だったことは、職員が上下一体となってよく遊んだことであった。例えば、屢々懇親会を開き、いろいろなゲームをしたり、当時流行したラジオのクイズ番組を真似た遊びをしたりして楽しんだ。そして、そんな場

合必ず台長が出席して皆と一緒に興じていたことである。そんな風で、中央気象台は台長を中心とした気象一家のような形を呈していた。これは気象台職員の気風でもあるが、何と言っても和達台長のお人柄から来る指導力、統率力によるものであったと思う。

ずっと後の事になるが、私は官を辞して後中央公害審議会の委員を命ぜられた。その時和達先生が中公審の会長を勤めておられた。当時、公害問題が大きくクロズアップされた時代で、中公審も、公害を厳しく規制する側と、経済発展の為にある程度止むを得ないとする側との議論が激突して、激しい論争の場となっていた。そして時には、会長が論難される場合もあった。そんな中で和達会長は苦悩の表情を浮べながらもいつも正しい結論を導き出された。私はこのような和達先生を見て、先生の、一方に偏しない公平な御性格から来る誤り無い判断力の持ち主であることを痛感したのである。あの困難な中公審会長を、余人を以て替え難いという理由で何期も勤められたのもむべなるかなと思う次第である。

御高齢とは言え、まだまだ御活躍をお願いする場があった先生の御長逝を悼んでやまないものである。

先生より頂いた最後のお便り

松尾 喜代子

例年どおり昨年も紀州みかんを先生宅におくりました。その時頂いたお便りを次に書かせていただきます。「いつか今年も年の暮となりました。お元気にお過ごしのことと存じ上げます。この度みかん一箱を御恵送下さいましてまことに有難う存じました。頂いた箱の中の密柑を取り出してしみじみと遠い紀州の山の密柑園を思い出しました。歳月はたちましたがおやさしいお気持ちは忘れません。しかし思えばあれから60年ほどすごしましたが眼をつぶるとまだはつきりと和歌山のお宅というか密柑山というか、懐しい南の国の風景が眼に浮びます。私も御存じのように卒寿をすごしました。幸いに丈夫で暮しております。

若い時に平和な南国の密柑山の思い出というより、あなた様の親切な御交際は一生忘れません。なにか致したいと存じつつ実際には何も致さず申しわけありません。しかし何か致さねばという思いだけはいつも持っております。つまらないお手紙を書いているように存じますがお許し下さい。長い歳月の御厚誼に何とお礼を申し上げたらよいか分からないままただ心をこめておたよりさせていただきます。末筆ながら御多幸を祈ります。右御礼まで

12月16日

(1994年)

このお便りが例年いただくみかん到着のお葉書より長く御丁寧で何となく私の方が恐縮するお便りで少々気になっていましたがまさかその20日後に先生がお亡くなるとは。

訃報に接した時このお手紙を何回もよみかえました。次第に胸が一杯になり涙がとまりませんでした。もう先生からお便りを頂けないのです。これがお別れのお便りだったのです。人間のかなしさで知ることが出来なかったのです。今から57年前、昭和13年4月に大阪測候所長だった前田先生(大阪府女専講師)のお世話で先生の助手に務めさせていただきました。わずか3年半のお務めでしたが初めて出た社会でこのようなおやさしい先生のもとで務めることが出来ましたのは私の一生のうち最良の毎日だったと思います。務めはじめて3ヶ月後の7月に阪神大水害がおこりまし

た。先生のおさしずのもと職員の皆さんは調査に必要なものをはじめ、蠟燭やおにぎり等をリュックに一杯つめてグループ毎に歩いて出発して行きました。その光景をみて气象台の職場の特異性がよくわかりました。先日おこった阪神大震災と思い合せて気象人の宿命に再び思いを深めました。先生が御存命だったらどうお感じになったでしょうか。大阪時代の先生はむづかしい問題にぶつかった時よくなさる檻の中の熊あるき(へやの中をゆっくり行ったり来たりする歩きかた)をなさったのだろうか。社会人へのイロハから教えて頂いたのは云うまでもなく気象学の基礎、また御趣味の広い先生から野球、ハイキングまた先生宅のクラシックレコードの鑑賞等々。生れてはじめての経験ばかりで毎日の通勤も楽しくて和歌山から大阪气象台(勝山通)までもさほど遠いと感じませんでした。災害科学研究所も竣工して津波の研究や当時大阪で問題になっていました地盤沈下の原因の研究等と毎日お忙しい先生はお出かけの御用も多くなりました。御研究のことでおつむ一杯の先生は時々出かけてもしばらくしてお戻りになり「今日行く所はどこだったけ?」という具合でした。先生のトレードマークのあのソフトの茶色のお帽子を持って照れくさそうにまた出かけてゆかれました。

昭和16年4月先生は満州の台長に御転任になられました。私もその8月に先生のお世話で横浜測候所の杵島磨のもとに嫁ぎました。

18年には長男が生れ、岡田先生の武と先生の清を頂き武清と名付けて幸福一杯の日々をすごしましたが子供の初誕生日前に主人は他界してしまいました。その時先生から武清が大人になった時読むようにと父親像について長いお手紙を私に送って下さいました。戦争中は私のお腹にまいて残しました。19年4月からは和歌山に帰り、和歌山測候所に務めさせていただきました。20年7月の空襲で役所も焼失して種村所長御一家と私宅で同居しましたので生活の中にも充実した気象人の仲間に入ることが出来ました。戦時中らしい「さつまいもの貯蔵について」の調査からはじまり、紀の

川の洪水予報、大気汚染等々、すべての調査研究は大阪時代に先生より教わったことが基礎になっていることがわかりました。

お手紙の中に「何かいたさねば」と何回も書いて下さっていることは私を杵島に世話したことに責任を感

じて下さったので50年も過ぎてまだ重荷に思っ
て下さっていることに先生ごめんなさいと申し上げたい
です。子供も自分の好きな物理で社会人になっており
ますし、私はもっと声を大にして我が青春に悔なし
だったと申せばよかったと心よりおわびします。

和達長官のひとこと

松本 誠一

私の和達先生とのご縁は、高校の先輩ということで始まった。新宿内藤町のお宅に、気象庁の一高同窓生を呼び集められたことが何度かあったが、大先輩が自ら同窓会を催されることには大変恐縮したことであった。その何度目かには運輸省の一高同窓会という形となり、広いお邸が一杯となったことを思い出す。この会のお陰で、恐らくはつき合いもなく終わったであろう方々と知り合うことが出来た。今にして思えば気象庁の地位を省内で少しでも高めることに役立てばとの配慮であったと納得するのだが、何か気兼ねもされたのかそれ以後同窓会を開かれることは無かった。

仕事の上で初めて先生とのかかわりが出来たのは、特別研究の予算執行のための会議であった。昭和36、7年頃には異常気象が目立ってきて、集中豪雨や北陸地方の豪雪が大きな社会問題として浮び上った。気象庁では37年度に北陸豪雪の特別研究費を成立させ、これを気象研究所の予報研究部で実施するよう取進められた。当時としては異例の1億に近い大きな予算であった。ところが研究所内では巨額の特別研究に対する強い反対の気運があって、実施の目途も立たない極めて困難な状況となったので、緊急に会議が招集され、私共関係室長も列席することになった。

会議の席上和達長官に対して、我々理論気象の分野では集められた資料を精密に分析して理論を立てるのが使命であって、観測は然るべき担当の部局において実施するべきである旨主張した。研究所側の強い反対

気運を意識した、今考えれば大それた発言で若気の至りであった。これに対し長官は些か困惑気味に「物理学者が物指で物を測っていけないのだろうか」と若者を諭すような語調で一言された。さらにこの予算は返上してもよいのだと付け加えられたのが強い印象として残っているが、よくよくの発言であったに違いない。この会議がきっかけとなり、私は初めての慣れない特別観測計画を樹て、実行し、観測資料は無理をしても解析することに没頭することとなった。幸い地元官署の強い熱意、気象庁担当部局の支持、そして研究所の中でも支援の輪が広がって行った。和達先生が長官を退官されるその年に開始された特別観測の最中に、38.1豪雪と呼ばれるあの歴史的な豪雪が起ったのも何かの因縁かも知れないと思われるのである。

以来何彼と心を配って戴いた私であるが、筑波に一泊ご招待したことが唯一のお返しとなった。あれ程多方面に活躍され名を成された先生が、学園都市には一度も行っていないということを伺い、この地に先がけて移転して来た防災センターと協同して初代所長をお迎えすることが出来た。筑波の科学者に向けての記念講演をお願いしたところ快くお引受け下さり、科学技術の大先達として衰えることのない情熱を示され参会者に深い感銘を与えられた。我々がこのような偉大な先輩を持つことへの誇りを改めて感じた次第であった。

ソフトボール評論家 K. W. 生氏

水野 精一郎

私の手元に昭和30年7月6日発行の“ソフトボール通信”第五号のコピーがある。その真ん中に、言うなれば社説の位置に、評論家 K. W. 生氏の筆になる部対抗リーグ戦の総評が載っている：“……さわれ、かのぞうきんのごときボールを汗を流してひっぱたく所に、CMO ソフトボールの醍醐味があるので、勝敗は別として、今後健全愉快なリクリエーションとしてかかるスポーツが益々発展せんことを祈り、併せて関係者の努力に感謝して筆を擱く。”K. W. 生氏とは言うまでもなく当時の中央気象台長和達清夫先生である。昭和30年といえば、中央気象台はまだ焼け残りの庁舎に住まっていた頃であるが、皮肉にも爆撃のおかげで瓦礫に溢れた空き地だけは一杯あった。これに目をつけたのが野球好きの人達で、いつのまにかそこで、昼休みにソフトボールをするようになった。やがて各課対抗、部対抗戦などが催されるようになると熱戦の首尾を伝えるスポーツメディア“ソフトボール通信”が自然発生的に創刊され、CMO におけるソフト熱は大いに高まった。どうした訳か編集所は私の所属していた企画課に移ってきた。

ソフト通信の最大の目玉は先生の滋味掬すべき評論、観戦記であった。タイに出張された時には、キックボクシングの観戦記までも寄稿されたが、観察は正確、描写はいきいきとして今読んでも楽しい。しかしソフト通信発行を怠っていると、評論一編を持って来られて催促されるので、次号の印刷を急がねばならなかった。先生は評論ばかりではなく、プレーをすることが何よりもお好きだった。総務課の不動の一塁手で、そこ退け、と言う人はいなかったから、このポストだけは無競争であった。それでも、監督が勝敗に拘ると外されることがあり、そうすると、評論が辛辣になるようで、ご本人も笑ってそれを認めておられた。

私が WMO 事務局に着任したのは1962年の末で、その翌年の3月には先生は退職され、WMO の執行委員も辞められた。執行委員は、言ってみれば国会の先生

がたのようなもので、中には事務局を目の敵のようにして苛めたがるのがいた。おおむね大口抛出国の台長であったが、先生はスタッフに優しい、ということで大変評判がよかった。その頃、WMO の業務に海洋、津波などを加えて“地球物理機関”にしてはどうか、という話があり、先生の提案ではないかと思う人もいたが、先生は否定しておられた。それはやがて立ち消えになったが、30年経って最近また同じ話が燻り出したようだ。

先生に最後にお目にかかったのは11年前になる。季刊の WMO プルティンの巻頭記事は著名な気象関係者とのインタビューで好評であるが、先生のも載ることになり、エディターの Tabata 氏が東京で先生の談話を取ってきた。インタビューの原稿が出来上がり、Tabata 氏に意見を求められたのだが、先生のキャリアや業績が十分に反映されていないように思えた。そこで、たまたま東京出張があり、私が追加インタビューすることになった。新宿内藤町のお宅にお邪魔したのだが、インタビューなどと言うものではなく、お昼をご馳走になり、例によって漫談調の面白いお話しを伺いながら、二人で追加分を書き上げた。このインタビューは1985年1月号のプルティンに掲載されたが、載った写真の一枚はソフトボール試合のバッターボックスに立つ先生の勇姿である。きっとお気に入りの写真だったのであろう。事務局から別刷りを送ったところ、私にも丁寧な礼状をくださった。1985年2月10日付けのこのお便りで、先生はソフトボール時代を懐かしまれ、“…あれから何年になりますか、歳月はいつか過ぎ、私も80を2つも越えました。”と述べておられる。それから更に10年の歳月が流れ、気になりながらも私はご無沙汰申し上げていて、訃報を受け取ることになった。

先生、ヒットの夢を見ながら安らかにお眠りください。

和達先生を偲びて

毛利 圭太郎

1月5日、和達先生の突然の御逝去の報に接し、驚愕致しました。昨年秋、先生が“私は今どこも悪い所がないんだよ”とお話しになるのをお聞きしておりましたし、また年賀状をいただいたことを思い、本当に驚きました。そしてショックと共に深い悲しみにおそわれました。先生は、何と申しましても戦後日本の気象や地震などの事業を、今日まで築き上げられました第一人者ですし、これからも御活躍を続けられ、いろいろ御指導下さることを期待しておりましたので、残念でなりません。長い間御指導いただきました思い出を述べさせていただき、偉大な科学者だった先生を偲びたいと思います。

戦後、先生はしばらく中央気象台の予報部長をされておられましたが、私はそのころ予報課の予報官でした。戦後、天気予報が公開され、世の中の復興に伴って人々の関心が天気予報に向けられてきました。この状況の中で、先生は発表する天気予報に、もっと日常生活に密着した表現をとり入れたらいいのではないかと、というアドバイスをされました。晴とか、曇り時々雨、とかだけでなく、風とか気温とかその他生活の参考になることをつけ加えてはどうか、ということでした。たとえば、きょうは風はそよそよと吹くとか、北風が強くて冷たいとか、風が強くて砂ボコリが立つとか、5月の連休のころは、きょうはいい天気なので夕方方は散歩もいいでしょう……とか、かなり多くの例を書かれたプリントをくばられたことがありました。我々予報官もなっとくして、折にふれ実行しました。天気予報の精度もありますので毎回というわけにはいきませんでした。いろいろ勉強になったことを思い出します。最近のテレビの気象情報などを見ていると、先生の御指示のようになってきていて、天気予報の内容がやわらかいというか、身近になっていると思います。テレビをみながら解説者のお話をきいて昔を思い出すことがよくあります。先生が学問だけでなく、国民の社会生活に果すべき気象庁の役割に深い関心を持っておられたことを忘れることができません。

電子計算機導入にあたって示された和達先生の御決

断に感心したことがありました。昭和31,2年ごろだったと思いますが、ある日、電子計算機の導入を決める会議が気象庁でありました。それまでに導入の可否、導入すべき機種、予算案などについていろいろ議論があり、会議は難航が予想されていました。ところが和達先生が入ってこられて、少しの議論ののち、すばっと導入をきめられました。この時の先生の御決定の見事さは印象的でした。さすがに先生は司会の御上手な方だと感心致しました。

私が気象庁長官の時、和達先生がおみえになり、いろいろ御話を承ったことがありました。その時、気象庁の仕事はどうあるべきかについてお伺いしました。先生は、気象庁は1つは、大気、海洋、地震火山などの現象をよく観測し、研究し、そして将来の状態を予測すること、2つは、これらの地球物理的な情報を基にして災害防止につとめることが大切だ、とお話になりました。はっきりとしたお話を承りたいへん勉強になったことを覚えております。

私が気象庁退職後、国会図書館に勤務していたころ、当時、学士院長の和達先生が図書館の書庫を見たいと、いって御来館になったことがありました。書庫はかなり広いのですが、あちこち歩かれ、とくに闘病記のある棚は時間をかけてゆっくり御覧になりましたことを思い出します。

先生は御趣味の広い方でした。昭和29年、東京で国際台風シンポジウムが開催され、会議のあと箱根にエクスカーションに行きました。夜の懇親会で先生はトランプのマジックを披露されました。皆さん大喝采でした。そのご私が会議で外国に行った時など、その時の参加者から、和達先生はお元気ですか、あのトランプのマジックはされておられますか、などと何度もたずねられました。先生は外国人のあいだでも有名な日本の気象界の代表者でした。

先生にはもうお会いできないと思えば淋しい気持が致しますが、先生から折にふれ御指導いただいた事を思い出し、先生のおっしゃるように、自然に親しみ、謙虚に生きる、ことを心がけて行きたいと思っております。

先生の御遺徳を偲びながら、御冥福をお祈り致したいと存じます。

和達先生の思い出

守田 康太郎

1. ノートはペンで

測候技術官養成所本科第10回生の私等が和達先生から地球物理学を教わったのは、昭和7年9月（2年2学期）からです。

先生の講義は、理路整然として格調高く、僅か14名の学生には勿体ないような感じでした。ある日、私が先生の講義を鉛筆で筆記していましたが、先生が「君は僕の講義を鉛筆でノートするのかね」と仰有る。私が慌てて「あとでペンで清書します」と申しますと、先生は「それならよろしい」とニコリなさいました。実を云いますと、「あとで清書云々」は、その場逃れの言い訳でしたが、云ってしまったからには実行せざるを得ません。そして、清書することによって先生の講義がいつそうよく理解できるようになりました。

2. 嬉しい転勤

昭和9年春、本科を卒業し輪島測候所へ赴任しました。輪島では所長事務取扱いの籾さん以下僅か3名で、気象観測通報、沿岸海洋観測、ウィーヘルト地震計保守、JGA受信と天気図作成など多彩な業務に追われていましたが、昭和11年に神戸から石井さんが所長として来任され、新人2名の採用も実現して、夜勤明けの休日には能登丘陵の山歩きを楽しむことも可能となりました。

その年の11月に中央气象台から人事異動の文書が届き、所長さんが「守田君！大阪支台へ転勤だよ」と仰有る。大阪支台の支台長は和達先生ですから、私は思わず、「ああ嬉しい」と云いますと、所長さんは「普通の人には『もうしばらく所長さんの下で働きたかったのに残念です』と云うのだが、君は変っているね」と仰有り、私は「どうも済みません」と謝りました。そして、翌日、和達先生から「貴君の来任は、百万の味方を得たような喜び」との御手紙を頂き、天にも昇る思いでした。

3. 和気あいあいの職場

大阪支台へ着任したのは、昭和11年12月でした。

大阪支台のスタッフは、広野、伊東、三宅、山本、桑野、坂田、金、唐津氏ら多士済々に松尾、軽沢、星野、作田の紅四点を加えて、午休みにはシューベルトの菩提樹を唱い、休日には生駒のハイキングを楽しむなど、和気あいあいの職場でした。

大阪支台で私に与えられた研究テーマは、「煙の都・大阪」の大気汚染実態調査でしたから、大阪市内の十数地点で捕集した大気中の塵埃について、その量を測り、顕微鏡写真を撮って実態を調べるなど、興味ある仕事と取り組んでいました。

4. 支那事変勃発

ところが、好事・魔多しと云いますか、昭和12年7月に支那事変（日中戦争）が勃発し、私は召集令状（所謂赤紙）を受け、輜重兵第10連隊（姫路）へ入営を命ぜられました。入営の前夜、大阪支台の皆さんが壮行会を開いて下さいましたが、その席で、和達先生は、渦の研究で有名なカルマン（ハンガリー）が、第1次世界大戦で研究を中断して参戦したが無事に帰国したことをお話になり、「君もカルマンのように、無事に生還されるよう祈ります」と仰有り、感激しました。

その頃、姫路師団は北支那の台兒莊の戦いに敗れて、私の友人や近親者の幾人かが、還らぬ人となりましたが、私は内地の予備隊で待機のまま召集解除となり、昭和13年の2月に大阪支台へ復帰することが出来ました。

そして、新しく与えられた研究テーマが、「超音波により霧を消す実験」でしたから、弱電専門の桑野囁託の指導下に、超音波発振機のコイル巻きに専念していました。

5. こんどは海軍

昭和13年7月、大阪支台作業室の市外専用電話が鳴り、書記の松尾さんが「和達先生、東京からです」と叫ぶ。電話に就かれた先生の緊張した御様子から、人事異動かなと思いましたが、果せるかな。先生は「守田さん！こんどは海軍ですよ」と仰有る。そして、翌

日の速達便で「支那方面艦隊囑託、第2連合航空隊気象班勤務」の辞令を受取りました。

第2連合航空隊は、昭和12年夏の支那事変勃発当時、「海鷲による渡洋爆撃」で勇名を馳せた部隊です。私はその気象班として、南京→漢口→南昌→上海と転戦の揚句、昭和16年12月に帰国しますと、大東亜戦争（第2次世界大戦）が始まり、シンガポール→トラック→ラバウルと転戦し、昭和20年1月以降はB29による空襲下の東京で勤務した揚句、海軍気象部大倉山分室（神

奈川県）で終戦の詔勅を聴きました。

6. 南極観測と和達先生

昭和31年に始まった我が国の南極観測は1956～57年の国際地球観測年（IGY）の事業として発足したのですが、和達先生は、南極観測事業の恒久化に努力され、第15次隊にはオブザーバーとして夏隊に特別参加なされ、昭和基地に2泊なされて越冬隊員を励まされました。

江戸っ子和達先生のユーモア

安井 正

私にとって、和達先生は雲の上の存在でした。只一度だけ、親しくさせて頂いたのは、1961年にホノルルで開催された太平洋学術会議に、ご一緒に出席させて頂いたときでしょうか？

ご一緒といっても、先生は正規の国費出張者で、宿舍もワイキキの真ん中にあるウェジウォーターホテルという歴とした観光ホテル。私は、NSF（アメリカ科学財団）の丸抱え旅行団の一員で、米軍の輸送機に詰め込まれて渡航し、宿舍もワイキキのはずれにある、新築とはいえクーラーもないアパートメントホテルでした。その一室で、増沢譲太郎（後気象庁長官）、半沢正男（後神戸商船大教授）両氏と3人で自炊生活をしました。

会期の真中の週末の昼休みに、木陰でハンバーガーをばくついていますと、和達先生がおいでになられ、「おいしそうに食べていますね、今日は場内のレストランが休みで、兵糧攻めですよ」と微笑まれました。

私たちは自炊ですから、レストランの休業など無関心だったので。先生に「こんなもの召し上がりますか」とお尋ねすると、「どこへ行けば買えますか」とのお話。しばらくお待ち願うこととし、ハンバーガースタンドへ走り、ハンバーガーの包みとセブンアップの缶とお渡しした。先生は丁重に礼を言われ、一緒に召し上がりました。そのときどんなお話をしたか、思い出せませんから、ずいぶんと緊張していたのだと思います。

後日、半沢正男氏が和達先生にお目にかかったところ、「このあいだのお昼、安井君に美味しいものを食べ

させてもらった」と大変お喜びで、また「あんな美味しいものを毎日食べているのかねー」と申されたこと、伝えられました。

学会で先生は、地震のセッションの最後の講演者として、チリ地震の際に観測された T-Wave についての発表が予定されていました。それまで会場では、互いに相手の異説を折伏させようと激しい応酬があり、緊張が漲っていました。私はこの雰囲気半ばに倒されながらも、先生のお話を一言一句聴き逃すまいとして、最前列の席を陣取り待ち構えておりました。

先生は、例のゆったりとした足どりで壇上の人となられ、やおら “In Japanese variety shows, the most famous artist appears last. But, I appear here only by author's alphabetical order.” と、切り出されました。会場に和やかな笑い声が起こり、張りつめた空気が一気に弛んだように感じました。私も、びっくりすると同時に緊張が解けて、先生のご講演は非常に良く理解できたような気がしました。

先生のこの冒頭の枕は、その後、国際学会のセッションの最後に当たったときに何度も使わせて頂いたし、最初に当たったときには “In Japanese variety shows, an apprenticed artist appears first” と少し変形させていただき、好評を博しました。

4、5年前の気象庁海洋課設置50周年記念パーティーの席上で、このお話を先生にしたところ「そんなことを言いましたかねー。しかし、あのときは楽しかったですね。」とニコニコされました。

当時、伊勢湾台風やチリ地震津波などが続き、先生

は心労の多い日々を送っておられたことと思われ
ます。ホノルルへのご出張で、激務から解放された束
の間を楽しまれたのではないのでしょうか。

このように、和達先生は、ユーモアのある方でし
た。私たちが叱る場合も、厳しさのなかに常にユーモ

アの香りが漂い、そのために叱られた方も傷つかなか
ったのだと思います。そのユーモアは、逆境をも
笑いに変えてしまった江戸っ子気質につながるような
気がします。先生のユーモアは、江戸っ子としての
天性のものであったのでしょう。

和達先生と地電流

柳 原 一 夫

和達先生に初めてお会いしたのは昭和22年の夏ごろ
のことだったと思う。当時大学卒業を目前に控えて気
象研に入りたいと願い、大学の先生を通してお願いし
ていたところ、会いに来いということであったらしい。
和達先生について何の予備知識もなかったが中央気象台
長という偉い人だという認識で恐る恐るお伺いした
が、ひょうひょうとしたご様子であれこれとなくお尋
ねになるので、つい打ち解けて勝手な学生の気負いを
しゃべったように記憶している。その一つに、大学の
電磁気学の講義で聞いた地電流のエピソード、地震の
地割れで地電流が寸断されると火花放電が飛んで発光
現象を起こすかもしれない、というようなこともあ
った。後から考えると和達先生は、海洋か空電か地磁気・
地電流かどれかの分野に適当かという観点からご質問
をされていたように思われる。海洋や空電については
何をお答えしたか記憶にないが、この地電流について
のおしゃべりが効いたのか柿岡地磁気観測所に採用さ
れることになった。柿岡地磁気観測所も気象研と同じ
ようなことをやっていますよということであった。

当時も今と同様地震予知が大きな問題となってい
た。世論もGHQのメモランダムも強力な推進を促し
ていた。和達先生は地電流がこれに役立つかもしれない
とお考えで当時としては破格の予算ウン百万円を
割当て全国数カ所に地電流観測所を設立しようとされ
ていた。柿岡地磁気観測所の吉松さんの地電流差電位
差異常の論文がもとになっていたのである。筆者は吉
松さんのもとで地電流観測に従事することになった
が、和達先生は遠い所の偉い人という認識でしばらく
は無縁の存在のようなものであった。それから何年か
経ったある時何の会合かしかとは覚えていないがある
学術的会合で和達先生のお姿を見かけた。おや珍しい
なあとと思ったから多分電磁気関係の会合であったらう

と思う。私のことなど覚えていらっしやらないだろ
うなあと思いながらご挨拶しようかどうか迷っている
と、先生の方から、君いまだどうしている地電流はおも
しろいか、というような意味のことを親しげに話しか
けてくださった。今までの遠い所の偉い人という感覚
がいつべんに吹き飛んで、身近の親しい人と勝手に思
い込むようになった。以来何かの席でお会いする度に
親しく会話させていただいた。

しかし、思い返してみると話題は大抵仕事と関係の
無いことであつたように思う。地電流については一度
だけ和達先生がフト思いついたように、地電流はどう
なっているの、とお尋ねになったことが思い出される。
私は、地震が局地的現象であればそれに関係する地電
流も局地的でなければならない、とすれば雨など局地的
気象に影響される地電流観測が問題でしょう、地電
流差電位も晴天時には有効と思われるが全天候型とな
るとまだ解決しなければならぬ問題が多い、という
ようなことを申し上げたと記憶している。大変そっけ
ないお答えをしたがその頃私は地電流を卒業したつも
りであった。というのも地球電磁気の大家永田先生から
地電流は泥沼だよと言われたのが効いて徐々に地電流
から足を洗いつつあつたのである。和達先生はウン
ウンと言うように聞いておられたが特にコメントはな
かったように思う。地電流泥沼論には確か笑ってお
られた。最近ギリシャで地電流による地震予知に成功し
たと伝えられている。日本でもこれを試してみよう
としている人がいる。いやすでにいろいろ試されている。
泥沼に陥ったかどうか私には定かでないが、和達先生
はどのように見られているであろうか。

先生のお優しい包容力をよいことに勝手なことば
かり申し上げてきたように思う。心からご冥福をお祈
りします。

和達先生の思い出

山田直勝

和達先生が中央気象台長になられて間もない昭和25年頃のことである。側近の者が集まって先生を中心に忘年会を開いた。先生はどちらかといえば下戸で、私も同様であった。そして参加者は女性が多かった。そんなわけで酒抜きの会であった。栄養のあるおいしい物を食べてから映画を見て御開きという趣向であった。会の名前はジョーク好きの先生の命名で「栄耀栄華の会」と呼んだ。日本橋の紅花で洋食のフルコースをとってから日比谷に出て映画を観賞をした。

その頃思ったことだが、中央気象台長職というのは孤独な存在である。人間は本来的には孤独な存在ではあるがそのことを日常生活で意識することは殆ど無い。数千人で構成されている気象界でも、組織のトップにある中央気象台長となると、やはり孤独であった筈である。忘年会シーズンになっても先生への誘いは全く無かった。先生の淋しい御心境を察してこの会を開くようになったのである。この会は私の在任中3回位開いた様に記憶しているが、先生は本当に楽しそうに振舞い、軽いジョークで会を盛上げていただいた。忘れられない思い出である。

次に先生が最も弱気になられた時のことを書くことにする。私が台長事務室主任を命ぜられて間もない頃のことと思う。当時、職員を半減させなければ達成されない様な機構改革をGHQより要請されていた。連日のように組合交渉が行われた。台長室は急進的思想を持った多くの組合員によって占拠され、役所としての機能が果せない状況が続いていた。この頃社会一般に官民を問わず、組織体の中には程度の差こそあれ、一部の尖鋭分子に煽動され暴力的なとんでも無いことが起りそうな雰囲気があった。先生は御自分の進退をかけてその対策に腐心されていた。そんなある日、岡田武松先生を訪ねられた。藤原咲平先生は篤い病の床にあったので、岡田先生への御相談を兼ねての訪問であった様に思われた。岡田先生には布川の岡田群司さんのお宅でお目に掛った。この時私は和達先生のお伴をしたわけである。往路の車中で珍らしく先生の弱気の発言を伺った。「多くの職員に辞めてもらわねばなら

ないが、その人達の生活を考えると気が重い。私は幸に辞めても直ぐに生活に困ることは無い。目鼻がついたら辞めようと思っている。」と云われた。私は驚き何と答えてよいか困った。単なる付人に過ぎない私には答えようもない内容であった。私は「先生がお辞めになったら気象界の損失は計り知れないものがあるから……」という様なことを申し上げた様に思っている。このような弱気の発言はこの時唯一回伺っただけである。

先生がプロ野球、特に巨人軍の熱列なファンであったことは有名であった。求めに応じて新聞や雑誌に時々プロ野球に関する随筆を書かれた。先生は以前から浴衣掛けでぶらりと後樂園球場に出掛けられた。当時の外野席にはスタンドが無く、土手のままであった。先生はこの外野席から観戦された様であったが、そんなある日場内アナウンスでプロ野球の熱列なファンの一人としてセントラルリーグより表彰されたことを知り驚いたと伺った。先生のお子様方からは異議があったとも伺った。この表彰を機にセントラルリーグの公式戦すべてに通用する内野自由席のパスが贈られてきた。このパスは無記名で持参人有効のものであったので、側近の者は勿論のこと台内の野球愛好者が有効に利用させていただいた。今では当り前のことだが、今から40数年前に、先生は監督の選手起用には天気予報を利用すべきと主張されていたことが思い出される。

先生が気象台に入られて間もない頃、僅か2年余りの間に深発地震に関する立派な研究を完成されたことは有名である。このことが影響してか、当時は不治の病といわれた肺結核に罹られた。しかし不屈の精神力で4年に亘る闘病に克ち職場に復帰された。このことを私自身が知ったのは昭和18年末のことであった。第二次大戦で海軍の気象隊要員として熱帯地方での勤務を終えて気象台へ復帰した時である。予報現場の夜勤で風邪を引いたが、仲々治らなかつた。検査の結果肺結核と診断された。その時藤原咲平先生の薦めで、和達先生の闘病随筆集を2冊読んだ。西須諸次というペンネームで書かれた「あくまでも希望あれ」と「療養

と生活」であった。

不治の病に罹ったと落込んでいた私は、先生の本で希望が持て、救われたのである。その後昭和24年12月から先生の側近として勤務するようになって新しい発見をし、感動した思い出がある。先生は肺結核を患っ

た人に対しては特別な感情を持っておられた。同病に悩み共に闘ってきた回復者の支えにと献身的な努力をなさった。そのようなお姿をいろいろの場面で拝見したからである。

思 い 出

吉 武 素 二

和達先輩に初めてお会いしたのは、何時だったのか記憶していない。昭和9年の春、私が気象台に入った頃は、永い療養生活を終えて、地震掛の職場に復帰されていた。文部省が虎の門の新館に移り、震災後に建てられたバラック造りの宏大な庁舎が残った。気象台は予報、通信、観測の現業部門は竹平町に、その他の部門は大手町のバラックに入っていた。広過ぎて空部屋も多く、昼休みにはピンポンを楽しんでいた。スポーツ好きの和達さんも、その仲間に入っておられた。統計掛の女の子で、御転婆娘の氏家正子さんは、手強いピンポン相手だった。お相手をした北岡龍海、櫻庭信一、高橋喜彦の諸君の顔が懐しく思い浮んでくる。氏家さんは、その後間もなく、喜多豊一君と結婚され、今なお健在で、和達さんは気象記念日などの時に会うのを楽しみにしておられた。バラック庁舎の玄関口の横に宿直室があった。夜間は、守衛の他に職員が当番で寝泊りしていた。囲碁仲間は宿直室にしけこんで、岡田武松台長に見つからないよう隠れて碁を打っていた。和達さんが地震掛の鷲坂清信さん達と囲碁を嗜んでおられるのをよくみかけた。藤原咲平先生は、そんなことには無頓着だった。当時の室内での遊びはランプ、囲碁、将棋、ピンポン、玉突きだった。特にテニスは盛んで、和達さんは、もちろん参加しておられた。藤原咲平先生、関口鯉吉先生、大谷東平さん、倉石六郎さんのテニス姿が懐しく思い浮んでくる。社交ダンスに夢中の仲間も居て、荒川秀俊さんは退庁後、ダンス靴を抱えて、あたふたと早足で銀座のホールへ通っておられた。皆が遊んでばかりしていたわけではなく、和達さんは地震の調査、研究をまとめ、気象集誌に発表しておられた。

当時の私の日記をめくって、和達さんの名前が見付かった。

昭和10年6月2日(日曜、晴)

雷の当番をした。お天気は良いのに出勤、少々憂鬱だ。お昼は和達さんにさそわれて三省堂の食堂へ行き、川瀬二郎さんといっしょに、ビーフスティキのランチを奢ってもらう。

昭和11年9月12日(土)

学士会館で、和達さんの送別会が行われる。

昭和11年9月15日(火曜、晴)

夕刻、廣野氏、和達先生を東京駅で見送る。さすが交際の広い先生、見送りは華やかだった。

私の日記に、和達さんの記事が少ないのは、私よりずっと年輩でもあり、毎日の仕事の分野も違い、仕事が終わって夜間仲間と一緒に飲みに出かけることも無かったからだろう。

昭和16年の春、大阪から東京へ帰ってこられた。昭和18年の暮、中央観象台長として新京へ赴任された。戦争中でもあり、私の日記も途絶えているし、これといった思い出も浮んでこない。防空演習に参加していらっかった姿や、応召する職員を玄関前に整列して送ったことなどが思い出される。昭和20年7月、旧満州国から帰還された。終戦後は、学士会館を本拠に、渉外室長今里能さん、若手の上松清君達が手足となつて、藤原台長を援けられ、多忙な日々を過ぎられた。昭和22年春、満44歳の若さで、藤原台長の後継者となられた。藤原台長は誰を後継者にするか悩まれたようで、毎週開催されていた部課長会で、先生のお考えを述べられ、全員の賛同を得られた。

当時は軟式野球が盛んで、和達さんはファーストを守っておられた。回を重ね、味方の勝利がほぼ確かになると、投手をつとめるのが何よりの楽しみだったように見えた。一方、組合運動は激しさを増しその対応に苦勞された。長時間にわたる団体交渉で疲れ果てら

れた姿を見かけることも屢々だった。

昭和28年秋、私は名古屋地方気象台へ転勤した。名古屋で生まれ、幼少時代を過ぎたためだろうか、名古屋に格別の愛着を懐いておられた。多忙な日々で、名古屋へ来られる機会は少なかった。電話で明日、名古屋へ行くとの連絡が入る。駅で落ち合って、駅裏の繁華街で共にパチンコを楽しんだこともあった。帰りには納屋橋の袂の菓子屋で、名物の酒饅頭を手土産に買い求めておられた。和達さんは悩まし饅頭と呼んで、子供のように燥ぎ、満面に笑みを浮かべておられた。

その頃、浜松測候所で、気象の話を中心に、月例会が催されていた。所長は窪田健次君で同席したことがあった。常連に、80歳を過ぎたと思われ、品のある老人がおられた。内田さんといって、和達さんの母堂のお兄さんにあたる。お元気で大の測候所員、お会いするといつも「清夫が……」と話されるのが口癖だった。

昭和31年12月1日、和達さんのお伴をして、大谷和夫君と岐阜へ赴いた。NHK名古屋で借りた伝助（携帯用テープレコーダー）を肩にして、岐阜地方気象台長高田玄吾君の道案内で、堀口由巳先生のお宅を訪ねた。先生は大変お元気で楽しく思い出を語られた。この時のテープは気象庁の倉庫のどこかに保管され残っていると思う。和達さんのねらいはもう一つあった。根尾谷断層を見に行くことだった。明治24年10月28日に起った濃尾地震による大断層で、世界的にもよく知られている。農家に立ち寄り、古老から当時の思い出を聞き出しておられた。歳月は流れ、曾ての大断層も雑草に掩われていた。三脚に古いカメラを固定し撮影にあたられた。カメラに合ったフィルム・バックを探すのに一苦労したと言っておられた。

昭和33年2月、長官からの電話で、測器課長佐貫亦男さんの後任として、東京に帰ってこいとのこと、終戦前に短期間だったが勤めさせていただいた職、出戻りは嫌ですと駄々をこねたものの、結局従うことになった。上京して、旧対満事務局の古いバラックでの独身生活を余儀なくされた。気晴しに山口繁雄君、北岡龍海君、清水逸郎君、女性では小山シゲさん、川畑輝子さん（旧性水野）その他多くの方々と社交ダンス

のレッスンをうけた。夏には家族も一緒に、竹平町官舎に入居させていただいた。隣の官舎には田島節夫さんがおられ、家族ぐるみで何かとお世話になった。

和達さんは電子計算器の導入には並々ならぬ関心をもたれ、今日の気象事業の姿になる基礎を築かれた。IBM704が作動し始めたのは昭和34年3月のことである。翌35年の暮、正野重方教授を中心に、気象学会主催で、国際シンポジウムが開かれた。Charney, Bolinをはじめ数値予報の第一線級の学者が多数、東京に集った。多額の経費が必要なのは言うまでもない。電子計算機室長伊藤博君がIBMと折衝し、100万円の寄附金を先ず獲得した。経理を担当した私には、後は楽々募金できた。

昭和38年3月、満60歳になられたのを期に、後進に道を拓かれ、島山久尚さんが長官に就任された。その経緯について、私に話して下さったことがある。後継者として大谷東平さんを推されたが、大谷さんは固辞され、残念乍ら承諾してもらえなかった由である。

昭和41年春、私は仙台管区気象台に転勤することになった。出先官庁の長の集る会で仙台市庁舎を訪れた。歴代の市長の写真が掲げてあるホールで、和達^{たかよし}字嘉の名を見つけた。和達さんの祖父にあたる方である。仙台市史によると、仙台市に大きな足跡を残され、明治43年4月市長退任後は、漢籍に親しまれ、「迂叟」と号し、大正8年5月死去と記載されていた。つい先日、和達さんの御長男、嘉樹さんに電話したところ、父がおじいさんの名前の一字をもらって嘉樹と命名されたとのことだった。

和達先輩の思い出は尽きない。戦後、湯ヶ原温泉へ揃って出かけ、古谷玄吾企画課長を中心に、缶詰め作業で気象業務法の原案の検討をしたことがある。向い合って、ウィスキーをストレートで飲み交したことも忘れられない。酒は強かったようにお見受けした。若くして病におかされ、それを克服し、地震や地盤沈下の研究にその名を残され、気象業務の範囲を越えて公害問題にも及ぶ数多の業務に大きな功績をとどめ、92歳の長寿を重ねられ、卒然と逝かれた。今はただ昔を偲び、静かに御冥福を祈る他はない。

和達先生と私

渡辺 偉夫

私が和達先生と直接お会いしたのは昭和37年頃だったと思う。当時仙台管区気象台の地震係長で、三陸津波の総合研究（学位論文）が完成したときであった。この論文がたまたま先生の目にとまり、ハワイで行われる国際シンポジウムで発表（代読）をしてあげようといわれた。この種のシンポジウムは今でも2年間隔で開かれているが、私はその後一昨年の日本（和歌山）開催を含めて6回ほど出席し、これが外国との交流のきっかけとなった。早速仙台から上京し、ご多忙な長官業務の合間をみても何回か論文を説明した。先生は熱心にメモを取り質問されながら聞いておられたが、立派な学者そのものという風格が今でも目に浮ぶのである。

気象庁地震課長時代にとりわけ強く印象に残ったのは、先生が何の前ぶれもなしに直接地震課の部屋へ来られたことであった。当時先生は日本学士院長であったが、アメリカ地震学会賞受賞記念講演に必要なので、地震データを写してゆきたいということであった。先生は気楽に写してゆくから、気を使わないでよいよとおっしゃられたが、私の目の前で先生がデータを写しておられたとしたら大変なことになると思い、当方で作成しご自宅までお届けすると申し出た。先生は大変ご遠慮されていたので、「私が（今の）長官や部長からお叱りを受けるので、是非そうさせて欲しい」とお願いしたところ、やっとご了解を得た。このあと、同室の勝又護君（気象研究所地震火山研究部長で退職）を交え、暫くの間雑談してお帰りになった。このときの話題は地震記録紙やデータのことが中心で、先生の学問に対する厳しさと、とくに生のデータを常に取り入れながら行う研究心と、気さくな態度に感心したものであった。

気象研究所地震火山部長時代の話である。つくばでは各研究所間の交流の行事として、著名人を招待して講演を聞く会がある。たまたま気象研究所が当番役となったとき、先生をご招待することになった。お迎えからお帰りまで、つきっきりお世話をした。この時の先生の講演題目は公害対策審議会長であったこともあって、公害問題が中心であった。先生の最後のしめくくりの言葉は公害問題の原点は「地球と人」ではなく、「地球の人」であった。この言葉は米寿を迎えられた先生の祝賀会の挨拶の中にも用いられており、今考えると、この言葉に含まれる先生の慧眼の深さに敬服させられるものがあつた。

次に先生が文化勲章を受賞された時である。当時、私は東京管区気象台長であった。よく調べてみると、先生は昭和21年中央気象台総務部長のとき、兼務として初代の東京管区気象台長であった。当時の軽部総務部長（東管）と相談し、先生の都合のよい時にお祝いにお伺いした。その時、ご自宅の応接室で約2時間近くお話をした。先生と個人的にこんなに長くお話をしたのは、後にも先にもこれが初めてである。先生の話の豊富さとスマートな話しぶりに、つい長時間をまたたく間に経過した。長居の失礼をお詫びし、お暇したが、この時の先生の楽しそうな顔はつい先日のように思い出されるのである。

以上、他人が取りあげそうもない一面を中心にまとめてみた。私はその後の研究で行きづまったとき、原点に立ちかえり生データを調べることをモットーとしているが、これは先生から教わったことの1つである。気さくな先生の面影と共に、行政官の長というより学者としての偉大さを少しでも会得できたのは大変幸せであると思っている。

著者一覧

朝倉 正
 有住直介
 池田芳三
 伊坂達孝
 磯野謙治
 今里 能
 岩崎三夫
 大田正次
 勝又 護
 川口貞男
 河村 謙
 菊池幸雄
 北岡龍海
 木村 巖
 楠 宏
 窪田正八
 倉嶋 厚
 小林寿太郎
 下鶴大輔
 須田滝雄
 須田 建
 諏訪 彰
 関原 彊
 高良初喜

竹内清秀
 立平良三
 寺内榮一
 中野猿人
 新田 尚
 根本順吉
 菱田耕造
 廣野卓蔵
 福井英一郎
 藤村郁雄
 淵 秀隆
 増澤讓太郎
 町田 直
 松尾喜代子
 松本誠一
 水野精一郎
 毛利圭太郎
 守田康太郎
 安井 正
 柳原一夫
 山田直勝
 吉武素二
 渡辺偉夫
 (50音順, 敬称略)



写真1 1935年11月 紀州蜜柑山にて、夫人（右端）と長男嘉樹氏（提供：松尾）

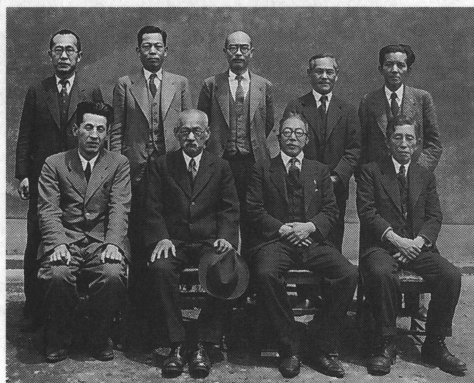


写真2 終戦後まもなく、前列左から和達、岡田、藤原、関口(鯉)、(提供：関口)

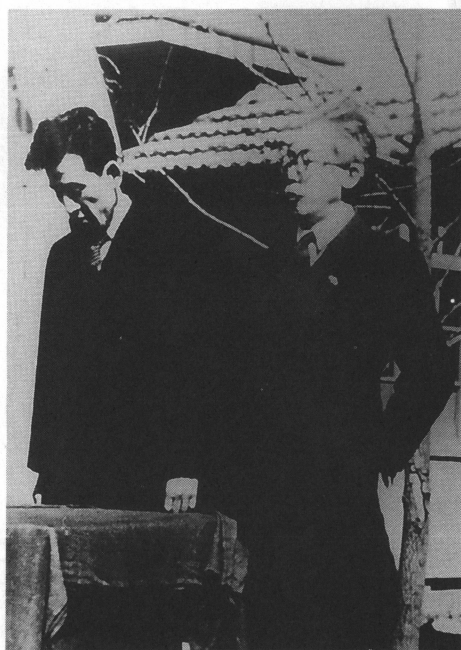


写真3 1947年7月1日 中央气象台構内にて、藤原台長から和達台長への交代の挨拶（提供：下鶴）

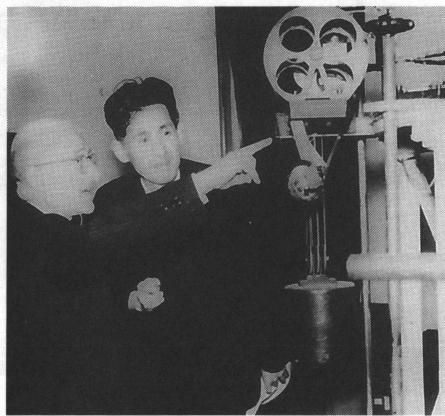


写真4 終戦後まもなく、来日のグーテンベルグ博士と気象台の地震計室にて（提供：下鶴）



写真5 1956年頃 パリにて、ロスビー博士と（提供：下鶴）



写真6 1956年12月1日 梶尾川の河原にて、左から和達、高田、吉武（提供：吉武）



写真7 1960年4月6日 昭和天皇・皇后陛下が伊豆大島に御幸の際のご説明（提供：下鶴）



写真8 1958年5月初旬 母和達瑾と新宿内藤町の自宅で（提供：下鶴）

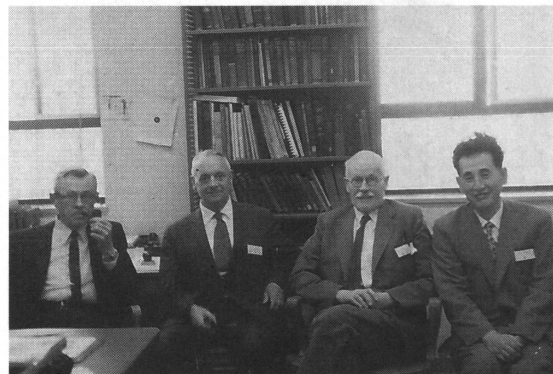


写真9 1962年 米国バークレイにて、左からバイアリー博士、ストンレイ博士、サー・ジェフリス、和達（提供：廣野）



写真10 1963年3月26日 電子計算機室の前で、左から吉武，和達（提供：吉武）



写真11 第5次南極観測隊「ふじ」船上にて（提供：下鶴）

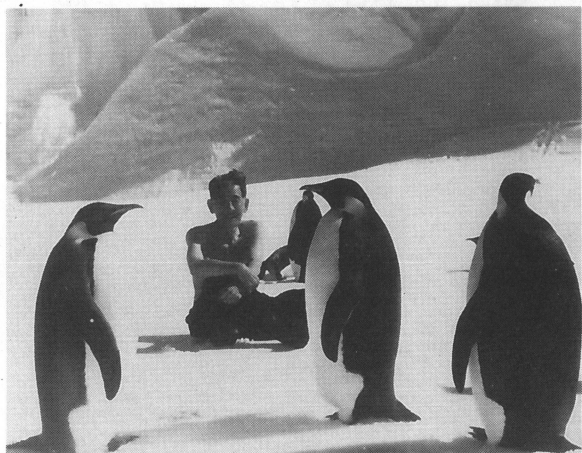


写真12 南極昭和基地付近で（提供：下鶴）



写真13 南極昭和基地視察（提供：川口）

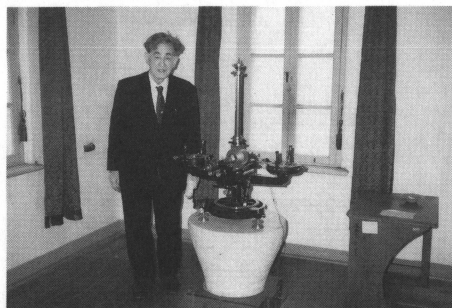


写真14 1983年2月8日 地磁気観測所シュミット型磁気儀の側にて（提供：河村）

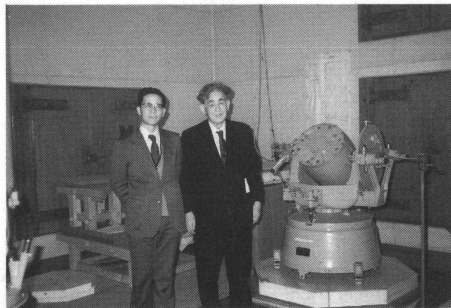


写真15 1983年2月8日 地磁気観測所旧標準磁気儀の側にて（提供：河村）

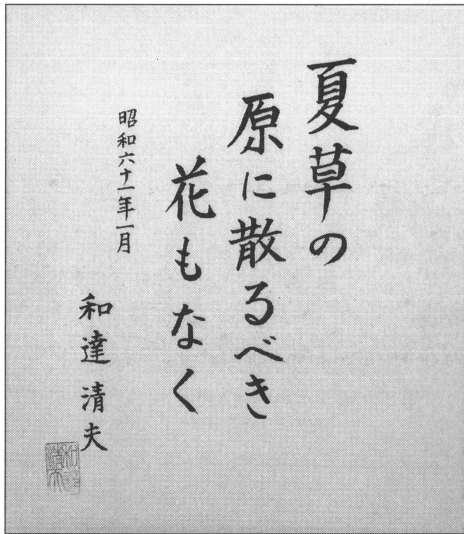


写真16 琉風之碑墓誌に記された句を後日認められた色紙(提供:石垣島地方气象台)



写真17 琉風之碑 (提供:高良)

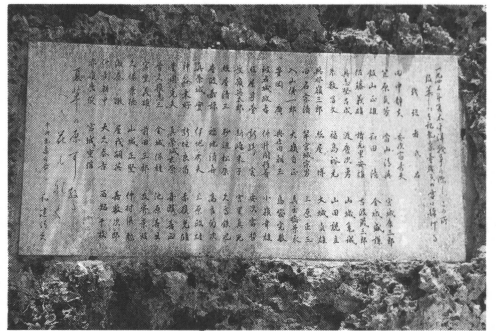


写真18 琉風之碑墓誌 (提供:高良)



写真19 1986年11月父島への飛行艇の中で (提供:勝又)

写真20 Annual Rev. Earth and Planetary Sci., 17, 1-12 (1989) の下書き (提供:勝又)

Born in a country of earthquakes

Kiyoo Wadati

1. Natural Phenomena—My Lifelong Friend

Japan is an island country in the Pacific, where the climate is mild and favoured with sufficient precipitation. The

 Lastly, I think that we should be always on alert to carry out this serious task, as our knowledge about the earth is not yet enough.



写真21 1985年11月3日 文化勲章
受章 (提供：下鶴)



写真22 1986年1月 和達先生を囲む会にて (提供：河村)



写真23 写真22と同じ (提供：下鶴)



写真24 1987年 和達先生を囲む会にて (提供：関口)



写真25 米寿祝いの際、配られた若き日の写真（提供：関口）

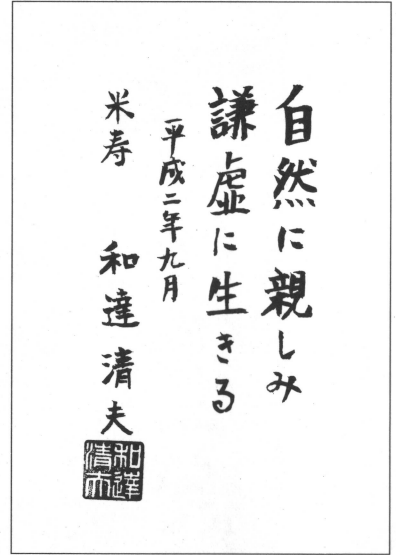


写真26 写真25と同時に配られた色紙（提供：関口）



写真27 晩年、新宿内藤町の自宅にて（提供：下鶴）



写真28 米寿を祝う会にて（提供：関口）

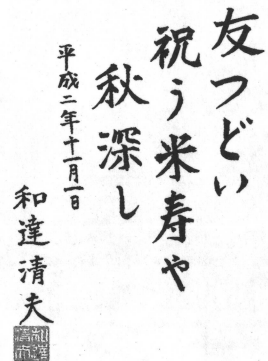


写真29 米寿に際して頂いた色紙（提供：窪田）